

京都大学大学院文学研究科・文学部

外部評価報告書

平成25(2013)年3月

はじめに

この度の「京都大学文学研究科・文学部外部評価報告書」の作成は、2009年12月に公にされた外部評価報告書に続く2度目のものである。2009年の外部評価は学外から3名の評価者をお招きして、苧阪直文学研究科長以下、11名の教員との面談、対話の形式で行われた。今回は、京都府立大学学長の渡辺信一郎氏、名古屋大学大学院情報科学研究科教授の齋藤洋典氏、大阪大学大学院文学研究科教授の服部典之氏、同榎本文雄氏の4人をお招きし、2012年12月15日に面談、対話による評価を行って頂いた。4氏はいずれも大学教育全般、そして文学研究科・文学部の専門教育に関して、高い識見をお持ちの方々である。

2013年度に京都大学は機関別認証評価を受ける。そのために文学研究科・文学部は2012年秋に、所定のフォームにしたがって「自己点検・評価レポート」を作成した。しかし私たちは作成された自己評価データによって、機関としての形式的な認証評価を受けるのみならず、学外の識者による部局独自の、より具体的、直接的な評価を受けることは、たとえ義務づけられていなくとも必要かつ有益なことであろうと考え、この度のような外部評価の機会を設けた次第である。とりわけ、昨今の大学評価においては教育活動の評価が重視されることに鑑み、今回も評価者の方々にあらかじめ、「自己点検・評価レポート」の教育に関する部分をご覧いただき、さらに当日にはまず各専攻（系）から1人ずつ、6人の学部生と院生（計12人）に対して別室で1時間余りの面談を行って頂き、その後に評価を受けた。学生の認識と教員による自己評価の対応如何をも考慮していただいたわけである。

当日の発言記録を文字化した本報告書をお読み頂ければおわかりのように、全体として文学研究科・文学部が行ってきた教育活動の実態や改善の努力は、ほぼ妥当なレベルにあるとの評価を得ることができたように思う。しかし学生のアンケートによる授業評価とその結果の活用が不十分であること、教養・共通教育と専門教育の関係（カリキュラム・ポリシーと現実）が不明確であることなど、いくつかの厳しいご指摘も頂いている。大学院教育と学部教育の関係等もなお検討課題である。評価の目的は現状確認ではなく、改善課題への取り組みにある。このことを十分に認識し、指摘された問題点の一つ一つに真摯に向き合い、改善の努力を続けて行きたい。

本報告書を作成するに際して、ご協力を頂いた4人の外部評価者の方々、文学研究科・文学部自己点検・評価委員会委員長の田窪行則氏、同前委員長の伊藤邦武氏、委員の方々、および事務長、職員にも御礼を申し上げたい。

2013年1月18日

京都大学大学院文学研究科長・文学部長
服部 良久

目 次

文学部・文学研究科外部評価の日程	1
外部評価委員会委員	3
外部評価	5
研究科長挨拶	7
文学研究科出席者自己紹介	7
外部評価者自己紹介	7
配付資料の説明	8
スケジュールの説明	9
外部評価の趣旨及び学部・研究科全体の教育の現状・概要説明	10
質疑応答・討議	20
講評	37
閉会、研究科長挨拶	44
参考資料	
1 外部評価の目的と評価項目	47
2 京都大学文学部の理念と目標に関する内規	48
3 京都大学大学院文学研究科の理念と目標に関する内規	49
4 講座配置表	50
5 学部年度別入学試験結果の概要	51
6 平成 17 年度～24 年度 大学院入学者数、進学者・編入学者数調べ	52
7 文学部が望む学生像、文学部の教育内容	56
8 京都大学文学部アドミッションポリシー	57
9 京都大学大学院文学研究科アドミッションポリシー	58
10 博士号取得者数	59
11 学生による授業評価と卒業生・大学院修了生による教育評価	61
あとがき	139

文学部・文学研究科外部評価の日程

日 時：平成24年12月15日（土）

場 所：文学研究科1階会議室

タイムスケジュール

12:00～12:50（昼食を兼ねて）

【司会進行：田窪行則 自己点検・評価委員会委員長】

研究科長挨拶

文学研究科出席者自己紹介

外部評価者紹介

配布資料の説明

スケジュールの説明

13:10～14:40

学生面談（学部学生6名、大学院学生6名）

14:55～15:50

外部評価の趣旨及び学部・研究科全体の教育の現状・概略説明

①教育の理念、目的

②教育の実施体制

③学生の受入れ

④教育内容・教育方法

⑤学業の成果

⑥進路・就職の状況

15:50～16:50

質疑応答・討議

17:10～17:50

講評

17:50

閉会

研究科長挨拶

外部評価委員会委員

評価者

京都府立大学 学長 渡辺 信一郎（東洋史）

大阪大学大学院文学研究科 教授 服部 典之（英米文学）

大阪大学大学院文学研究科 教授 榎本 文雄（仏教学）

名古屋大学大学院情報科学研究科認知情報論講座 教授 齋藤 洋典（心理学）

出席者

服部良久 研究科長・歴史文化学系教授（日本史）

川添信介 副研究科長・思想文化学系教授（西洋哲学史中世）

吉田和彦 副研究科長・行動文化学系教授（言語学）

中畑正志 全学点検・評価実行委員会委員・思想文化学系教授（西洋哲学史古代）

田窪行則 自己点検・評価委員会委員長・行動文化学系教授（言語学）

宮崎 泉 自己点検・評価委員会委員・東洋文献文化学系准教授（仏教学）

廣田篤彦 自己点検・評価委員会委員・西洋文献文化学系准教授（英文学）

横田冬彦 自己点検・評価委員会委員・歴史文化学系教授（日本史）

二塚伸和 事務長

外 部 評 価

【研究科長挨拶】

服部研究科長： 今回の外部評価の事情をお話ししますと、次年度、25年度に行われる機関別認証評価のために、私どもはすでに自己点検評価のレポートを作成しました。外部の機関による認証評価を受けるわけで、それは一種の外部評価になりますが、私どもは形とか数値による評価だけでは不十分であり、実際に研究している外部の先生方により、生のピアレビューの形で評価をしていただきたいと考えました。今回は文学研究科の教育について作成された自己点検評価レポートの部分に基づいて、先生方に教育の現場の経験を踏まえた具体的な評価をしていただきたいと思っています。

資料が自己点検評価レポートの教育に関わるのところだけを抜き出して集めた、非常に分かりにくいものになってしまって、大変申し訳なく思っております。関連するその他のことは後にもご説明いたします。いくつかの資料を合わせながら、さらにこれからの学生面談もふまえて、具体的で忌憚のない、有益なご指摘をいただければと考えております。本日は半日、長い時間を頂戴いたしますが、どうかよろしく願いいたします。

【文学研究科出席者自己紹介】

田窪： それでは、続きまして、こちら文学研究科の方から出席者の自己紹介を川添副研究科長からお願いします。

川添： 今日は、どうもありがとうございます。副研究科長をしております川添と申します。西洋哲学史の中の中世のスコラ哲学を研究しております。どうぞよろしく願い申し上げます。

吉田： 同じく副研究科長の吉田和彦と申します。私は言語学を専攻しております。どうぞよろしく願いいたします。

中畑： 中畑と申します、全学の点検評価の実行委員を務めています。専攻は西洋の古代哲学史です。どうぞよろしく願いいたします。

横田： 本学自己点検・評価委員をさせていただいております横田と申します。日本史を専攻しております。よろしく願いいたします。

廣田： 同じく文学研究科の自己点検・評価委員をしております廣田申します。英語学を専攻しております。よろしく願いいたします。

宮崎： 同じく文学研究科の自己点検・評価委員をしております宮崎と申します。仏教学、インド仏教、チベット仏教を専門としております。よろしく願いいたします。

田窪： 自己点検・評価委員会委員長の田窪と申します。言語学を専攻しております。この他に現代文化、現代史の永井教授が遅れて出席することになっています。

【外部評価者自己紹介】

田窪： 本日は、外部評価委員の先生 4 方に来ていただいております。歴史分野から渡辺先生、文学分野から服部先生、哲学、宗教学の分野から榎本先生、行動科学の分野から齋藤先生です。それでは、外部評価の先生方に簡単に自己紹介をお願いいたします。渡辺先生の方からお願いいたします。

渡辺： こんにちは、よろしくお願いします。76年に博士課程単位取得退学、学位は修士です。就職したのは76年5月に京都府立大学に就職いたしました。ずっとそのまま、今は学長をしております。専門は中国古代史です。よろしくお願いします。

服部： 本日はよろしくお願いいたします。大阪大学大学院の服部典之と申します。専門は英米文学で、イギリス文学の教授をしております。京都大学文学研究科では、4年間特殊講義を非常勤で持たせていただいております。大変意欲的な受講生ばかりで充実した授業をさせていただいております。本日はどうかよろしくお願いいたします。

榎本： 大阪大学大学院の榎本と申します。私は、専門はインド仏教の一番古い時期であるブッダ、つまりお釈迦さんの頃の仏教を研究しています。ここにおられる宮崎先生のかなり上でして、京都大学に1972年に入学し、ついで大学院に進学し、博士後期課程を指導認定退学しております。それからしばらくして、またここに博士論文を提出して学位を頂いております。そういう関係でとてもおこがましい限りなのですが、こういう委員を仰せつかった以上は、誠実に遂行したいと思っております。どうぞ、よろしくお願いいたします。

齋藤： 名古屋大学の情報科学研究科の齋藤洋典と申します。専門は心理学で現在は情報科学にありますが、学位は文学博士なので、それが何の保障になるのかよく分かりませんが、コミュニケーションや人間の行動や漢字を読むという言語活動と行為の関係を研究いたしております。京都大学は、田窪先生や前総長であられた長尾先生たちのグループと10年近く共同研究をさせていただきまして、なつかしい思いが強くなります。本日はどうぞ、よろしくお願いいたします。

田窪： 本日は事務方の方が事務長の二塚さん、総務掛長の渡部さん、教務掛長の藤森さん、それから総務掛の山本さんに来席いただいております。それでは配布資料の説明を事務長の二塚さんの方からよろしくお願いいたします。

【配付資料の説明】

二塚： それでは、席上にお配りしております配布資料につきましてご説明をさせていただきます。席上に配布している資料に関しましては、各先生方には事前にお送りしたものと同様のものを席上に置かせていただいております。

本日の外部評価の日程、その下に外部評価の目的と評価項目ということで、本日の評価関係の資料を席上に置かせていただいております。

一番上に置いておりますのが、これは京都大学文学部研究科に关します自己点検・評価レポートの全体のもので、そして、その下にこれは自己点検・評価に关しましての添付資料ということで、ローマ字で記入した資料がつけてあります。そして、その下には、ホッチキス止めで3部ほどに分かれてあります。これは学生による授業評価、卒業生、大学院の修了生による教育評価ということで、アンケートをホッチキスでとめています。それから、その下には、平成24年度の文学研究科の学生便覧。それから、文学部案内、文学部の専修案内、それと、文学研究科の専攻、専修の案内というのが右側の山

の中に置いています。そして、左側はメール等でもお送りさせていただきましたが、これは今回の自己点検・評価の評価指針及び実施対象区分ということで、本日、各先生方に見ていただきます部分は、外部評価の目的と評価項目の資料の3に示しております。それから、その下にあるのは、全体レポートの一部、本日の評価いただく項目につきまして抜粋したものを自己点検・評価レポート3の①文学部、あるいは3の①文学研究科という形で、抜き出しております。

特に資料等の過不足があれば、お申し出いただきましたらお渡しさせていただきます。

【スケジュールの説明】

田窪： 資料に関しましてはよろしいでしょうか。それでは、本日のスケジュールをご説明申し上げます。どうか、食事をしながらお聞きください。この後、食事をとっていただき、13時10分から地下の1階の小会議室に移動して、学生の面談をお願いいたします。まず、45分まで35分間、学部学生の面談。10分休んで55分から14時30分まで、やはり35分、大学院生の面談を行います。これらの学生は各専攻から1名ずつ学部、大学院、各6名の学生に出席を依頼しております。

面談内容ですが、すべて委員の先生方にお任せするということになっており、われわれの方から事務方、教員ともに出席をいたしませんし、録音等の記録も取らないこととなります。教育研究、その他、先生方の配慮の範囲内で質問をしていただき、評価の参考にしていただくようお願いいたします。その後、20分休憩を取りまして、14時50分からこの会議室で会議を行います。まず、私どもの方から、外部評価の趣旨および学部研究会全体の教育の現状、概略説明を1時間程度行って、その後、休みなく続けて委員の先生方からの質問を受けて討議を行います。その後、20分ほど休憩をおきまして、5時10分から先生方にご講評をいただいて、6時には閉会というふうに予定いたしております。多少、タイトなスケジュールになっておりますけれども、よろしく願いいたします。

スケジュールについては以上です。何かご質問とかございましょうか。よろしいですか。それでは、お食事の方、よろしく願いいたします。

【外部評価の趣旨及び学部・研究科全体の教育の現状・概要説明】

田窪： 学生面談をありがとうございました。面談の内容につきましては、質疑や講評の際に伺える機会があるかと思えます。

それでは外部評価の趣旨および学部研究会全体の教育の現状、概略説明に移りたいと思います。まず、服部研究科長の方から①の教育の理念、目的について説明をお願いします。

服部研究科長： 文学部および文学研究科の理念と目標に関して簡単にご説明申し上げます。これはお手元の学生便覧の学部が1ページ、研究科が39ページに、内規として書いてあります。簡単に説明します。一般的な理念については、全文4行ほどで、これは文学部、研究科共通です。ごらんのように、自由な学風の継承、そして文学部、文学研究科の専門は多岐にわたり、30を超える分野がありますが、その各分野の伝統を発展させながら、調和をはかること、かつ文理融合が最近強調されていますが、人文学・社会科学以外の学問分野との調和・融合をも図り、それによって人類の平和・共存に貢献するという、以上が一般的な理念と目標です。

その目標のために以下のような五つの具体的な目標が設定されています。これもお読みいただければよろしいのですが、まず言語、思想、文学、歴史、行動、現代文化に関わる学術を教授することによって、人間の諸活動の原理的な解明、その価値の問い直しを図るということです。二つ目は一方で深い専門知識と教養、他方で人間としての倫理意識といいますか、倫理性、こういうものを備えた人材育成を図ること。三つ目は、これは京都という立地および文学部文学研究科の強みの一つでもある、日本学、アジア学というものを意識した目的です。地域密着的な視点とグローバルな視点、双方から京都、日本、アジア、固有の知的遺産の維持、継承発展に寄与することですね。四つ目は地域連携と国際交流の強化、これもよく言われることです。最後の五つ目は人権尊重、環境への配慮、社会的な説明責任ということをやっております。

大学院の39ページの方も、それほど変わりはありません。一般的な理念と目標は学部のそれと同じです。以下の具体的な目標の一つ目も同じです。二つ目につきましては、研究者養成という目標に関連して、卓越した学識と応用能力を有する学術研究者および高度専門職業人を育成することを記しています。修士課程では最近、博士後期課程に進学せず、企業や自治体などに就職する修了者も増えてきました。それから、少ないとはいえ、博士後期課程を終えてから、国会図書館や研究サポートのような専門分野に職を得る学生もおります。そういう意味で、学術研究者の養成はもちろんのこと、他方で高度専門職業人の育成ということもやっております。その他の三点は学部と同じです。つまり地域密着とグローバルな視点から知的遺産の維持・継承・発展に寄与すること、地域連携と国際交流の強化、それから人権、環境への配慮、社会的な説明責任です。

以上は理念と目標ですから、はなはだ抽象的で一般的な表現にとどめておりますが、少なくとも私どもは絶えずこの目標理念を意識しながら部局を運営し、研究教育を推進

することに努めています。今後、組織の再編や制度の手直しということが必要になるかと思いますが、その場合にもこうした理念を絶えず意識し、少なくとも、この理念、目標からぶれないような運営、教育、研究の推進に心がけてまいりたいと思っております。理念、目標については簡単にご説明させていただきました。以上です。

田窪：それでは、続きまして、教育の実施体制、および学生の受け入れに関して、吉田副研究科長から説明をお願いします。

吉田：それでは2番目の教育の実施体制から先にご説明申し上げます。まず、学部の方から始めたいと思います。お手元の文学部専修案内をご覧ください。学部と大学院は少し組織が違いますので、学部を代表しているものとして、この専修案内の3ページ目をご覧ください。文学部は人文学科1学科で、そして3ページに示されていますように、六つの系、東洋文化学系、西洋文化系、哲学基礎文化学系、歴史基礎文化学系、行動環境文化学系、基礎現代文化学系からなっています。その下に合計32の専修があります。

ほとんどの場合、一つの専修は一つの研究室に対応し、専攻分属や、実際の運用の単位になっています。2年時の初めにいずれかの系に分属し、そしてその1年後に専修に分属することになっています。文学部には学生が大学に入ってから初めて出合う学問分野もたくさん含まれていますので、分属ガイダンスや研究室訪問など学生が分属に際して判断材料となるような行事が定期的に設けられています。

文学部の教育目的として、「人類の思想や言語文化、歴史、行動、さらに文化全体にかかわる学術を教授する」とありますが、それを達成するために各系や専修において多様な授業が提供されています。どの授業も基本的に文学部の全ての学生に開かれており、所属専修以外の提供科目であっても、卒業に必要な自由選択の科目として認定されます。また専任教員のほかに必要に応じて非常勤講師が雇用されています。科目の履修については、ガイダンスを通して一定の助言はなされますが、できる限り学生の自主性を尊重するように卒業論文において学生が主体的に選んだ研究テーマが、身を結ぶように指導しています。

続きまして大学院の方ですが、お手元の講座配置表が組まれている資料、「文学研究科」3Bという資料の6ページをご覧ください。お分かりになるでしょうか。

少し学部の場合と名前が変わりまして、文学研究科から直接五つの専攻に分かれます。それは、文献文化学、思想文化学、歴史文化学、行動文化学、現代文化学からなっています。以前はそれぞれの専攻に人文科学研究所の17名の教員が協力講座として加わっていたのですが、2年前、平成23年度以降はこの講座表の下の方にあります、多元統合人文学という一元化された協力講座のもとに文学研究科の授業を担当される、すべての人文科学研究所の教員が配置されています。現在では26名の先生です。また、専攻横断的なポストとして、外国人客員教員と国内客員教員5名がその下の統合文化学講座に配置されています。

文学研究科はその教育目標である「人間の諸活動の原理的な解明や人類の文化全般に

ついでに「多角的総合的探求」、それを推進するために人文学の総体を教授するカリキュラム編成を心がけて来ましたが、しかしながら、昨今非常勤講師手当の予算削減が大学の中で進んでいます。大学本部の方からは、「どうして人文学の総体を教える必要があるのか」という問いさえ投げかけられます。「理科系の研究室のようにそれぞれの専修で具体的なプロジェクト達成のためのチームを編成し、それが達成したらまた別のプロジェクトを企画すればよいのではないか」、といった声も聞かれます。しかしながら、何とか人文学の知的遺産を維持継承、発展に寄与できるよう、苦勞しております。

続きまして3番目の学生の受け入れについて説明したいと思います。お手元の小冊子京都大学大学院文学研究科文学部案内の45ページをご覧ください。45ページの一番上に学部年度別入学試験結果の概要が示されています。平成20年度から24年度までです。文学部は現在前期だけで後期入試を実施しておりません。募集人員220名に対して例年、ほぼ3倍程度の競争率です。後期がないことを考えますと、この競争率は決して高いとは言えません。

その理由は文学部に魅力が欠けているから、というよりも他の理由があるように思います。一つは数学の配点が決して低くないことと関係するように思います。さらに、京都大学の数学の入学試験は非常に難しいとも聞いております。文学部のアドミッションポリシーはどうなっているかという、「文学部での活動には単に文系の範疇に含まれるものだけでなく、高度な数学的手法や実験的手法また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は人文学の諸学問に関してこうした幅広い能力を備え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することを目指しています。そのために、求められる学生は過去から現在に至り、さらに未来まで伸びる人類の営みについてさまざまな角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために論理的にまた歴史的に創造性豊かな考察を展開することのできる能力を持つ者が望まれます。」以上の理由から、文学部ではセンター試験によっては、総合的な基礎学力を学生が有していることを求め、さらに個別学力試験では、国語、外国語、地理、歴史と並んで数学を課すことによって、思考力の柔軟性と論理性を問うことにしています。このように人材獲得のための明確な方針が示されていますが、一方で数学は苦手であるが、人文学志向が強い受験生を獲得する方策も必要になってくるかもしれません。昨今、国立大学協会や文部科学省から入試の複数化の要望がありますが、文学部としても今後複数入試や特色入試について検討しなければなりません。その場合、これまでとは違う、新しい観点からの学生受け入れの取り組みを考えなければいけないのかもしれません。

続きまして、大学院入学試験の作成にあたっては、専攻ごとの共通問題の出題や出題採点が原則として複数の教員の協議を経ている点で、厳格で透明性の高い実施体制が取られていると判断できます。今のこの小冊子の46ページと47ページ、その隣のページをご覧ください。まず、46ページですが、平成22年度までは、修士課程の入学定員が126名、博士課程については47ページに示されていますが、その半分の63名でした。

47 ページの左上の博士課程編入進学者数は 63 名という定員をほぼ満たしていたのですが、修士の方、46 ページの修士課程入学者は 126 名という定員に達することは一度もありませんでした。そして平成 23 年度に定員を適正化して、修士 110 名、博士 55 名にしたのですが、修士の方は依然として定員に満たない状況です。特に五つの専攻のうちの文献文化学専攻では 36 名という定員をかなり割っております。文献文化学専攻には中国哲学、仏教学、インド古典学、西洋古典語学文学、イタリア語学文学といった一般にはやや馴染みのない、研究者人口の少ない専修が含まれているのがその原因かと思われます。ただ、他の大学にはあまり見られない京都大学文学研究科の特徴をよく代表している専修が含まれている専攻ですので、入学者定員充足のためには、当該の専攻の自助努力だけでなく他の専攻、専修からのサポートも必要かと考えられます。以上が学生受け入れについてです。

田窪： それでは続きまして、教育内容・教育方法および学業の成果について川添副研究科長の方からご説明をお願いいたします。

川添： よろしく願いいたします。今、吉田さんが教育の外形的な面とっていいところをご紹介してくださいました。私の担当するのは、お渡しした評価項目でいうと④と⑤で、資料との関係で言いますと文学部と文学研究科と二つに分れております。自己点検評価レポートの「観点」という形で分かれています。私が今から少しご紹介するのは、観点 5-1 以下、それから観点の 6 になります。文学部も文学研究科もその部分に関して、そこに報告したことに関して少しご説明をしたいと思います。

関連した資料がそれぞれありますが、この部分が一番長くて、つまり教育の実態そのものについてかなり細かいことが書かれています。ただ、このフォーマット、こういう観点はいわばお仕着せのもので、自分たちで作ったわけではなくて、それに合わせて作っているのでもいろいろ分かりづらい点もあるし、何が求められているのかよく分からない点もあって、書くのはすごく大変だった面もございました。非常に広範囲にわたりますから、私としては以下少し細かい個々の論点に逐一コメントするのではなくて、教育内容と方法に関してわれわれが自分たちのあり方としてどういう点に特徴があるか、どういう点に問題点があるのかについて申し上げたいと思います。

まず、学部と大学院とを分けて申し上げるべきですが、最初に全体に共通して言えること、それが両方の在り方に関わるので最初に共通した点を申し上げます。一つは、吉田さん紹介して下さったように、系に分かれて大きいくくりがありますが、実際上はその系の元にある小さい専修、あるいは研究室というのですが、それが教育の単位として実質的に機能しています。文学部に入学した学生は、2 回生になるときに系という大きなくくりに入って、3 回生になったときに細かい専修、研究室に分属します。ですから、われわれの京大の文学部・文学研究科の教育の内容、在り方、方法を含めて特徴は少人数教育を徹底しているという点にあるというべきだろうと思います。

全体として語学を重視しているのは共通していますが、実際上の具体的な教育の内容

については、かなりの程度、各専修、各研究室に任されているという特徴があります。統括してこういう方針を掲げているなどの具体的な教育の中身や傾向は強くないと思います。それで、もちろん、ほかの大学でも同じように、講義や演習や実習など異なるいろんなタイプの授業が行われています。それはそれぞれの専修の学問の特質に合わせて、バランスよく配置するというのを、専修に任せて組み立てられています。

それから、具体的に言うと、この学生便覧を（これは後半が文学研究科ですが）ご覧いただくと、他の資料にも要約的に書いてありますが、5ページに文学部の場合は単位表というのがあります。文学研究科の場合には43ページに修士課程の単位表があります。そこをご覧になると分かるのですが、両方にわたって一般的に言いますと、それぞれ確かに小さな専修に分かれています、それぞれの専修にかかわる必須単位の割合が高くないのです。比較的に自由選択科目が多く、例えば5ページを見ますと哲学専修ですと、卒業のために全部で88単位が専門科目として必要ですが、卒業論文12単位を除くと、必修が32で自由選択が44という構成です。それは専修によって細かい違いはありますが、全体として自由選択科目、つまり自由に学生が選べる科目の割合が高いと言っているのだと思います。これは他の大学の文学部がどうなっているかというのを十分検討した訳ではなくて一種の伝統だと言っていると思います。同じことが修士課程でも言えます。修士課程は30単位を課していますが、その割合についても、専修が課している必須科目が高い訳ではありません。ですから、学生がそれぞれの専修に属してはいても、極論すれば哲学に属していて哲学を出るために必要な単位を32取ると、あとは全部歴史の科目をとっても卒業できます。制度上はそういう設計になっています。もちろん実質上はほとんどそんなことはなくて、やはり関連の深い授業をとって卒業していると考えられます。ですが、制度上の組み立て、考え方の方向性は、京都大学が自学自習、学生が自分で学ぶ自分で習うという理念を掲げておりますが、文学部・文学研究科も制度的にそういう理念を信頼して、学生のそういう自主性を信頼して、制度設計をしていると言えらると思います。

それは先ほど吉田さんご紹介いただきましたが、それぞれ専任教員のカバーできる範囲というものは限られているので、それぞれの専門領域、ディシプリンを学ぶために必要な分野全体を覆うことはできないので、多様な授業を提供するために極めて多くの非常勤講師を学内外から用意をするという努力を重ねています。そういうことをすることによって、二つの違ったエレメントですが、学生が自由に選べる環境を整えていると言ってもいいのだらうと思います。

それから、もう一つわれわれの教育内容の大きな特徴は、この「学生便覧」は1冊で文学部と文学研究科の両方です。先ほどのこの「文学研究科・文学案内」も文学研究科も文学部も一緒の案内です。この両方で非常にコンパクトになって見やすくいいのではないかと、というのはわれわれの考え方かもしれませんが、少し前までこれは分けていました。ずっと前は1冊でしたが、一時期から文学部と文学研究科は学生が見れば2冊

に分けたほうが良いということで、そうしていました。しかし、今年からは1冊にしました。これはサイズの問題で、シラバスをWEB上でしかオープンにしないので、2冊にするには薄すぎるということかもしれませんが、またもう一度理念的なあり方を象徴しています。つまり、文学部の開講科目一覧と文学研究科の開講科目一覧をご覧になると、一見するだけでは分かりづらいですが、相当な部分が同じ授業です。つまり、学部生も、博士後期課程の学生も（博士後期課程の学生は単位を取る必要はないのですが、実際は演習や特殊講義などたくさん授業に出ます）、そういう授業が全く同じ中身なのに学部生の2回生、3回生と博士後期課程の学生が同じ授業を聞くことを良しとしています。これも長い伝統です。この点が、京都大学の文学研究科でいつから始まったが存じ上げませんが、相当昔からこういう体制をとっています。これが特徴の最大のものの一つだろうと思います。

それから一般的な学部、文学部両方に関係する特徴は、やはり卒業修了の単位、もちろん博士課程は博士論文ですが、論文を学習のプロセスの最後に置いていることで、それを通じてそれぞれのディシプリンに必要な知識や能力を修得させることを極めて重視しています。単位数で言うと88単位のうちの12単位ですが、たぶん学生にとっては、私自身もそうでしたが、極めて重い作業ですし、そこに大きな精力を注ぐことを求められますし、その課程こそが教育だ、と考えられています。その点が大きな特徴の一つだろうと思います。

ただ、この点に関して最近の傾向ですが、学部の卒業論文から修士論文にかけて、昔は教師は放ったらかしだったのですが、最近は相当きめ細かい指導をするようになって来ました。それはどの教員に聞いてもそう言います。学生も求めているし、そういう必要性を教員側も感じている、と言っていいのだろうと思います。昔に比べると学生は頻繁に、論文を書くための指導を受けにやってきます。そういう傾向は非常に強くなって来ています。良し悪しではなくそれは事実としてそうだと言っていいのだろうと思います。論文を重視させる制度は昔からですが、それに立ち向かう学生の側も受け入れる教員側も、変わって来ていると思います。それが学部と大学院に共通してみられる教育のあり方の特徴だと思います。次に少しだけ、学部と大学院とにそれぞれかかわっている事柄を少しだけ申し上げます。

まず学部ですが、ご紹介があったように、文学部として卒業のためには共通科目、昔の教養科目といったものですが、それを課していて、同時に専門科目は88単位です。その全体像は学部の場合でしたら、この学生便覧の4ページにその構成が書いてあります。1、2回生が教養で3、4回生が専門という考え方は京大全体としては捨て去られてはいるはずで、共通教育と専門教育のあり方は、1年生から専門教育をやることもできるし4年生に共通教育を学ぶことができる体制を今はとっています。しかし、文学部の場合には、現実的には少し増えて来たとはいえ、1回生が取れる専門科目は多くないですし、2回生もそれほど多いとはいえない。そういう体制も大きくは変わっていないかもしれ

ません。昔に比べるとずっと増えたと思いますが、それも専修によって考え方がいろいろ違って、統一的に考えられているのではありません。そういうコンセンサスが文学部全体の中にあるのではなくて、専修や系の考え方の中で1、2回生にどういう専門教育を施すかという考え方は違いますし、十分に文学全体として統一された考え方があるわけではありません。その点が一つあります。

その点と関係して、その学生便覧の4ページをご覧になると、全学共通科目にはA、B、D、E X、C（これは来年からシステムが変わりますが）、いくつかのパラエティを持った群に分れていて、その中にどれをどれくらいとって、全学共通科目として52単位が必要だと決めて学生に課しています。これは先ほどの専門教育における必修単位が少ないというのと、基本的に同じ考え方が貫徹していて、どの科目を必ず取れという縛りがきつくないです。つまり、例えば、人文系の学問は文学部に入ってやるのだから共通教育科目としては、理系の科目をもっとやれとかいう傾きをはっきりと示しているわけではなくて、比較的学生の興味に合わせて勝手にというのか、自由に取ってください、という体制をとっています。

ですから、共通教育科目と専門科目との間の関係を考えても、その全体をどういうふうに組み合わせるかには統合的な視点を持っていないというべきかもしれません。その点については、要するに専門に入っても必修科目が少なくて自由に学べる。共通科目も何を取るかは比較的自由だという体制を取っています。全体の4年間を通して文学部は文学部の学生に対してカリキュラム上の縛りを弱くしているというべきだろうと思います。

それから学部にとっての問題は先ほど申し上げたことと同じで、多くの専門科目は3、4回の学部生にとって大学院の授業と同じであるということがどういうふうに考えられているか。それが望ましいかどうかについては十分な議論をしておりません。そういう体制の作り方、授業の組み立て方については、議論がまだ進んでおりません。ただ、後のところでも少し言いますが、次の学業の成果は評価項目⑤としてお話をしますが、ここでいるんなアンケートを最近は取るようになっていて、学部生に対する満足度というか、そういうものを調査すると、低いというわけではないようです。学部生にとって大きな不満があるという調査結果は、数字の上では出て来ません。そういう意味では大学院の科目と学部の科目を共通にしていることについては、大きな問題を学部生側は感じていないのかもしれませんが、あるいは、それについてはまだ十分な吟味がされていないというべきかもしれません。というのは、後で申しますが、まだそれほど満足度、その他については体系的な調査をやっているとはいえないからです。その点が教育内容、方法について、学部の方から見た場合の申しあげているところです。

次に、大学院の方から見た場合に申しあげるとは、同じ問題になりますが、先ほど吉田さんご紹介になったように、前とは違って多くの修士課程修了者が博士課程後期まで進まないで就職をするという状況が生まれていることです。それはほかの大学院で

もほかの大学でもそうですし、京大の文学部でもそうです。そういうあり方の変化、つまり昔はマスターに入った学生はほとんどドクターにまで進むのが普通だと考えられていた時代と比べると、大学院の内部的な修士課程と博士後期課程のあり方が実質、違って来ているといえると思います。しかし、その点に対応したシステムを持っているかどうかは、これもまだ検討しておりません。

先ほど申し上げたように、修了するために修士課程は30単位が必要ですが、博士後期課程はそういう意味の単位は必要ではなく、毎年の研究報告書を提出して指導を受けることによって、うまくいけば3年間のうちに博士論文を書くということで評価をされます。現在でも博士後期課程で博士論文を書いて、博士号を取った上で就職するごく一部の学生はいますが、必ずしも多くない。そうすると、修士課程を出た学生と博士課程を出た学生の進路は大きく違っている現実があります。それに合わせた教育課程、カリキュラムを持っているかということ、もちろんそういう区別はありません。実際上は個々の専修の教員たちが、相手の学生に合わせて適切な指導を行っているという違いにとどまっています。これもいいかどうか、それは問題とすべきかどうかは分かりませんが、そういう一つの事実に対応した問題があるのかもしれない、という指摘にとどめます。

それから、教育内容、教育方法について、お渡しした資料の中には記載がなかったと思いますが、大学院との関係で少しご紹介しておきたい点があります。それは、系ゼミナールというものの開講です。具体的には学部の開講科目一覧表で言いますと、33ページになります。その学部共通科目として一番上に哲学、基礎文化学へのゼミナールがあります。担当者としてそこでは5名の名前が挙がっています。そういうものが現代文化学系も含めて10個近く開講されています。これは4年ぐらい前から始まっています。その担当者は実質上はPDです。ドクターを取ったあるいはドクターを欠いている学生もいますが、通常の博士後期課程3年を修了した学生というか、若い研究者の方たち、しかしまだ定職がない方々がこういう形で、1、2回生向けに自分の専門を分かりやすく話すという授業を開講しています。これは後で申し上げますが、一種のOD問題の対策の一つでもありますが、それだけではなくて学部生の教育としても非常に評判がいいようです。学部生にとっては割と年齢の近い先輩たちの話を研究の実態に触れながら聞けるという授業になっています。これは、学部と大学院の両方にかかわる一つの在り方です。

もう一つの点は全てではありませんが系ゼミナールのいくつかについては、プレFDと位置づけています。先ほど申し上げましたように、担当者はまだアカデミックポストがない若い研究者です。そういうPre-Facultyです。Facultyになる前の人々に対して、一種の授業のやり方の訓練の場という位置づけをしています。これは、いろんな形で、単に授業をやるだけではなく、その担当者がお互いの授業を必ず聞いて、お互いに批判をしたり、それから、前期が終わったら全体で反省会をやったり、そういうFaculty development、の場としても利用されています。

これは文学部全体の授業でもありますが、広い意味での教育です。つまりODまで含めた教育としてそういうことを試みています。これもたぶんこのフォーマットの作り方の中で、どこにも書きようがなかったからでしょうね。ないですよ。

田窪： ないです。

川添： ないですね。どこかで触れるべきだったと思ったのですが、僕が担当してもう一度見てみるとないと思ったので、口頭ですが申し上げておきます。以上が評価項目の④の教育内容、方法に関する点でございます。

もう一つ私の担当評価項目⑤で学業成果という点ですが、これも大学院と学部にもまたがって一般的なことを申し上げたいと思います。これは、先ほど申し上げましたように、昔からやっていたわけではなくて、平成19年から文学部文学研究科では学生による授業評価、それから卒業や修了時出ていく学生に対して、自分が受けた教育についてアンケートを取るということを実施しています。その資料は最近のものだけをお渡ししておりますが、WEB上では過去のものも見るができます。そういうことを実施していますが、その結果、数字的にはおおむね満足だ、という評価を受けています。学生の満足度は高いと言っていいと思います。さらに、ごく最近になって、こういうことも外部評価でも求められるわけですが、単に学生の評価だけではなくて卒業生や就職先の方々、企業の方々も文学部の学生をどう評価しているか、そういうことも調査しろという求めがあり、少しやり始めました。今年の9月にキャリアガイダンスを東京で開きまして、さまざまな企業の方々においでいただいて企業説明会のようなものを主催してやりました。そこに来られているような文学部の先輩たちからアンケートを取ることも始めています。その結果も、まだ単発とか断片的なものにすぎませんが、おおむね満足すべき評価が出ています。

ただし、学生による授業評価も各系で一つの授業だけ、つまり全授業について学生の評価をやっているわけではなくて、ごく一部の授業についてだけ学生の授業評価をやっていますし、アンケートの回収率もそれほど良くはない。ですから、学生が在学中に受けた教育に関してどう思っていて、どういう評価をしているかについて、十分体系的な調査をやっているとはわれわれとしては言えないと思います。それは今後の課題かもしれません。それは、外部の、つまり企業の方々の文学部に対する評価についても同じことが言えると思います。

それから、あまり時間がないので少しはしよりますが、先ほど冒頭に申し上げましたように、教育の非常に重要なポイントとして論文を書くことを課しています。その卒業論文や修士論文やもちろん博士論文、それらについてどうかということです。それについては、これも資料の中に書いてありますが、どれも優、良、可でいうと標準以上の評価がなされているのが9割以上を占めます。そういう意味では、教員の評価としては十分満足できる論文を学生たちは書いている、という点数が出ていると言っていいと思います。ただ、この中に書いてありますが、ごく一部には、これも昔に比べるとというこ

とかもしれませんが、論文や修士論文のクオリティが落ちているのではないか、という印象を述べられる場面がないわけではありません。それは統計的な資料ではないので、教授会に出される点数としては、どれも統計的には満足すべき結果がトータルとしては出ていると言えます。

それから、学業の成果の一つとして、どういう進路に進んだかということですが、これも学部の卒業生、それから修士の卒業生がどういう企業に就職したかは、お渡しした資料の中に出ています。学部の卒業生は約半数以上が就職します。修士の修了者は3分の1ぐらいが就職するのが現状ですが、出版社や報道関係といった文学部の学問とどこか密接につながるような、あるいはそうであると考えられるような職種がかなり選ばれていると言えると思います。もちろん全く関係ないこともあります、かなりの割合でそういうことが言えると思いますので、文学部の学問をやったということが、学生たちの将来にとって有益な形で成果となって表れている、就職の面ではそういうことが言えるだろうと思います。

以上が、学業の成果について学部、大学院を通じた全体的な論点だと思います。最後に申し上げておくべきことは、先ほど言っただけのOD問題です。その点については十分報告の中では書かれていません、というかはっきりとぼやかされて書いていると思います。やはり重大な問題で、博士後期課程に進学した学生のうちの45%から60%が博士号を取得しますが、その後どうなったのかについて組織的な調査をやったことはない、と思います。つまりどういう形でその後の人生を送っているのかということについて、もちろんそれぞれの専修は自分たちが送り出した学生については強い関心を抱いているに違いないと思いますが、文学部全体としてそういう問題を専修を離れてトータルに考えて十分な形で調査したということはありません。これは、どう考えるべきなのか、問題なのか問題でないのか、その辺から考えるべきことかもしれません。私の方からは以上です。

田窪： 私の担当は進路・就職状況ですが、今の川添副研究科長の説明の中に全て含まれておりました。私の分もやっていただいたということで、他の委員の方から補足説明とかありましたら、残った時間で伺いたいと思います。どなたかおありになるでしょうか。横田さん、いかがでしょうか。

横田： 特になのですが、京大の場合は授業というだけではなくて、周りのいろいろな学会や、そういうのも含めて院生は結構自発的に動くというところがたぶん彼らの研究能力を高めていく上で、隠れた条件になっているのではないかなと思います。そういうようなのが結構あってそれをやっているうちに、ここには出て来ませんが、プラス要因になっているかな、と個人的にですが思いました。

田窪： ありがとうございます、中畑さん

中畑： 特にありません

田窪： 廣田さん

廣田： 特にありません

田窪： 宮崎さん。

宮崎： 特にありません

【質疑応答・討議】

田窪： それでは、引き続き質疑の方に移りたいと思います。まず、お一人ずつ簡単に発言をしていただいて、そのあと自由に討論、質疑ということで行いたいと思います。まず、渡辺先生の方からお願いできるでしょうか。

渡辺： 全体的な感想だけです。私たちの学部、大学院の頃の学生だった頃と比べるとすごく教育に熱心に取り組まれている、という感想をまず持ちました。中身にはいろいろと問題があると思いますので、少しまた後ほど議論したいと思います。全体としてはそういうことです。

田窪： では、服部先生。

服部： 学生の聞き取りの中でも何度かでしたが、先生方からも同じように「昔と比べると、というフレーズがよく出て来まして、私の印象としては京大も変わって来たなという感じです。このような会合を開かれること自体がすごいことなのかもしれません。きめ細かい指導をなさっている、それから論文を重視されているなどのご説明を聞くと、伝統を大事にしながらかも変わらないといけないという切実さが伝わって来ました。個々にはいろいろと聞きたいところもありますし、出口問題のことも気にはなっております。それはうちの大阪大学も同じことです。しかし、いろいろと工夫をなさっていて、様々な新しい取り組みをなさっていることを高く評価したいと思います。

田窪： 榎本先生。

榎本： 先ほど吉田先生が「数学が学部入試にあるが、数学はできないけれども人文学に秀でた人を採る方法も考えている」と仰っていました。大阪大学の文学部は、以前は学部入試に数学はなかったのですが、最近は数学と地歴を選択にしていまして、数学を取る人も少しはおります。そういう意味では、数学を必修にしておられる京都大学の文学部は、私は京都大学文学部出身ですが、ある意味では羨ましいなと思いました。

それからもう一つ、卒業生アンケートもされているということも良いことだと思います。

ただ、特に一つ気になったのは、大学評価基準には観点が1から11までありますが、今回はその中の観点の1から6までに評価項目が限定され、資料も1から6以外は頂いておりません。そこでお聞きしたいのは、この観点の7とか8、例えば、FDとかハラスメントとか、そういう項目が評価項目に入っていないのですが、これらはどうして外されたのか、ということです。他にも聞きたいことはあるのですが、大きなところでまずこの点をお聞きしたいと思います。以上です。

田窪： 7番、8番を外したの、一つには時間的な制約ということがありまして、主に教育

関係の方でご判断いただきたい、評価していただきたいということで、優先順位順でこの六つを取り上げました。もちろん最初は全部の項目ということも考えたのですが、それは時間的に無理であるということで、こちらの方で教育に直接関係のあるもの、あるいは出口に直接関係あるものということで、委員会の方でこの六つの項目にさせていただきました。よろしいですか、斎藤先生、お願いします。

齋藤： 質問ではなくて、このあとのディスカッションの時に分けて考えなければいけないと思うのは、京大の問題と人文科学の問題とそれから日本という国が直面している問題が、重なっている部分とユニークな部分に分けなければいけないのではないかと、ということです。もう一つは、この評価という課題が決まっているので、その評価に対してどう応答していくか、という技術的な問題と、先の理念にかかわる部分をどうやってすり合わせていくのか、ということが大事なのではないか。

私はあるスポーツにかかわっているのですが、100人以上いる部員を抱えてその部員たちの士気を高めていくためにはやはり勝たなければいけない。勝つためには、いったい何が必要か。その時に勝つのがこの次の試合なのか、このリーグなのか、あるいはそのあとのもっと大きいステージで勝てばいいのか、ということを考えざるを得ないし、自分が考えるだけではなくて選手に向かって選手の士気を高めるようなことを言わなければいけない。そういう観点で自分の考えたところを申し上げたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

田窪： それでは、個々の項目について討議すべきこと、質問等がありましたら、よろしくお願ひいたします。ご自由に発言をお願ひいたします。

渡辺： バラバラになるかもしれません。年寄りからということで口火を切らせていただきます。一つは観点の2-1-②のところ。全学共通教育科目と専門科目との関係です。先ほども説明がありました。カリキュラムポリシーの1のところでは4年間で学ばせる、と書かれていたと思います。分析結果のところにも出ています、状況のところにも書いてあります。「全学共通科目は2回生ままでに履修し」と書いてあります。これはカリキュラムポリシーの4年間くさび型履修の在り方と2回生ままでに履修させるという、これも新入生ガイダンスや文書を通じて指導していると書いてあります。ここはポリシーとのズレがあって、どちらが基本的なのか、ということが一つです。

もう一つは同じところ。教養を専門基礎と位置付けると書かれています。専門基礎と位置付けるということはもう一つよく分からない。つまり、専門課程の基礎として位置付けるのか、あるいはもっと教学全体の基礎だということなのか。人間としての力量をつけるためのものなのか。つまり、全学共通科目の文学部の中での位置付け方ももう一つ分かりにくい、取り方と同時に中身もですね。

それからもう一つは意思決定プロセスという組織間の連携です。つまり、教養教育、全学共通教育機構と文学部がどういう形で連携を取りながら意思決定をして行かれるのか。そこのところの分析、状況がもう一つ見えにくい。現状が分るように教えていただ

ければありがたいと思います。

田窪： 以上3点いかがでしょうか。

川添： 2番目の点については、僕自身が検討していないと申し上げたものです。つまり理想的にはもちろん4年生までかけて共通科目をとることは制度的に可能になっていきます。一つにはカリキュラムポリシーで論文を重視するということがあるので、それに集中するにはどうしてもなるべく専門科目のための時間を多くとってほしいという気持ちも片一方ではあります。そこは十分に練った上でカリキュラムポリシーと実際の運営の仕方をつなげられているかという、僕は個人的にはそうではないとしか言いようがないですね。

田窪： 教養科目の位置付けについてはどうでしょう。

服部研究科長： 専門教育にとっての教養・共通科目の意味を考えることですね。専門基礎科目という表現がありますが、専門基礎という概念は、理系学部、たとえば工学部にとっては学部専門教育に必要な数学、化学や物理学を1回生から学ぶ、という明確な位置付けがあります。しかし、文学部の学生は、幅広い教養科目を学ぶことが専門教育を受けるための基礎となるという位置付けにとどまっています。

川添： すいません、専門基礎という言葉はどこに出ていますか、こちらのレポートの方ですか。

田窪： 2-1-2のところですか。

渡辺： 「状況の中に幅広い教養を得ることが専門教育を受けることにつながる」。

服部研究科長： だから専門基礎という言葉、それは使っていないわけですね。

田窪： 2-1-2の優れた点というところにも、「教養教育を、専門教育を受けるための基礎と明確に位置付け」とあるので、これは専門基礎というのは専門教育のための基礎と位置付けて優れている点と判断をしたのですね。これは、教養教育における専門基礎をより深い一般的な思考力を身につけるとかそういう位置付けではなくて、専門の基礎と位置付けているのがどうなのかというご質問だと思います。

服部研究科長： 要するに学生が3回生からは、かなり細かく区分された専修に属する。それで共通教育、教養教育は、あらかじめ広い視野から自分の希望する専門分野、分属専修について、その選択のプロセスも含めて考えられるように、自身の選択する専門の隣接分野や、分属専修以外の分野をも広く学習する、その意味で専門の基礎となる教育課程だということですね。たしかに早期の言語学習を要するような専修は、文学研究科教員が1, 2回生の語学教育を行うこともあります。そういうものもありますが、文学部全体としては専修の専門を学ぶ肥やしとなるような、幅広い教養を身につけさせることが目的です。

渡辺： その意図は分かるのですが、優れた特質であると自己評価してある点で引っかかります。学生にも適切な機会に具体的な指導を行っている点が優れている、というところですが、それは具体的に学生にも分かるような形で適切な機会にされているのか。そ

の根拠というか。

服部研究科長： 現状では、特に語学です。初習外国語について、かつて中国語が単位取得に容易だという安易な認識から、大変多くの学生が選択する時期があり、問題になっていました。例えば、西洋学をやるのに中国語しか履修していない。そういうことのないように1回生の時点で、将来こういう専門、専修に関心を持つことがあるなら、こういう語学を学んでおきなさいという指導を始めたのです。そういう意味での将来の専門の基礎となるような語学については、初年次にそういうガイダンスをやっていますね。もちろん資格科目等についてもやっています。

渡辺： それ以外に一般教養ということについては特段の指導は？

服部研究科長： それ以外の履修についての指導やガイダンスはないですね。現状では学生自身の関心に応じて、なるべく幅広く偏りなく学ぶのがよいという漠とした理念しかありません。

田窪： 3番目の点についてはいかがでしょうか。

渡辺： 意思決定プロセスでの全学共通科目と学部との関係ですね。

川添： これは今大問題になっているところです。

渡辺： でしょうね。

川添： 何と言ったらいいのか。つまり、先ほど私が申し上げたように、そういう背景がないわけではなくて、本当に文学部は京大全体の共通教育にどういう形で責任を持つべきなのかということについて、コンセンサスがないと思います。一種齟齬に見えるような形で出て来ていると思いますが、その現在で持ち上がっている問題で、教養教育のシステムを変えようというときに、何らかの仕方で一種の決断みたいなことをしなければならぬだろうということです。それは服部さんはどうなのか。私は個人的にはそう思っています。

服部研究科長： 高等教育開発推進機構という組織が、その下にあるいくつかの全学的委員会とともに、教養・共通教育の設計や評価を行ってきたわけですが、そういう教養・共通教育全体をコントロールするような機構と、実際に科目のほとんどを提供する実施部局、つまり総合人間学部・人間環境学研究科、それから理学部、の二元的な体制のゆえに、システムティックな企画・実施が十分に行われていないというという批判があります。もちろん、そうではないという意見もあります。そこにどのような組織改革、教養共通教育の実施体制が望ましいかという点について、次年度以降の改革に向けて重要な議論をしている段階です。いずれにせよ現状では、必ずしも文学部の教養教育に対するポリシーがそれほど具合的ではなく、またポリシーを具体的に教養共通教育自体に全体として反映させるための意思決定プロセスは、機構の下での分野、科目ごとの個別委員会に委ねられ、確かに見えにくいと言わざるを得ないですね。

渡辺： 教養教育と専門教育の関係は、意思決定も含めてすごく悩ましいところで、私の

大学はもうはっきり割り切って、教養教育は全学共通、府大に入った学生は共通で学ぶ一つのカリキュラムです。それから学部の教育は専門教育で、特殊な専門を極めると割り切っています。大学全体でそのように共有されているかどうか分かりませんが、そういう形で4年前に作り直したんですね。本当に悩ましいところです。だから、いい実践をされていたら聞いてみたいなと思いました。よく全学共通機構のところから講師を呼んでFDをやるのですが、すごくいいことをやっておられると思う反面、本当かな、実際にどこまでできているのかなという両方ありまして、いい機会だなと思って聞かせていただきました。

服部： これは京都大学全体の問題でして、全学教育シンポジウムで何回も議論していますが、やはり教養・共通教育に対しては、部局によって温度差があります。理系、文学部などは自前でもやるぞというぐらいの意欲を持っていますが、文学部は専修により差がありますが、現状の諸負担を考えると、全体としてはそこまでの覚悟はできないというところですね。

田窪： では、よろしいでしょうか。

渡辺： ありがとうございます。

田窪： 他の先生方は？

服部： 細かいところになるかもしれませんが、観点の5-2-4についてお聞きしたいと思います。「基礎学力不足の学生の配慮等が組織的に行われているか」というところです。学生相談室を設けているということで、先ほど面談しました学生たちは相談に行ったことがないとは言っていましたが、存在は知っているようです。このような相談室を設けて組織としてある種の支援をするということと、それから観点5-2-4の後半に書いてある「読書会」「研究会」というのは、どちらかというところ京大のユニークなところの自学自習とか自由な校風とかそちらを重視される場所だと思います。学生たちは非常にハッピーで特に不満もなさそうで、逆に言うと支援も必要ないし、基礎学力不足の学生もいないのかもしれませんが。

「そうすると、この観点の問い自体が京大にそぐわないということになり、これは内部評価という制度自体の根本的問題かもしれません。前の外部評価の時にも話題になったようですが、あくまでもこれらの観点は大多数の大学に当てはまる問いを立てるというもので、京大固有の評価にぴったり当てはまらないのかもしれませんが。先ほども観点がお仕着せであるということが指摘されましたが、自由な学風を持った京大をその観点で判断すると、自由さにお仕着せの対策を求めるということになり、観点と京大の学風が齟齬を来すところがあって、それが典型的にここに現れているという印象が私にはあります。

京大では満足している学生が大半だと思うのでいいのですが、うちなどはそうですが、手取り足取りで指導をして欲しいというという要求も片やあって、自分で意思決定がそれこそできない学生、自由に任せておくとずるずると何も勉強しないで終わっていくと

というような学生がいることも事実で、それが観点の基礎学力不足の学生というところになるかと思います。そういう学生が京大でも今後でてこないとも限りませんね。その辺の取り組みをするべきなのか、それとも観点に一応答えておいて、京大は京大のユニークさを追求するののかという。この辺がなかなか難しいところかなという印象があります。

質問の形にはなっていないのですが、ここで感じたことを申し上げました。

吉田： 普段の授業についていけない学生もいるかと思いますが、もっと深刻な問題は卒業論文です。本学としては論文を書くということは思考力、分析能力を向上させる格好の機会だと思いますし、将来研究者にならなくても一般社会のなかで判断を求められるときに、卒業論文を書くという経験は生きると思います。卒業論文については専修に所属してから、早い段階から自分の研究テーマを決め卒論はこれでやりたいという学生がいる一方、自分で主体的にテーマが見つけれないという学生が、以前に比べて増えてきていると思います。それが基礎学力が不足しているためなのか、あるいは情熱というか、この分野をやりたいという意欲が欠けているためなのか、なかなか判断がつきにくいです。伝統的な学風を考えると、教員の方は授業によっていわばメニューを提供し、どれを選ぶかは学生の自主的な判断であるというスタンスであったかと思います。ところが、現在ではこのやり方が上手く機能していないところもあります。従って多くの専修では4年生の段階で卒業論文指導という授業をしています。卒業論文指導と言っても別にテーマを与えるわけではなくて、学生に中間発表をさせてアドバイスをするだけです。それでも以前は、そういうことはしませんでしたね。

服部： うちもそうですね。やはり、論文を10枚ぐらいずつ持ってこさせて、手取り足取りで丁寧に添削しないと書き上げられない、というのが学部生でも院生でも増えてきています。サポートという話からずれるかもしれないですが。

川添： 文学部全体として、一応学生相談室（先輩相談室と言っています）という、比較的近い、話しやすい学生と話す機会を作っているのですが、実質的に吉田さんがおっしゃったように、必要な場合は研究室単位、専修単位を教員が面倒見てサポートしているのだと思います。全体で組織をつくるといっても、現実的には機能しようがない、つくりようがない。だから、むしろやることがあるとなれば、サポートの仕方をサポートするという必要はあるかとは思いますが。どうしてサポートできるかということを経験があまり分かってないということもあり得ると思います。文学部でも Faculty Development、FDも多少はやっていますが、おっしゃったような問題はあまり表面化していない。要するに茶飲み話では出るにしてもという感じじゃないですかね。

渡辺： 学生支援プロジェクトは先輩が相談に乗るとするのは、僕は非常にいい取り組みだなと思っていました。学生の意見交換はあまり部屋が離れていて、もともと物理的にも行きにくい。

川添： そんなことはないと思いますけど、すぐ、そこですけどね。

渡辺： 建物が違う。

服部： 実績の報告書はちゃんと出て、どのくらい人数が訪れたかというのを見ると、結構繁盛している。繁盛するのがいいかどうかは別にして。

渡辺： 今日、出て来た学生は利用するほどでもないという。

服部： 優秀な学生だったのかもしれない。

渡辺： なかなかいい取り組みで、京大がここまでされるというのは驚きました。これはいいと思います。学生に聞くとあんまり行っていないというので、どうなんだろうかと。きちんと機能している。僕も見習いたいな、とヒントをいただきました。

服部研究科長： これはホームページにも載せていますし、全学でもかなり評価されています。職員の初任者研修でも、学生相談室のメンバーが講師として最近の学生に関する様々な問題点についてレクチャーをしています。

川添： 難しいのは、あまりシリアスな問題を扱わせることはできない。プロフェッショナルな対応が必要な場合、学生自身やOBたちがそういう判断ができるのか。彼ら自身にも研修を受けさせる必要がありますので、一定のコストはかかります。

服部研究科長： もちろんカウンセラーに任せるべき仕事には立ち入らないように指導はしています。

渡辺： 先ほどの系セミナーとこれも併せて、OD、PDの将来的な訓練にもなるのだろうと思います。これは非常に基礎学力が不足している学生、あるいは論文を書きにくい学生に対する支援だけではなくて、PD、OBに対する支援、訓練、キャリアパスを作っていく。非常にいいとおもいます。上手く機能するような形にどうしていかれるのか注目したいと思います。

服部： ちなみに支援プロジェクトはもう一つ、留学生支援、外国語支援と合わせて四つです。

田窪： 他には？

榎本： 二つあります。一つは、どちらかという政治的なことで、先ほど服部先生や川添先生が仰っていた非常勤講師の確保の件です。多分、所謂8大学は全てそうだと思いますが、大阪大学でも例に漏れず、どんどん非常勤講師が減らされています。現在、文学研究科では、各専門分野の講座費で殆ど出費している状況に至っていますが、京都大学の文学研究科では、結構、非常勤講師を確保しておられるようです。これは、どういう戦術で確保されているか、というのを教えて頂きたい。

もう一つ、これは授業アンケートのことですが、長くなりますから、先に非常勤講師のことを教えてください。

服部研究科長： どうやって確保しているか、ということですね。

榎本： 文学研究科の経費ではなく、全学から経費が出ているのかということです。

服部研究科長： 文科省から非常勤講師の経費が来なくなったのは何年でしたか。

川添： 16年。

服部研究科長： それ以降は京都大学としては、シーリングと空きポストにつき、何時間

という計算基準で経費配分されてきました。しばらくは各部局のシーリング、空きポスト1につき33人分の講師の経費配分が行われていましたが、全学の財政が逼迫により、今は4人です。空きポスト×4、シーリング・ポスト×4ということです。それですと現在、文学研究科では、3,000時間分ぐらいしかないのです。講師50人分ぐらいでしょうか。実際の任用は今8000時間分ぐらいです。その分の差額は全て部局負担ではなくて、もう少し本部からの追加手当もありまして、今年度は5,400時間、来年度はさらに削減されて4,800時間。実際の任用との差が二千数百時間。そのため運営交付金、部局内の物件費からの自己負担は二千万近くになります。これは部局予算のかかなりの割合を占め、今後この負担がどんどん増えますから、今年初めて、次年度は全体として任用数を10数%減らすという提案を教授会に行い、承認されはしましたが、かなり厳しい議論をしました。一方で非常勤講師は、人文学の発展にとって不可欠なものであり、いろんな意味で学問全体にとって、それから、ポスドクにとっても重要な存在です。非常勤講師任用は将来にわたって大きな課題で、減らす努力は不可避だとは思いますが、専門教育を維持するためにも不可欠であることもたしかです。

榎本： いずれにしろ、今は、講座費からではなく、文学部全体から補填している？

服部： はい。

榎本： 有難うございました。

もう一つの方、これは授業アンケートのことで、今日、学生さんにもお聞きし、また先ほど川添先生からも御説明がありましたが、授業アンケートはサンプル調査で、しかも1科目しかされていないのですよね。なぜ、サンプル調査しかされていないのか？ つまり、授業アンケートだったら、全部の授業をアンケートしないといけないのではないかと思います。それと授業アンケートというのは授業の改善のために実施するのですが、1科目しかしなかったら他の授業の改善には役立たない訳でしょうし、全体の傾向も分からない。それから、サンプル調査をして、今年はこの授業で実施して、翌年は他の授業で実施するのなら、経年変化や改善も分からない。さらに、特に大学院の場合は、授業だけではなくて、研究指導や論文指導の評価もアンケート項目として挙げないといけないと思いますが、そういう項目も入っていない。

それから、今日、学生さんから聞いたところでは、アンケートを実施しても、その結果が公表されているかどうか知らない、情報として告示されていないということでした。さらに、アンケートを実施して、それによって授業がどれだけ改善されたかという検証を実施されているのかどうかという点もあります。前もって送っていただいた資料から、卒業生とか修了生に関しては、今、私が申したような項目もアンケートで調査されていることがわかりますが、現役の学生や院生に関しては、そういう項目がアンケートに含まれていなかったのです。だから、実際に、今、授業改善の結果を享受しなくてはいけない学生に向けてそういうことがされていないのは、どういう理由なのかという質問です。たくさん聞きましたけれども。

川添： 全体としておっしゃるとおりとしか言いようがないと思います。なぜやらないか。アンケートの意味を十分持たせるためには、そういうやり方をしないと本当に意味がないはずですよ。なぜかということについて、十分なこれも検討していませんが、私の直感には嫌悪感としか言いようがないですね。いまだに嫌悪感がある。

榎本： 嫌悪感？

川添： 文学部の教員にはいまだに、学生に評価をさせることに嫌悪感がある。違いますか。

吉田： 最初アンケートをやろうと言った時に、いろいろ議論しましたが、基本的には専修単位の少人数教育が行なわれており、特に大学院については学生の研究上での問題点とか状況というのは、教員が把握していて、適宜アドバイスをするようにしていますし、学生の方も研究で行き詰まっている場合は教員に相談に来ます。したがって、非常に学生と教員間の関係が濃密であるというので、あえて学生から評価を受ける必要もないし、たとえやったとしても薄っぺらなものになるのではないか、という意見が出ました。

川添： 僕はそれは全然理由になってないと思います。個人的には理由にはなってないと思います。

吉田： 一般的な雰囲気はそういうものであったと思います。それから、評価結果は分析した上で、ホームページに公開されていると思います。面談に来た学生さんは十分そのことを知らなかった。

榎本： 今日、学生全員に聞いても、誰も公表のことを知りませんでした。公表されているということが、情報として知らされていない？

川添： そうですね。ひっそりと WEB に挙げているだけです、たぶん学生に対して公表しましたとは流してないですね。

渡辺： それともう一つ大事なのは、アンケートを受けて授業評価とは言わなくても、それを教員の側が受けとめてどう改善したかということに踏み込んで、

川添： 本当はそこをやらないと意味がないですからね。

渡辺： 分析した上で踏み込んで公表しないと。なぜ、われわれは授業アンケートをとったのか、全く意味がないじゃないかと。結果も分からないし結果の改善も分からないということになると、学生にとっても意味がないんですよ。そここのところはどうされるのか。もう一つは、その前提としては、それを分析、改善するような組織的な担保が学部の中にあるかどうかです。ここで優れた点という評価になっているのですが、研究活動に関する評価が継続的に行われる態勢が確立しているという。これが結果を WEB サイトで公開することで、情報を共有、利用できるようにしていくということがあります。学生の今日の聞き取りでも、先ほどおっしゃったように、うまく機能してないのではないかと。ここまで優れた点として書き込めるかどうかは、私は疑問だと思います。まず態勢、組織がどうなっているのかということをお聞きしたいと思います。

吉田： 評価の取り組みを担保する組織としては、自己点検評価委員会という恒常的な組織があるのでそこでやっていますし、授業評価以外に、卒業生、それから修士を修了した時点での満足度、問題点などの調査をしています。ただ、その結果をどう将来に活かしていくか、ということについては、具体的な方策は部局としては、立てていないように思います。

田窪： 評価の問題は、その授業の担当者に対する改善の要請と、例えば部局全体としてどういうふうな意見を吸い上げるか、それを全体の分析みたいにするかと二つあると思います。その時に評価をした授業の担当者にはもちろんその結果は分かるわけで、それは改善について何らかの指針にはなると思います。全体の分析に関しては、数が少ないというのが根本的な問題点に将来的にはなるかもしれない。それを重く受けとめないといけないのですが、評価文化自体がまだ定着していない。例えば、学生が評価するという場合に、学生自身が評価をするというのは自分を評価するということと、ほとんど重なるようなものであるわけで、授業に出てその授業を自分が評価するということ自体を、学生も教師も少しゆっくり考えてみないと、ただし評価や利用できる改善に役立つ評価はなかなかできないと思います。

何回か評価をやったのですが、大体基本的には満足している、というのがあって、授業に出たか、出てない、この授業はシラバスどおりにやっているか、やってないか。授業に出てないのにシラバスどおりにやってないと書くというのは、学生の評価に関する考え方に少し問題があります。だけど、それも実際にはわれわれは評価を見てそういうふうに感じますが、少しずつ評価という文化が定着していけば、授業の改善や将来的には文学研究科全体の底上げみたいなものに役立つようになるのではないかと感じています。増やさないといけないかもしれないですね。

川添： 何もしないで文化は根付かないですね。

渡辺： 確かに根付くということもあります。われわれも大学でもだいぶ長いことやっているし、学生の評価をもらって、今度は自分でそれを分析して改善点はどうか、優れた点はどうかということで戻します。それを組織的に自己評価委員会を含めて検討します。けれども、やっていって文化が根付くというのは慣れてくるということです。そうすると、あんまり意味がなくなってくる。だんだん良くなっていくことは確かです。そうすると、何のためにやっているのかがよく分からなくなります。そういう面もあります。なかなか評価というのは難しい。

それから学生自身が評価を自分ができるかどうかという評価もやらせないと、公平な評価にならない。必ず学生がこの授業にどれだけ出たかということも含めて、学生が自己評価に耐えるだけの授業の受け方をしているかどうかを評価させた上で、授業の評価をさせる、というようなことをやっています。それをやっても根付いてくると、あまり効果がなくなる、そういうマイナス面もあります。お聞きしている京大はもう少しまだ根付かせる方に力を入れないといけないような気もしました。

田窪： よろしいでしょうか。

齋藤： 先ほど申し上げたことをもう少し具体的に考えたいと思います。少なくとも、この外部評価というのが、最初にあります。その評価は本当は全く別の形の評価もあり得ると思います。国が与えているのは、基本的にはいわゆる工学部、医学部のような分野で考えられる教育です。教育というのは効率である、という考え方に基づいている考え方だと思います。それはコンビニエンスストアのように、便利で、どんどん進歩していけば、私たちは幸せになるのだという考え方がまずあって、そしてそれは、あるサンプル数が必ず、はけたりとれたりするということを前提にしているので、すぐ多くの人々がアンケートの実施を考える。アンケートはそもそもサンプル数が確保できないものはほとんど無意味で、それは自由記述と同じです。新聞広告によく載っている、何々は体に効きましたという例に等しいものです。

もう一つのこの国が採らなかった一つの方法で、私自身が経験したのは、マックスプランク研究所(Max-Planck-Institut)というドイツの研究所がありまして、その中の心理言語学の部門がありまして、たぶんこれはマックスプランクという組織自身が一般的にやっている方式だと思います。3年から4年の間に一度海外から10人前後の人を呼びまして、そしてその研究所のジュニア、シニア、大学院生に発表させます。日本でいえば准教授、教授クラス、大学院生です。そして、それを外部評価委員全員で聴いて、その10人ぐらいの人が1箇所に集まって一日中話をして、その発表内容が悪ければ、来年その研究所は閉鎖。よければ増額です。新しいスタッフも来るし、お金も場所も増える。そういうことをやっています。これをMPIでは外部評価といいます。

その評価をする側は世界でその分野で一流の人を呼ぶ。そしてそういう人たちに自分たちの大学院生の発表を、あるいは研究者の発表を見せることによって、論文は当然通りやすくなります。また、そこに大学院生を送る。ポジティブ循環を作り出すという考え方です。そういう方法もある意味で外部評価です。ドイツはイギリスから人を呼んだり、フランスから人を呼んだりしています。

私たちが今、やっているのは、国内に閉じているというのが一つ。もう一つはすでに作られた、評価をしないよという枠組みが、文学部用にはできてない。でも、これに対して戦うだけの準備もできてないので、とりあえず相手の様子を見ながら、プレーをしていかなければいけない現実があると思います。その時に、第1番目はアンケート自身に問題がある。それに代わるようなもの、自分たちが教育は量ではなくて質なんだと言うのなら、その質をどうやって引き出すかという問題。もう一つは、教育は効率だという人たちは時間を無視するのです。だから、いや文学部はだいたい人生が終わるところになったら教育の効果が出るぐらいのスケールでやっているんだ、とおっしゃるのも一つです。でも、それに見合うような何かデータ、そういうことを保障するようなものを出さなければいけない。だから、今日、私が学生さんたちには、「自分の子どももやはり京都大学の文学部に行きたいと言ったら、やめときなさいと止めないですか」とお聞き

したのですが、もちろん全員が「勧めます」と。もう一つは、「同じお金で、今すぐ海外の大学にそのまま行けますよ、と言ったら行きますか」とお聞きしたのですが、言語学をやっている人は、「私はハワイ大学で言語のプロジェクトに参加したい」という気持ちを持っていると言われ、その人以外は、全員が「京都大学で十分ハッピーです」とおっしゃられたのです。

でも、これを聞いた時に、データには二通りの見方があって、このように学生は京都大学に満足している、というのと、もう一つは、このぐらい日本の学生は海外に行くだけの気力もなくなっている、と二通りあります。だから、データも作文や質的な分析としてどういうふうにするかが問題です。というのは読む方はああいえば、こういうという読み方をするのが仕事ですから、反対側の資料にもとられるということを知った上で、しかし文学部の特性にあったようなデータの出し方も一つ、今後検討されるといいと思います。

それともう一つは、お金の問題が大きいと思います。私が気になりますのは、その問題はお金で解決する問題ですか、あるいはしないのですか、というような質問の仕方もあると思います。多くの方が外部資金を取ってきなさい、ということを行います。でも、外部資金を取ってきたら解決してしまう問題と外部資金をとって来ても解決しない問題というのもあると思います。これは、ODを外部資金で雇うからと言って、そうすると一生雇えるわけではない。一生続くような外部資金は何かあるのか、というアイデアもすぐに実現できないとしても、出していく価値はあると私は思います。

例えば、アメリカなどは、学部の外にセンターをつくって、センターが活動することによって、お金を取るという活動も外国語教育などについてはやっています。それは単位とは別ですが、スタッフがそういうことをすると、スタッフもお金をもらうかあるいは大学の中の **duty** を減らすか。要するに **incentive** とは何かということです。常にお金だと思わないで、教授会に出なくていいよ、というのも **incentive** になるのだったら、それも一つの **incentive** です。

もう一つは留学生であって十分母語に関しては能力を持っているわけですから、彼らも私たちのところに来たら、ある分野の専門家であるだけでなく、ある母語に関してはエキスパートですから、その人たちも何か **contribution** できるという意味で、資源という、学部が持っている弱点と資源をもう一度枠を外して考えて、そして実際にできることとできないことを分けていく努力をしなければいけないのではないかなと私は思います。日本の大学で、今、独立して黒字になるのは医学部とごく一部の工学部だけです。それ以外は全部赤字で、会社だったら左前です。だとすれば、逆にそれ以外の部署は小さいのですから、小さいだけの運営をしていける資金を何か大きいところが考えないような方法で捻出することができれば、それなりに回っていくのではないかな。私たちの不幸、ある人文系の不幸というのは、大きいところが作り出した規格に従って報告書を作りなさいとか、その時間で成果を挙げなさいとか、そういうことを押し付けられてい

るところにあるのではないか。それはおかしいというだけではもう時代は許してくれないので、それに代わるこういう方法があるのではないか、ということをご提案することを求められているのではないのでしょうか。

だから、決められた問いに決められたように書くだけだったら、相手の罠にはまってしまうので、それと何かもう一つのオプションを用意する、一つの希望なのではないかなと私は感じました。これは質問ではなくて私の感じた印象です。

あと一つは教育に関して、自由の学風というのは確かにいいのですが、「この大学の理念を知っていますか」と言ったら、ほとんどの学生は理念をあまり知らなくて、たぶんそれに代わる新しいものが必要なのではないか。私が申し上げているのは理念に代わるものというよりも、彼らは自分たちがエリートだということを自覚していなくなりつつあるのかな、という印象を持ちました。エリート自身が非常に古典的な言葉ですから、何か特別な人だという意味ではなくて、例えば文学部にいるということは、それなりのある意味でのエリートですが、そういうエリート意識を失ってしまった人に、昔と同じような全網羅的な知識の教育を与えるというのが、だんだん難しくなって来ているという現実が起こっているのではないだろうか。そして昔は、私たちは、ごく選ばれた人だけが学問を継承すれば、学問にとって非常に有益だと考えていましたが、その考え方は私たちが思っているほど学生さんには通じなくなって来ているのではないか、という危惧を持ちます。もちろん、それぞれご意見があると思いますので、お聞かせください。

もう一つ、就職に関して気になったのは、拝見した時に国連の機関とか、そういうふうな地球規模での組織に就職する人が少ない、ということです。それはある種のエリート意識の欠如がなせる技だと私は思います。別にどどここの県の職員だって構わないし、どどここの組織でも構わないのですが、できれば京都大学さんには日本という国の枠組みを越えたようなものを目指してもらいたいような、ある種の意識を持ってほしい。それはそんなに特別なことではなくて、それを説得するのはとても難しいのですが、何かしてほしい。今、私がすぐに思いつくのは、「だって、君たちはエリートなのだから」という、そのエリートに代わる言葉が必要なのではないか。それがたぶん自由の学風というものではなくて、それに代わる次の新しい何かが必要なのではないか。そのジレンマは私が本日強く感じた、「教育は効率だ」というふうな押し寄せてくる考え方に対して、今までの教育理念で立ち向かおうとすると、学生さんたちの中には自分たちはユーザーだ、だから、コンビニエンスストアのようなサービスを受ける権利があるという意識だけが増えていって、それに反するような昔ふうの言葉で言えば、矜持とかプライドとか、そういうものがなくなるぐらい経済に巻き込まれているので、その経済が成り立っていないかなければ、まず、自分たちの進むべき道は自分が所属している世界にどんどん埋没していく。もちろんこれは外部評価ですから、それを防ぐとかそういうことではないのですが、ありとあらゆる技術はあると私は思っています。

とても具体的なものは、例えばこのパンフレットは紙媒体ですから、紙で写真とか印

刷してあります。でも、私が拝見したときに、なんてたくさん文字があるのだろうと思いました。WEB とこれがセットになっているわけですから、これに載せなければいけない情報と WEB に載せてしまったらいい情報と分けて考えれば、もっと軽いものができると思います。軽いというのは、内容がないというのではなくてすっきりしたものができると思います。また、外国の例ですが、フランスには CNRS という科学アカデミーがあります。そこには人文系も入っています。彼らの作るパンフレットは欲しいです。帰るときに、「1冊持って帰ってもいい？」とか言って、もう2冊余分にそっと持って帰るといふぐらいに欲しいなと思えるようなところがあります。

何かそういうものも、これは決して悪いというのではなくて、時代がどんどん変わっているわけですから、WEB に載せるようなものと、それから WEB ページというのはホームページと携帯に載せるようなものと、こういう紙媒体として欲しいと思うものを分けて考えていくということもできると思います。私たちは、いくらでも何かそういうことがまだまだできます。だから、とても大変な国を相手にすることと、簡単にできることを整理すればいいだけで、何もかもできるとは思いませんし、何もできないということでもないのではないかな。それを分けるということをやらなければいけない。

私は修士で卒業していく人に博士の人が学ぶような、これこそ学問の体系みたいなものは教えることはできないと思います。でも、私が申し上げたようなことを整理する仕事は、何をやろうとしても役に立つことだと思いますので、そういう問題も少しは考えていますよ、という姿勢をこちらが見せることが彼らにも直接の学問ではなくても、間接的な、先生もそういうふうに進んでいるよね、ということで、それも一つの教育なのではないか。別に単位を出すことだけが教育ではなくて、こうした改善はオプションとして与えられると、大変な仕事だと思いますが、その中のノウハウの一部も何かフィードバックできれば、決して無駄ではないのではないかな、という気がいたしました。以上です。

渡辺： 評価についてのそもそもの問題大事ですが、今日の問題は、認証評価についての観点を特定した評価です。中身は適正かどうか。その観点を通して適正かどうかの判断をしないといけない。ですから、私は枠組みの中で評価するという立場でやっています。斎藤先生のように高度なところからされるのも、それももちろんいいのだと思います。国の枠組みにとらわれてやるということもありだと。適正かどうかだけで、評価そのものの全体の問題については特別の議論をしないといけない。

榎本： エリート意識と仰っていましたが、京大生は東京大学に対するコンプレックスはないのでしょうか。

渡辺： 雑談になりますが、うちの大学の学生は割と高い能力を持っているのですが、不当に自信がないのですね。京大の学生は不当に自信を持っています。持ちすぎる。両方知っていますが、両方きちんと自信を持つところでは自信を持ち、謙虚になるべきところは謙虚になる。その辺の見定めができるような教育をやらないといけない。教育は学

生がいかに力をつけるかということが最終目標ですので、そこに向かって何ができるかということはどう判断したらいいのか。今やっていることが本当に学生に力を付けられるような仕組みになっているか、興味を持てるようになっているか、ということ判断していったらいいのではないかと思います。

そういう意味でこの評価の視点がそういう視点で作られているかどうかという判断もいりますが、これはこれとして……。

齋藤： 技術論としまして、私が抽象的なことを申し上げたのは、これに向かっていく時だったら、結局9割が満足していると書いて、残り1割が不満を感じていると書きますと、そしたらその不満はどういう不満なんだ、というのは読み手としては知りたくなくなってしまいます。その不満を分析するのが9割の満足よりも問題解決には役に立つし、相手を説得する力を持っています。相手の枠組みで勝負するのだったらそれしかない。その少数の1割であるというのは本当に少ないのですから、それを丁寧に分析されれば、工学部のように何百人もいるところにはそんなことはできませんが、数が限られているのでそれも十分いい分析ではないかなと私は思います。

服部研究科長： 評価につきましては、こういうオフィシャルな評価や設問と決められた字数での回答といったやり方については、非常に抵抗があったと思います。今でもあります。ただ一方で、こういうものが全学的に、そして、中期計画・中期目標、認証評価という形でかなりそれこそ根付いてしまって、それならばそれも最小限のエネルギーでクリアして、大事なことはわれわれ自分でやる。よく言えばそういうふうを考えていると思います。

ただし、そういう回答を作る中で、知らず知らずにお仕着せの枠組みの中にお仕込められて、それでよしとしてしまう。それ以上前に進まないというような改善への努力や意欲が、このオフィシャルな評価項目と回答で、縮小されてしまうという面がどうしてもあると思います。先ほど、齋藤先生がおっしゃったように、それを回答する立場からそのような問いかけを逆に崩していくような、揺るがしていくような、そういう工夫やほみ出しの回答が必要なのでしょう。京都大学では現在、全学的な見地から、各部局の現状と課題、問題点の洗い出しと改革にむけての対話的議論が行われており、それを通じて各部局の10年後のあり方を構想する改革ロードマップを作成するという作業が進行中です。そこではもちろん、いくつかの典型的な問いかけや質問票が来ますが、それに当てはまらないような、自主的な文学部の理念や現実をアピールしていく努力をしています。でも、ついついこういう評価機構の非常に典型的な問いに対しては最小限の型にはまった答えで済ませてしまうことによって、自分の改善努力を狭めてしまうのは如何なものか、という気はいたします。

今日はそういう認証評価の項目と回答の是非ということが外部評価の皆様にご検討していただくポイントではありますが、せっかくおいでいただいているので、多少、ほみ出るような、評価のあり方を問うということは別にしまして、もう少し広い意味で、文学

研究科で感じられた、先ほど齋藤先生がおっしゃられたような学生のエリート意識があるかないか、そういう点も含めてご指摘いただければありがたいと思います。

エリート意識につきましてはどうなのでしょう。エリート意識とはどういう意味でしょうか。私が思うには、自分の能力というものを単純な語学力や偏差値ではなくて、潜在的な、論文を書く力や研究する力など、そういう思考力も含めて認識することではないか。京大の入試はかなりオールラウンドな学力、外国語能力を要求するもので、それを合格して来た学生が持っているべき潜在能力というものを自覚し、活用しない。それが、エリート意識の欠如だということになれば、その点かなと。つまり優がつく卒論が多いというのが現実だと思いますが、一方で啞然とするような、評価をされていてですね、なぜ、こんなものしか書けないのか、そんなはずはないだろう、というような卒論が相対的に増えています。昔からそういう学生もいましたが、つまり自分にみあったというか、自分が持っている力に見合った努力をしない。そういう学生はある意味で能力に関する自己認識が欠けているというのか。努力をしない学生にはいつもいますが、もう少しやればできるはずだし、そういうことをしないというのはもったいない。そういうことをよく思い、また学生に言います。そういう意味で、京大生としての自己認識といますか自覚というか、そういう問題を教育する者としてどうすればいいのか、怒るだけではしょうがないのですが、そう感じる事が多々あります。

齋藤： 私が申し上げたエリートという言葉が、非常に難しいと思います。ほんとにそれにふさわしい言葉は日本にはないと思います。フランスなどは、100人だけをどうするかというのでその人たちを選んで育てるという意味で、本当にエリートだと思います。それに合うような言葉はないと思いますが、私がここでそう思ったのは、「何々は教育効果によって起こっている」という表現があります。もともと優秀だったのだから、それは教育効果なのかな。そう考えた時に、それは優秀な人が優秀な能力を発揮しただけで、教育Aでも教育Bでも、結局は同じ結果になったのではないのか、ということで文章を読んでいって、これは証明ではないと思いました。

これが理系でしたらとても簡単で、今まで微分ができなかった人が微分ができるようになって、卒業するときにはそれを自由に使いこなしていますと見せればそれでいいのですが、ある観念について彼の観念はこんなに深まったということを見せることもできないし、それが教育によって深まったのかどうかも証明が難しいので、そこは面白くてかつ難しい点だなあと感じました。そういう言葉にもこだわってみました。

つまり、そういうプライドを持てば、こんなに伸びるよ、というのと、そういうプライドがなければ、入った時のままだよ、ということです。卒業時の得点が80点だからいいではないかというのではなくて、入学時に60点の者が卒業時に90点に伸びたのは教育効果といってもいいと思いますが、入学時に80点の者が卒業時に80点のまま出て行ったら、それは、教育効果ではないだろう、と私は思ったので、そういうふうなことにこだわってみました。

田窪： 時間を少し過ぎましたのでここでコーヒブレイクを15分ぐらい取りまして、5時15分から最終的な講評をお願いするということにしたいと思います。

【講評】

田窪： それでは、講評をお願いしたいと存じます。お一人 10 分強ぐらいでお願いします。

それでは、渡辺先生から。

渡辺： 私は、アクレディテーションだと思います。評価指針と実施対象区分に基づいて、技術的に適正であるかどうかということで講評に代えたいと思います。

観点の 1-1-①、②も含めて適切に対応しておられると思います。

それから、A の教育研究組織のところですが、観点の 2-1-② の教養教育の改正の問題については少し考慮すべき点があるとは思いますが、おおむね適切に運営していると思います。観点の 2-2 もこれも適切に機能されていると思います。教員および教育支援者の方ですが、観点の 3-1 の④のところですが、これは質問はしませんでした、女性教員の採用については少し問題があるかなと思います。が、おおむね適切に配置がされていると思います。それから観点の 3-2 は、教員の教育評価については、まだ若干問題があるとは思いますが、おおむね適切に維持されていると思います。

観点 3-3 は、ここも活用が適切に行われていると思います。

観点の 4-1、学生の受け入れは、4-1-4 のところの独自評価のところ、問題があると自ら指摘しておられますが、そこも含めておおむね適正に学生の受け入れが実施されていると思えました。それから観点 4-2、学生の受け入れは入学定員と比較して適切な数値になっていると思います。

観点 5-1 は、適切に水準を図って各自が授業をされていると思います。観点 5-2 は、5-2-② の単位の実質化への配慮については、質問できなかったのですが、ここには少し問題があると思いますが、観点 5-2 全体としてはおおむね適切に整備されていると思います。それから観点 5-3 は、成績評価等の学生を担保する組織的な側面は、少し取り組みが弱い点があるかもしれませんが、全体として 5-3 はおおむね適切に対応されていると思います。観点 5-4 は、適切に学位情報を報告できていると思います。観点 5-5 は、大学院課程ですが、ここは 5-5-③ のところで、「適切なシラバスが作成され、活用されているか」という点では学生から聞いた中身を含めて言いますと、ここはもう少し配慮すべき点があるかも知りません。そこはありますが、観点 5-5 は全体としておおむね適切であろうと思います。それから観点 5-6-③ は、ここも適切な措置というところで、学部と同じような問題があるかと思いますが、全体としては、おおむね適切だと思います。

観点 6-1 は、「達成度や満足度に関する学生の意見聴取の問題」ここはこれから整理していかなければいけないところがあるかと思いますが、ここもおおむね適切です。観点 6-2 の②は、先ほどお聞きして分かったのですが、就職先の関係者からの意見聴取の結果がまだ出てないわけですね。アンケート用紙はできたが、結果が出てないし、まだ分析されてないというところがあります。そういう意味ではこれからだということでおおむね適切としております。

それから8-1-①は、FDの取り組みと関連してくると思います。もう少しこれからきちんと取り組まれる必要があるかなと思います。方向性としてはおおむね適切かなと思います。以上です。適切かそうでないか、というところで判断いたしました。

田窪： ありがとうございます。それでは次に服部先生、お願いします。

服部： 私は6項目に沿って簡単に申し上げます。渡部先生とだいたい評価は同じです。

1の教育理念、教育目的に関しては、自由な学風を継承するということで、観点の点でも適正だと判断いたします。それから2番目の教育の実施体制も系と専修ということでよく組み立てられた適正なものだと思います。学生の受け入れに関しましても、入試における数学の重視という話もありましたが、非常にうまくいってうらやましい限りです。自己点検評価のとおりかと判断いたします。それから4の教育内容、教育方法ですが、観点の5-2-③は、シラバスは学生さんの話を聞きますと、シラバスどおり進まないということとか、書いている内容が先生によって違うということがあるようです。ただ、学生さんたちはこれに関して、必ずしも否定的な言い方をしておりませんで、少人数クラスなので受講生の要望を聞きながら柔軟に対応していくということなので、マイナスにはならないと思います。ただ、シラバスの本来的な意味という点では、考える余地はあるのかなという気がしました。それから5-2-④に関しましては、先ほど申し上げましたが、組織的な取り組みということと自主的に行っている自学自習の部分の整合性が少しどうなのかな、という気はしないでもありません。それから、これはどこの観点に入るのかは分かりませんが、成績開示のあり方について非常に大きな不満を学生さんは持っていらっしゃるようです。いつ成績が開示されるか分からない、ほかの学部はkulasisできちんと公表しているのに、文学部・文学研究科ではよく分からない、かつ間違っていることがある、ということを経験された学生さんから聞きました。これは観点とは関係ないかもしれませんが、少しお考えになった方が良かったと思います。

それから、観点5-3の成績評価基準は、今の申し上げたところと関係あるかもしれませんが、5-3-③でGPAのことが聞かれています、うちも大問題になって、とても文学研究科にはそぐわない制度なので、そこを書けと言われても書けないのでお書きになってないと思います。いたしかたがないことかと拝察します。それから、学業の成果も非常によく上がっているようで、よろしいかと思います。

渡辺先生がおっしゃっていましたように、観点5-5-③が少し工夫の余地があるかなと思いました。それから学習成果の6-1-②もアンケートのフィードバックがどのようにされているか、ということに関して、学生が余りにも知らなかったのも、周知徹底の方法とアンケートの採り方自体も含めてお考えになる余地があるかなと思いました。

それから、最後に進路、就職の状況ですが、これも川添先生がおっしゃっていました、進路調査を行われた方がいいかなと。それも聞きできなかったのですが、どのぐらいの学位取得率といますか博士号取得率があるのか。確か40%ぐらいでしたか。

川添： 博士号は40から60ぐらいです。

服部研究科長： 今は、もっと高いと思います。

服部： そうなんですか。

川添： でも、これにはそう書いてある。ちょっと高くなるかもしれません。

服部： 分かりました。その辺は私に認識があまりなかったので、ずいぶん出していらっしやるなと思いましたが、進路に関してはもう少し調査した方がいいと思います。うちは、こういう外部評価が入ったこともありまして、かなり前から2年ごとに年報を出すようにしております。WEBにも載せております。各研究室から資料データ論文など一覧、教師、学生、院生も含めて全部データを掲載するかなり大部の冊子を、2年ごとに刊行しております。そこにも院生が卒業後に博士号取得後に、どういう進路をたどったかというのをデータとして載せています。大変ですが、これから、こういう時代になると、そういう努力をやらざるを得ないかなという気もいたしました。その辺りを少しお考えになればと思います。以上です。

田窪： ありがとうございます。榎本先生、お願いします。

榎本： 私の方は、各観点に関して一つひとつ評価をするというのではなく、全体に亘って気が付いた点を申し上げることと致します。

いくつかのことは先ほどの質疑応答のところで、特にアンケートのことは申しましたので、それは別として、どなたか先生が仰っていたことで、京都大学の授業は2回生から博士後期課程の学生まで全員が一緒に受ける伝統が長くあり、これが京都大学の文学部・文学研究科の最大の特徴であるというお話がありました。実は、私も京都大学の文学部と文学研究科出身なので、もちろんそういう授業を受けて来ましたが、今は大阪大学に属していますので申すのですが、大阪大学でも同じことをしています。2回生から博士後期課程の学生まで、場合によっては助教まで、いわば研究室全員が同じ授業に出席するというような授業をしています。その他に私は集中講義などで東京大学や東北大学、広島大学にも行きましたが、どの大学でも同じことをやっています。おそらく、所謂8大学すべての文学部で同じようなことがされていると思います。8大学以外の一般大学の文学部がどうかは知りませんが、こういう状況では、京都大学文学部・文学研究科の最大の特徴とまでは言えないのではないかと思います。多分これは観点2-1に係することだと思います。

それから、先ほど服部先生が仰っていましたが、学生さんと面談をしますと、成績が開示されるのが何時かについて予告が全くなく、友達に聞くしかないとか、落第はあまりなくても、試験を受けたのに欠席扱いになっていることがあって、そういう場合のクレームを受け付ける態勢がなくて、教務に行っても解決できないとかいうことを聞きました。こういう、クレームを吸い上げる態勢や情報開示方法がシステムとしてまだ整っていないと思います。おそらく観点の5-3か7-2に当たるかなと思います。

それから、先ほどどなたか仰っていたことで、サポート体制自体をサポートする必要があり、系ゼミナールとか先輩相談室のようなものがあるが、そういう系ゼミナールを

する先生やOD、あるいは先輩相談室の先輩など、そういう人々をも育てるようなサポート体制にする必要があるという関連で、FDのことを服部先生が仰っていました。

このFDの資料、つまり文学部の8Bの資料を見ていますと、FD研修会となっていますが、これを丹念に読んでも、どれだけ研修が行われているのかが分かりません。講演はされていると思いますが、研修の実態を伴う、内容的に充実したものなのかは、いま一つ分からないので、果たして研修会と名付けていいのかな、ということもあります。これは8-2に関係すると思います。

以上、そういうことを考えました。どうも失礼しました。

田窪： FDに関しては説明されますか。

川添： おっしゃるとおりで、研修会は名乗るのは多少おこがましい、その場限りでの講演会で、少し質疑応答するだけというのが実態です。本当にサポート体制ができているかという点はまだ不十分だとしか言いようがないですね。

田窪： FDに関してはそういうことで、プレFDに関しては全く別です。実はプレFDの方は非常にうまく機能していると言えるかと思います。だから、そういうふうなサポート体制は整っています。

川添： だから、文学部の方の **Faculty** に対する **Development** の面では十分ではない。

田窪： 分かりました。それでは齋藤先生、お願いします。

齋藤： たくさん申し上げさせていただきましたので、要点だけにします。技術的な問題につきましては、非常に具体的です。多くの大学でアンケートは何かが終わったときに実施されていますが、本当にフィードバックして何かを直したいと思うのであれば、アンケートは、そのコースの真ん中で私はやるべきだと考えています。そして、それで直接アンケートをその担当者が見て、そして態度、あるいは計画を少し変えれば、学生のリアクションがどういうふうになるのかということが直接感じられると思います。終わってしまっただけで同じ科目を二度取る学生がいないのに、そのアンケートに自分が書いたことがその先生が直してくれたかどうか分からないのに、それでアンケートを採ったと言っているのはとても不思議なことだと思います。そしてアンケートは、私も様々なところからアンケートを受け取りますが、書き進めていくとアンケートの実施主体は存在価値があるかどうかを問うように作られています。

つまりどういうことかと言いますと、アンケートというのは仮説検証形式になっておりまして、ある仮説を検証するためにデータを集めるためのアンケートが世の中に広く使われています。もう一つは自分たちの弱点を守るために、ちゃんと項目が埋め込まれてあってそれを集計すれば自分たちの存在価値が、ほら見たことかというように分かるように作ってあります。そういう意味ではとってもしるいですが、だから、オフェンスとディフェンスをちゃんと答える人に分からないようにそこに忍び込ませてあるのが、専門家の作るアンケートです。多くの人で作られるアンケートは、自由記述が多くて、それを集めても説得力のある結果にならないようになっています。それを不用意に出しま

すと、かえって相手に塩を送ることになって、思わぬところを指摘されて返答に困ることになります。

ここにももちろん専門家の方がおられますから、相手が求めている枠組みに沿うようなアンケートを作られたら、それは技術的に非常に戦略として使いやすいと思います。それとは別に私が申し上げているのは、ここ（京都大学）の特徴をうまく質として引き出すための工夫があるというのが、相手に頑張っているね、と思わせる重要なことだと思います。それは他のところが真似をしていない、あるいはやっていないことで構わないと思います。なぜかという、これは1例しかないわけですから、成功か失敗かは相手が判断できないからです。それを新しい取り組みだと言えば、新しいことには違いない。失敗だという判断を下すことができない段階にあるのだから継続して検討する、というふうにする。それだけであつたら駄目ですが、その二つを組み合わせるとあると思います。

全般的に拝見させていただきまして、いわゆる主観的な言葉が使われるとその反対側が目立ちますので、そういう主観的な言葉は削られた方が無難ではないかと思えます。例えば、ある教官の立場に立てば、「必ずしも満足のいく内容ではない」ということが書いてあって、「失望」という言葉が使われていますが、それを言うと余りにも正直すぎる。その先生の人間性はとてもよく分かるし、高く評価できるのですが、そこで失望してはいけな、と思います。なぜかという、だとすればその先生の満足というのも主観的なものなのだ、という印象を与えるからです。だから、失望という言葉を使わなくても、事実だけを書けばいいのではないかと思いました。

あと一つは海外留学をするために、たくさんの方が休学されていると書かれています。何を望んでそういうことをされるのかを知りたいと思いました。私は常に学生さんにお聞きしたいのは、京都大学にいるのは、ただ単に他のものを選ばないから満足しているのではなくて、選べるのが分かってかつ満足しているのだ、ということを実証していただきたいと思えます。つまり、自分が他のチョイスを知らないから京都大学はいいよ、と言っているのではなくて、知った上でかつこういうところがいいと言っていたらいいと思えます。そのことが、たぶんこの学生さんたちが修士で仮に社会に出ても、そういうふうな対応を社会は求めているのではないか。つまり何々を知っているかという知識ではなくて、なぜそれを選ぶのかということ相手を説得できるという力を何か教育の中で実現できないか、ということを感じました。

あとは、博士課程と修士課程の認定の目安という言葉が使われていますが、それが具体的にどこかに書かれているのでしょうか、というのが気になりました。目安という言葉が気になりました。例えば、博士課程であれば、こういうものを書いたものはないと思いますが、ピアレビューの論文が2本なければいけないとか、そういうふうなことまでを指しているのか、それとも、ある教員がこういう内容であればいいという漠然としたものなのか、ということが気になりました。どちらを指しているのか。同じルールで

修士課程を判断することはとても難しいので、その目安は一体どこに書いてあるのか、ということが気になりました。

以上でございます。勝手なことを申し上げて申し訳ありません。

田窪： ありがとうございます。

川添： 最後の点だけ。修士課程についてはともかく、博士課程については博士論文提出のためには、専修によって数、その他は異なりますが、一定のピアレビューを受けた、そういう雑誌に **publish** されたものが何本あるか、ということ的前提にする、少なくとも原則にするということは決めております。それは資料として出すべきだったかもしれませんがね。ただ、修士課程についてはもちろん単位の認定ということと、あとは論文の **quality** しか言いようがないです。それは、専修の **discipline** の中で複数の教員で判定をしますから、その間に一種の透明で合理性があるだろう、と考えています。論文の **quality** に関しては明示的な基準、目安があるわけではありません。

田窪： よろしいでしょうか。

服部研究科長： ちょっと追加しますと、博士論文、学位請求論文を出すその手続きは、博士後期課程1年に進学した後、1年ごとに研究報告を出し、最終年度に論文作成計画書を出して認定を受ける。そしてその上で審査付きの学会誌論文などを何本公表しているとか、専修によって条件が違いますが、そういう手続き規定、申し合わせがあります。

川添： そうですね、手続きは詳しく書いてあるのですが、学生便覧の中に学会誌論文公表のことは書いてないはずですが、内規のレベルというか。

服部： 論文何本というのは書いてありませんが、共通の手続きとしては、1年次、2年次、3年次で出すべきものについては規定しています。

榎本： すみません。一言忘れた点で、観点の2-2にかかわると思いますが、文学部2-Dの資料に委員会名簿があります。この自己評価委員会の先生方もそうですが、任期が大体1年になっています。任期が1年ですと、1年ごとに所属委員会が変わりますので、委員会の仕事も新たに覚えなければいけません。あまり効率的な委員会運営ができてないのではないかと思います。

服部研究科長： 阪大ではどうですか。

榎本： 阪大文学研究科は2年です。委員によっては2年して、また再任されて、その結果、4年～6年とやる場合もあります。

吉田： ひとつには認証評価や法人評価があるからその前に大慌てですのではなくて、多くの教員が自己評価は日常の営みであるという意識を持つ方がいいだろうということで、みんなにかかわってもらう、という背景があるように思います。

榎本： 仰る通りで、確かに様々な人が様々な仕事をしたら、全員が様々な仕事を覚えられて、それはそれでいいと思いますが、ただ、組織としては効率的な運営ができるのかなと思っただけです。

田窪： よろしいでしょうか。

榎本： それから少し細かいことですが、平成 23 年度から修士課程や学部の学生定員を削減されていましたが、その際に教員の定員を減らさなくて良かったのですか。

服部研究科長： 教員は修士の定員削減の概算要求では、人文科学研究所の協力講座に伴う修士の定員というものをなしにしました。その協力講座を修士定員をともなわない別の形にしました。協力講座は続いています。人文研の協力講座の教員に伴う修士の定員 16 を、協議の結果を解消しました。それで教員の定員を削減せずすみしました。

榎本： そういう風にして、うまく減らさずに済みます、そういう作戦をされたということですね、有難うございます。

田窪： あと少し時間があります。

齋藤： 具体的なことですが、文学部案内の 48 ページの奨学制度のところ、修士課程と博士課程の奨学生率を出してあります。それが 22 年、23 年に以前の年度よりも、10% ぐらい下がっているように見えます。あるいは博士課程の後期課程でも 10% ぐらい下がっているように見えますが、これは何か特別な理由があるのでしょうか。つまり、最初修士を見ますと 19 年度 39、20 年度 37、39 ときて、次に 22 年度で 28% に落ちて、28% にまた落ちたままです。これは落ちたと見るのかさえも分かりませんが、博士の方も 36、45、34 ときて、次に 22、25 となっています。これは何か特別な理由があるのでしょうか。

川添： 二塚さん、分かりますか。枠が減ったということは……。誤差じゃないですよ、たぶんこれは。

二塚： 誤差ではないです。

榎本： 大阪大学文学研究科の博士前期課程（修士課程）では、こんな 39% や 28% はとても出ません。大体 1 割ぐらいです。京都大学はうらやましい、阪大よりはるかに高くて。

服部研究科長： それも最近、もちろん利子付きで返済義務付きですから、われわれの頃とは全然違うので、初めから希望しない院生が結構多いです。返済できるか、就職の見通しはどうかを考えて、家庭の事情はどうか分かりませんが、希望しない学生も少なくない。だから、希望する学生はほとんどもらっています。

齋藤： 博士課程の方は、第 2 種の値はほとんど 0 ですから、下がったことに関係してないのではないかと思います。

榎本： ここの奨学生率は希望者に対する採用者率とはなっていないので、この数字はもう一つかなと思いました。

川添： そうすべきかもしれませんね。

藤森： すみません、修士課程の 23 年度の数字ですが、計算ミスをしているようです。奨学生率が 28% ではなく 35% が実際の数字です。申し訳ございません。

榎本： この奨学生率というのは第 1 種、第 2 種の合計ですか。

藤森： 合計です。

榎本： そしたらそうですね。平成 23 年度は正しいのですか。

藤森： 22年度が28%というのは正しいです。23年度の28%が間違っています。

榎本： 22年度は正しく、23年度が間違っている。そうですね。

田窪： それではよろしいでしょうか。他にございませんか。もし、ありませんでしたら、それでは、服部研究科長、閉会の言葉をお願いいたします。

【閉会、研究科長挨拶】

服部： 座ったままで失礼いたします。本日は本当にお忙しいところ、先生方には非常に貴重な批評を、提案、提言を含めていただきまして、ありがとうございます。確かに私どもさまざまな課題を、研究と教育の関係、大学院と学部との関係、マスターとドクターの関係など今日、おっしゃっていただかなかった点もふくめ、多く抱えております。最近の学生、学部生の気質、能力、関心のありようは、専門の勉強への関わり方は、個人差がありますが、かなり変わって来ています。そういう中で、われわれ自身、今の教員が学生時代だった頃の文学部・研究科の雰囲気や日常、つまり基本的には院生は研究室での研究生活を中心にし、研究成果を研究室を中心とした研究会や演習で示し、それによって学生も刺激を受ける。そのような学問的雰囲気がかなり変わってきています。その中で修士課程の学生も意識や将来に関する選択が多様化しています。そういう新たな状況で研究者養成大学の理念、リサーチユニバーシティという言葉を使いますが、それで割り切って文学研究科全体のミッションを定義し、突っ走ってよいのかどうかということは、もう少し考えてみなければならないと思います。

そういう意味で、今日いろいろと有益なご意見をいただきましたが。とりわけ、学生のアンケートの結果をどういうふうに改善につなげていくか、アンケート自体のやり方や工夫や徹底性も踏まえて、それをどういうふうに改善につなげていくか、その結果を学生にどのように周知していくか、ということも皆さんにご指摘いただきました。これは、なるべく早く、改善、実施につなげていきたいと思っております。その他、自己評価レポートの項目にかかわらない、いろいろなご指摘をいただいた点もふまえて、今後の部局の運営、教育研究体制の改善に努めてまいりたいと思っております。本日は、本当にありがとうございます。

田窪： それでは外部評価委員会を閉会したいと思います。ありがとうございます。

参 考 资 料

外部評価の目的と評価項目

1. 外部評価の目的

「平成 25 年度大学機関別認証評価の受審に向けた自己点検・評価」に基づいて作成した自己点検・評価レポートに対して、外部評価をしていただきます。具体的には、自己点検・評価レポートの教育の項目について自己評価が適切に行われているかどうかを検証する。

2. 外部評価のための資料

①京都大学文学部・大学院文学研究科教育に関する自己点検・評価レポート 平成 24 年

②上記①の添付資料

③学生による授業評価と卒業生・大学院修了生による教育評価 平成 23 年

(文学部HPを参照：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/evaluation/evaluation_index/)

④平成 24 年度京都大学大学院文学研究科学生便覧

(文学部HPを参照：

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2010/03/6ecb3229037b4c393b06504f4df8f8ca.pdf>)

⑤平成 24 年度京都大学大学院文学研究科・文学部案内

(文学部HPを参照：<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/publication/>)

⑥平成 24 年度文学部専修案内

(文学部HPを参照：

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2010/03/96b92a1faed2e3289b46f9d5340599c82.pdf>)

⑦平成 24 年度文学研究科専攻（専修）案内

(文学部HPを参照：

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2010/03/661d013f3b2d81e1f3b8a87c776e95ac.pdf>)

3. 評価項目

①教育の理念、目的（学部（観点 1-1-①）、大学院（観点 1-1-②）、文学部の目標と理念（大学院、学部）参照）

②教育の実施体制（観点 2-1、2-2、3-1、3-2、3-3、資料②3-B：講座配置表参照）

③学生の受入れ（観点4-1、4-2、アドミッションポリシー、文学部HPを参照）

④教育内容・方法（学部（観点5-1、5-2、5-3）大学院（観点5-4、5-5、5-6）、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー 文学部HPを参照）

⑤学業の成果（観点6-1、6-2、8-1-①を参照、博士号の数）

⑥進路・就職、就職後の状況（観点6-2 文学部HPを参照）

京都大学文学部の理念と目標に関する内規

平成21年1月15日 文学研究科・文学部教授会決定

京都大学文学部の理念と目標について、次のとおり定める。

京都大学文学部は、京都大学創立以来の自由の学風を継承し、人文学の各分野の伝統を発展させつつ、他の学問分野との調和や融合をはかりながら、人文学における世界最高水準の研究に基づく教育を推進し、その成果を通じて人類の調和ある共存に貢献することを目的として、以下の目標を定める。

- 一、 京都大学文学部は、人間の諸活動の原理的な解明と、絶えず変化する環境の中でのそれらのもつ価値の問い直しを通じて、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わる学術を教授する。
- 一、 京都大学文学部は、人類の文化の継承と調和ある共存に寄与し、真に新しい文化創造の担い手となる、深い専門知識と広い教養を具え、かつ倫理性にも優れた人材を育成する。
- 一、 京都大学文学部は、地域密着的な視点と地球規模の広角的視点の両面から、京都・日本・アジアに固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与すると同時に、人類の文化全般についての多元的・総合的探求を推進する。
- 一、 京都大学文学部は、地域連携と国際交流の強化を通じて、教育と研究の成果を地域社会ならびに国際社会にひろく還元する。
- 一、 京都大学文学部は、人権を尊重し、環境に配慮した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える。

附 則

この内規は、平成21年1月15日から施行する。

京都大学大学院文学研究科の理念と目標に関する内規

平成21年1月15日 文学研究科・文学部教授会決定

京都大学大学院文学研究科の理念と目標について、次のとおり定める。

京都大学大学院文学研究科は、京都大学創立以来の自由の学風を継承し、人文学の各分野の伝統を発展させつつ、他の学問分野との調和や融合をはかりながら、人文学における世界最高水準の研究と教育を推進し、その成果を通じて人類の調和ある共存に貢献することを目的として、以下の目標を定める。

- 一、京都大学大学院文学研究科は、人間の諸活動の原理的な解明と、絶えず変化する環境の中でのそれらのもつ価値の問い直しを通じて、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わる学術を教授・研究する。
- 一、京都大学大学院文学研究科は、人類の文化の継承と調和ある共存に寄与し、真に新しい文化を創造しうる卓越した学識と応用能力を有する、学術研究者および高度専門職業人を育成する。
- 一、京都大学大学院文学研究科は、地域密着的な視点と地球規模の広角的視点の両面から、京都・日本・アジアに固有の知的遺産の維持・継承・発展に寄与すると同時に、人類の文化全般についての多元的・総合的探求を推進する。
- 一、京都大学大学院文学研究科は、地域連携と国際交流の強化を通じて、教育と研究の成果を地域社会ならびに国際社会にひろく還元する。
- 一、京都大学大学院文学研究科は、人権を尊重し、環境に配慮した運営を行うとともに、社会的な説明責任に応える。

附 則

この内規は、平成21年1月15日から施行する。

学部年度別入学試験結果の概要

区分		募集人員	志願者数	第一段階選抜	受験者数	合格者数	入学辞退数	入学者数
平成20年度	前期	220	651	651	645	224	0	224
平成21年度	前期	220	561	561	558	223	1	222
平成22年度	前期	220	738	738	722	227	0	227
平成23年度	前期	220	744	744	734	226	0	226
平成24年度	前期	220	662	662	644	226	0	226

参考資料6

平成17年度～24年度 修士課程入学者数調べ

	専攻	定員	入学者数	充足率
17年度	東洋文献文化学	22	13	0.59
	西洋文献文化学	22	19	0.86
	思想文化学	24	19	0.79
	歴史文化学	28	28	1
	行動文化学	20	20	1
	現代文化学	10	9	0.9
	合計		126	108
18年度	東洋文献文化学	22	18	0.82
	西洋文献文化学	22	13	0.59
	思想文化学	24	20	0.83
	歴史文化学	28	22	0.79
	行動文化学	20	19	0.95
	現代文化学	10	9	0.9
	合計		126	101
19年度	東洋文献文化学	22	17	0.77
	西洋文献文化学	22	14	0.64
	思想文化学	24	21	0.88
	歴史文化学	28	24	0.86
	行動文化学	20	18	0.9
	現代文化学	10	12	1.2
	合計		126	106
20年度	東洋文献文化学	22	12	0.55
	西洋文献文化学	22	16	0.73
	思想文化学	24	21	0.88
	歴史文化学	28	24	0.86
	行動文化学	20	21	1.05
	現代文化学	10	9	0.9
	合計		126	103
21年度	東洋文献文化学	22	13	0.59
	西洋文献文化学	22	10	0.45
	思想文化学	24	19	0.79
	歴史文化学	28	21	0.75
	行動文化学	20	28	1.4
	現代文化学	10	11	1.1
	合計		126	102
22年度	東洋文献文化学	22	17	0.77
	西洋文献文化学	22	14	0.64
	思想文化学	24	25	1.04
	歴史文化学	28	26	0.93
	行動文化学	20	27	1.35
	現代文化学	10	10	1
	合計		126	119
23年度	東洋文献文化学	18	17	0.94
	西洋文献文化学	18	10	0.56
	思想文化学	22	23	1.05
	歴史文化学	22	23	1.05
	行動文化学	20	27	1.35
	現代文化学	10	8	0.8
	合計		110	108
24年度	東洋文献文化学	18	12	0.67
	西洋文献文化学	18	11	0.61
	思想文化学	22	19	0.86
	歴史文化学	22	24	1.09
	行動文化学	20	22	1.1
	現代文化学	10	7	0.7
	合計		110	95

専攻	充足率の平均
東洋文献文化学	1.14
西洋文献文化学	1.02
思想文化学	1.42
歴史文化学	1.47
行動文化学	1.82
現代文化学	1.5

平成17年度～24年度 修士課程入学者数調べ【協力講座定員を除く】

	専攻	定員	入学者数	充足率
17年度	東洋文献文化学	16	13	0.81
	西洋文献文化学	20	19	0.95
	思想文化学	22	19	0.86
	歴史文化学	22	28	1.27
	行動文化学	20	20	1
	現代文化学	8	9	1.13
	合計	108	108	1
18年度	東洋文献文化学	16	18	1.13
	西洋文献文化学	20	13	0.65
	思想文化学	22	20	0.91
	歴史文化学	22	22	1
	行動文化学	20	19	0.95
	現代文化学	8	9	1.13
	合計	108	101	0.94
19年度	東洋文献文化学	16	17	1.06
	西洋文献文化学	20	14	0.7
	思想文化学	22	21	0.95
	歴史文化学	22	24	1.09
	行動文化学	20	18	0.9
	現代文化学	8	12	1.5
	合計	108	106	0.98
20年度	東洋文献文化学	16	12	0.75
	西洋文献文化学	20	16	0.8
	思想文化学	22	21	0.95
	歴史文化学	22	24	1.09
	行動文化学	20	21	1.05
	現代文化学	8	9	1.13
	合計	108	103	0.95
21年度	東洋文献文化学	16	13	0.81
	西洋文献文化学	20	10	0.5
	思想文化学	22	19	0.86
	歴史文化学	22	21	0.95
	行動文化学	20	28	1.4
	現代文化学	8	11	1.38
	合計	108	102	0.94
22年度	東洋文献文化学	16	17	1.06
	西洋文献文化学	20	14	0.7
	思想文化学	22	25	1.14
	歴史文化学	22	26	1.18
	行動文化学	20	27	1.35
	現代文化学	8	10	1.25
	合計	108	119	1.1
23年度	東洋文献文化学	12	17	1.42
	西洋文献文化学	16	10	0.63
	思想文化学	20	23	1.15
	歴史文化学	16	23	1.44
	行動文化学	20	27	1.35
	現代文化学	8	8	1
	合計	92	108	1.17
24年度	東洋文献文化学	12	12	1
	西洋文献文化学	16	11	0.69
	思想文化学	20	19	0.95
	歴史文化学	16	24	1.5
	行動文化学	20	22	1.1
	現代文化学	8	7	0.88
	合計	92	95	1.03

専攻	充足率の平均
東洋文献文化学	1.61
西洋文献文化学	1.12
思想文化学	1.55
歴史文化学	1.9
行動文化学	1.82
現代文化学	1.88

協力講座に関わる定員

専攻	定員数
東洋文献文化学	6
西洋文献文化学	2
思想文化学	2
歴史文化学	6
行動文化学	0
現代文化学	2

平成17年度～24年度 博士後期課程進学者・編入学者数調べ

	専攻	定員	入学者数	充足率
17年度	東洋文献文化学	11	6	0.55
	西洋文献文化学	11	8	0.73
	思想文化学	12	11	0.92
	歴史文化学	14	13	0.93
	行動文化学	10	13	1.3
	現代文化学	5	3	0.6
	合計	63	54	0.86
18年度	東洋文献文化学	11	13	1.18
	西洋文献文化学	11	4	0.36
	思想文化学	12	11	0.92
	歴史文化学	14	11	0.79
	行動文化学	10	16	1.6
	現代文化学	5	5	1
	合計	63	60	0.95
19年度	東洋文献文化学	11	7	0.64
	西洋文献文化学	11	8	0.73
	思想文化学	12	11	0.92
	歴史文化学	14	11	0.79
	行動文化学	10	13	1.3
	現代文化学	5	5	1
	合計	63	55	0.87
20年度	東洋文献文化学	11	8	0.73
	西洋文献文化学	11	10	0.91
	思想文化学	12	17	1.42
	歴史文化学	14	12	0.86
	行動文化学	10	15	1.5
	現代文化学	5	4	0.8
	合計	63	66	1.05
21年度	東洋文献文化学	11	10	0.91
	西洋文献文化学	11	7	0.64
	思想文化学	12	11	0.92
	歴史文化学	14	6	0.43
	行動文化学	10	10	1
	現代文化学	5	6	1.2
	合計	63	50	0.79
22年度	東洋文献文化学	11	6	0.55
	西洋文献文化学	11	13	1.18
	思想文化学	12	13	1.08
	歴史文化学	14	14	1
	行動文化学	10	10	1
	現代文化学	5	6	1.2
	合計	63	62	0.98
23年度	東洋文献文化学	8	8	1
	西洋文献文化学	10	5	0.5
	思想文化学	11	13	1.18
	歴史文化学	11	10	0.91
	行動文化学	10	18	1.8
	現代文化学	5	6	1.2
	合計	55	60	1.09
24年度	東洋文献文化学	8	8	1
	西洋文献文化学	10	2	0.2
	思想文化学	11	13	1.18
	歴史文化学	11	17	1.55
	行動文化学	10	11	1.1
	現代文化学	5	4	0.8
	合計	55	55	1

専攻	充足率の平均
東洋文献文化学	1.31
西洋文献文化学	1.05
思想文化学	1.71
歴史文化学	1.45
行動文化学	2.12
現代文化学	1.56

平成17年度～24年度 博士後期課程進学者・編入学者数調【協力講座を除く】

	専攻	定員	入学者数	充足率
17年度	東洋文献文化学	8	6	0.75
	西洋文献文化学	10	8	0.8
	思想文化学	11	11	1
	歴史文化学	11	13	1.18
	行動文化学	10	13	1.3
	現代文化学	4	3	0.75
	合計	54	54	1
18年度	東洋文献文化学	8	13	1.63
	西洋文献文化学	10	4	0.4
	思想文化学	11	11	1
	歴史文化学	11	11	1
	行動文化学	10	16	1.6
	現代文化学	4	5	1.25
	合計	54	60	1.11
19年度	東洋文献文化学	8	7	0.88
	西洋文献文化学	10	8	0.8
	思想文化学	11	11	1
	歴史文化学	11	11	1
	行動文化学	10	13	1.3
	現代文化学	4	5	1.25
	合計	54	55	1.02
20年度	東洋文献文化学	8	8	1
	西洋文献文化学	10	10	1
	思想文化学	11	17	1.55
	歴史文化学	11	12	1.09
	行動文化学	10	15	1.5
	現代文化学	4	4	1
	合計	54	66	1.22
21年度	東洋文献文化学	8	10	1.25
	西洋文献文化学	10	7	0.7
	思想文化学	11	11	1
	歴史文化学	11	6	0.55
	行動文化学	10	10	1
	現代文化学	4	6	1.5
	合計	54	50	0.93
22年度	東洋文献文化学	8	6	0.75
	西洋文献文化学	10	13	1.3
	思想文化学	11	13	1.18
	歴史文化学	11	14	1.27
	行動文化学	10	10	1
	現代文化学	4	6	1.5
	合計	54	62	1.15
23年度	東洋文献文化学	5	8	1.6
	西洋文献文化学	9	5	0.56
	思想文化学	10	13	1.3
	歴史文化学	8	10	1.25
	行動文化学	10	18	1.8
	現代文化学	3	6	2
	合計	45	60	1.33
24年度	東洋文献文化学	5	8	1.6
	西洋文献文化学	9	2	0.22
	思想文化学	10	13	1.3
	歴史文化学	8	17	2.13
	行動文化学	10	11	1.1
	現代文化学	3	4	1.33
	合計	45	55	1.22

専攻	充足率の平均
東洋文献文化学	1.89
西洋文献文化学	1.16
思想文化学	1.87
歴史文化学	1.89
行動文化学	2.12
現代文化学	2.12

協力講座に関わる定員

専攻	定員数
東洋文献文化学	3
西洋文献文化学	1
思想文化学	1
歴史文化学	3
行動文化学	0
現代文化学	1

文学部

(1) 文学部が望む学生像

文学部における教育は、人文学の名のもとに、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化にかかわって展開されてきた諸学の成果を学生に教授し、共に学び考えながら、新たな知的価値を創出することをめざしてなされるものです。そこでの活動には、単に文系の範疇に含まれるものだけではなく、高度な数学的方法や実験的手法、また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は、人文学の諸学問に関して、こうした幅広い能力を具え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することをめざしています。そのために求められる学生は、過去から、現在に至り、さらに未来にまでのびる人類の営みについて、様々な角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために、論理的に、また歴史的に、創造性豊かな考察を展開することのできる能力をもつ者であることが望まれます。

文学部では、以上の理由から、センター試験によっては、総合的な基礎学力を学生が有することを求め、さらに個別学力試験では、国語、外国語、地理・歴史とならんで数学を課すことによって、思考力の柔軟性と論理性を問うことにしています。

(2) 文学部の教育内容

本学部は、明治39年(1906)9月、文科大学として創設、大正8年(1919)2月文学部と称されることになりました。文科大学開設の年、哲学科が、翌40年(1907)9月史学科、さらにその翌41年(1908)9月に文学科が設置され、45年(1912)5月までに当初の教育研究体制がほぼ整備されました。それ以後、時代の要求に応じて講座の拡充が行われてきましたが、平成4年(1992)4月より新たに文化行動学科が設置され、4学科、44講座、30専攻となりました。平成7年(1995)4月から4学科を廃止し、新たに人文学科1学科が設置されました。

人文学科設置にあたっては近年の人文科学のめざましい発展に即応するとともに、現在人類が共通にもつ様々な特性や、共通に抱える思想的、倫理的、文化的、科学的課題を基礎において新しい人文学の構築を目指しました。この目的に沿って、より広い学問的視野に対応した哲学基礎文化学系、東洋文化学系、西洋文化学系、歴史基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文科学系の6系と、その中に従来の特攻に相当する32の専修学問分野が設置されています。

志願者が入学前に専修の志望を決定することは難しいと思われるので、2回生でそれぞれの系に、次いで3回生からは各専修に分属します。各専修とも人間社会についての深い知識と理解を必要とすることから、語学はもちろん、諸学を広く勉強することが望まれます。3・4回生時は、本格的専門教育を行います。少人数の専門教育が原典に即して行われる場合が多くなります。また、各専修における高度の専門教育と並んで、人文学全体に対する広い視野を養うため、それぞれの系を単位とした共通の講義も開講されます。卒業に際しては、演習指導をもとにして卒業論文を作成することが必要です。

卒業後の進路は、大学院へ進学する者のほか、教育関係、新聞社、放送局、出版社、官公庁、図書館、博物館、情報関係等、多方面にわたっています。

京都大学文学部アドミッションポリシー

文学部における教育は、人文学の名のもとに、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わって展開されてきた諸学の成果を学生に教授し、共に学び考えながら、新たな知的価値を創出することをめざしてなされるものです。そこでの活動には、単に文系の範疇に含まれるものだけでなく、高度な数学的方法や実験的手法、また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は、人文学の諸学問に関して、こうした幅広い能力を具え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することをめざしています。そのために求められる学生は、過去から、現在に至り、さらに未来にまでのびる人類の営みについて、様々な角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために、論理的に、また歴史的に、創造性豊かな考察を展開することのできる能力をもつ者であることが望まれます。

文学部では、以上の理由から、センター試験によっては、総合的な基礎学力を学生が有することを求め、さらに個別学力試験では、国語、外国語、地理・歴史とならんで数学を課すことによって、思考力の柔軟性と論理性を問うことにしています。

京都大学文学研究科アドミッションポリシー

京都大学文学研究科は、人間の諸問題の原理的な解明と、絶えず変化する環境の中でのそれらのもつ価値の問い直しを通じて、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わる学術を教授・研究することによって、人類の文化の継承と調和ある共存に寄与し、真に新しい文化を創造しうる卓越した学識と応用能力を有する学術研究者および高度専門職業人を育成しようとするものです。そのために、人文学の各分野における専門的知識を有するとともに、国際的な場でも活動しうるだけの外国語能力にもすぐれた人材を、大学院入学者選抜試験においては求めるものです。

博士号取得者(文学研究科・文学部案内47頁より)

年度	課程博士	論文博士	合計
平成19年度	39	10	49
平成20年度	36	13	49
平成21年度	41	9	50
平成22年度	31	8	39
平成23年度	35	16	51

**学生による授業評価と
卒業生・大学院修了生による教育評価**

平成 23(2011)年

京都大学大学院文学研究科・文学部

まえがき

京都大学大学院文学研究科・文学部はこの数年間、部局の自己点検・評価の作業の一環として、学部生、大学院生にたいする授業評価のアンケート調査と、学部卒業生、大学院修士課程修了者にたいする教育経験評価のアンケート調査を行ってきました。このうち前者は第2委員会によるもので、主として専門課程の主要講義にかんしてその内容や質について問うものであり、後者は第3委員会によるもので、卒業生、修了者の文学部・文学研究科での学習・研究の経験全体にたいする評価を問うものであります。前者はいうまでもなく個別の授業活動について、教員の反省や啓蒙、FD活動に資することを目的にしておりますし、後者は特に、志望専修を決定するうえでのガイダンスなどが適切に行われているかどうかを知り、学生にたいする大学における勉学・研究のオリエンテーションのあり方を再検討すると同時に、文学部・文学研究科の教育活動全般についての包括的展望を得るための資料として活用することを目的としています。

これらのアンケート調査は、前者については平成18年度から、後者については平成19年度から行われ、毎年の集計結果とそれについての分析が文学研究科ホームページに発表されています。またこの調査の分析は、この間の調査の累積的な推移としても検討され、最近の傾向を知るために使われています。ここに添付する平成24年3月実施のアンケート調査の集計結果分析は、この間の推移に着目して現在の教育状況の特徴をまとめたものです。

このアンケート調査の実施や集計には、事務部教務掛、総務掛の職員の方々のひとかたならぬご協力をいただきました。この点をここにあつくお礼申し上げます。

平成25（2013）年1月

京都大学大学院文学研究科・文学部

前自己点検・評価委員会委員長 伊藤邦武

目 次

1. 学部生による授業評価アンケート
 - 1.1 アンケート本紙
 - 1.2 結果と分析
 - 1.3 データ

2. 大学院生による授業評価アンケート
 - 1.1 アンケート本紙
 - 1.2 結果と分析
 - 1.3 データ

3. 文学部卒業生アンケート
 - 3.1 アンケート本紙
 - 3.2 結果と分析
 - 3.3 データ

4. 文学研究科修士課程修了者アンケート
 - 4.1 アンケート本紙
 - 4.2 結果と分析
 - 4.3 データ

5. 文学研究科博士後期課程修了者アンケート
 - 5.1 アンケート本紙
 - 5.2 結果と分析
 - 5.3 データ

1. 学部生による授業評価アンケート

アンケート用紙

京都大学文学部「学生による授業評価」(系共通科目・学部講義用)

このアンケートは、文学部系共通科目(学部講義)の授業について、学生の皆さんからの意見を聴き、専門基礎にかかわる授業・カリキュラム編成に関して今後の改善に役立てようとするためのものです。率直な意見を記入してください。

①～⑫の質問について、5－4－3－2－1の5段階のうちで最もよく当てはまる数字に○印を付けてください。5が最高の評価で、1が最低の評価です。⑬は自由記述です。

●授業科目名 () ●担当教員名 ()
●あなたの所属学部 () ●あなたの回生 ()

I. あなたの授業への参加度について

① この授業にほとんど出席した。
(100%←→20%)
5－4－3－2－1

② この授業に積極的に参加し、自主的に学習した。
5－4－3－2－1

II. 授業の内容について

③この授業はわかりやすかった。
5－4－3－2－1

④ 授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。
5－4－3－2－1

⑤ この授業は面白かった。
5－4－3－2－1

⑥ この授業は有益だった。
5－4－3－2－1

III. 授業の方法について

⑦ 声は聞き取りやすかった。
5－4－3－2－1

⑧ 学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。
5－4－3－2－1

⑨ 自主的な学習を促すための工夫や助言があった。
5－4－3－2－1

⑩ 授業に対する教員の熱意を感じた。
5－4－3－2－1

VI. 総合的な評価

⑪ シラバスの内容と授業の内容はよく合致していた。
5－4－3－2－1

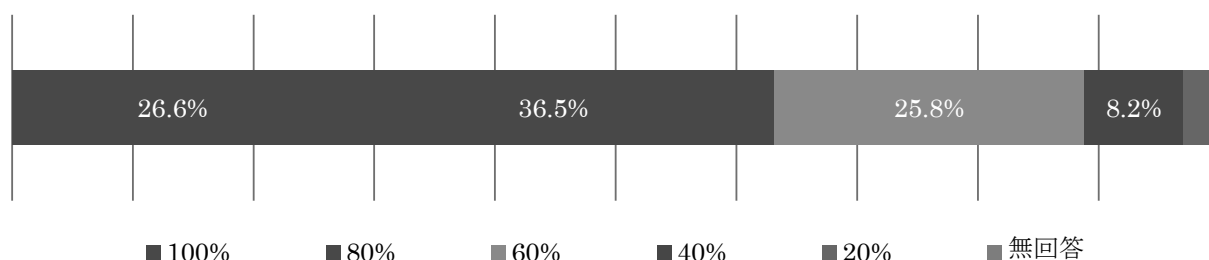
⑫ 全体としてこの授業に満足した。
5－4－3－2－1

⑬ この授業についての感想、授業の内容・方法などについて希望、改善してほしい点、授業環境や教室設備についての要望などを書いてください。

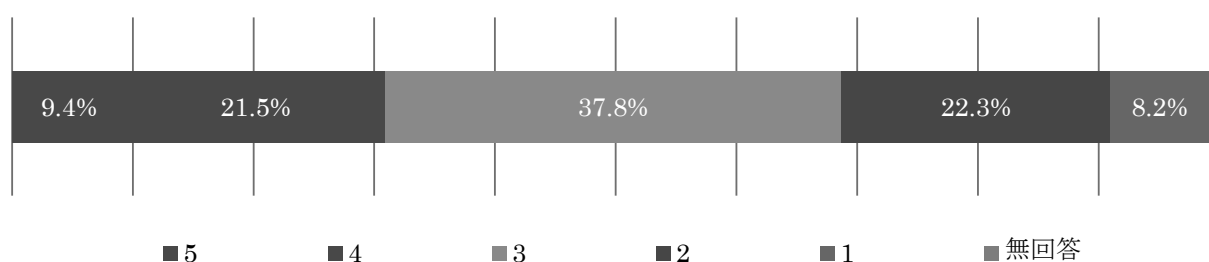
分析と結果 回答者 233 名

I 授業への参加度

① この授業にほとんど出席した



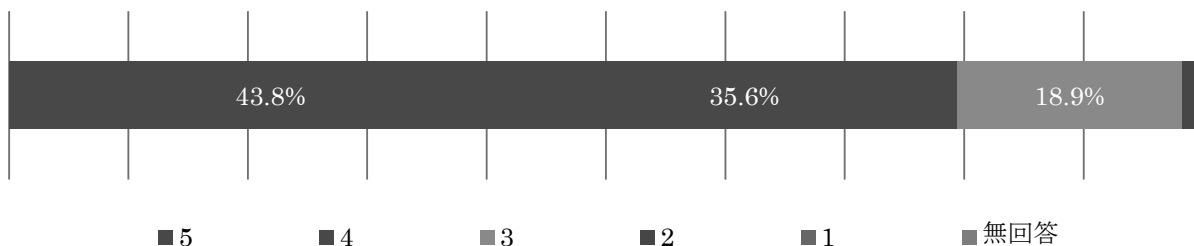
② この授業には積極的に参加し、自主的に学習した (5 が最高の評価、1 が最低の評価)



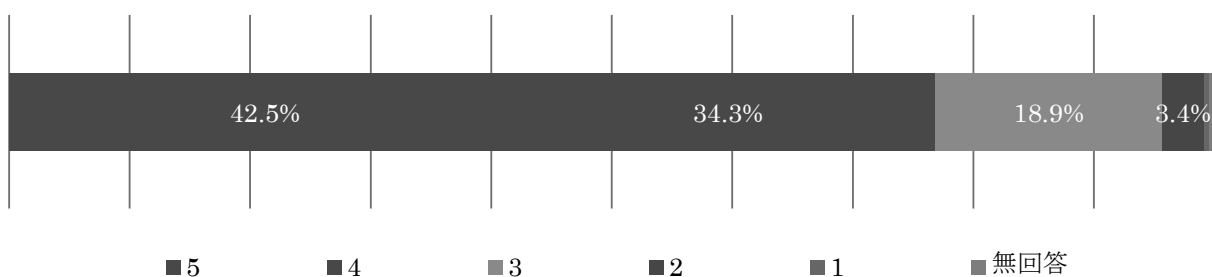
出席についてはおおむね良好であると思われる。②の「積極的な参加かどうか」については、アンケートの調査科目が概論科目であることから考えれば良好な数字であると分析されよう。つまり、学生が何を以て「積極的」と判断したかが問題であり、「今日もちゃんと授業に出よう」と考えたという程度のことを「わたしは積極的に参加した」と考えるとするならば、この数字には不満が残ることになるが、そもそも聴くことがベースである概論の講義の場合、「積極的」という概念が当てはまるのかという疑念を持った学生は、「2, 1」を選択せざるを得なかったと思われ、分析は非常に難しい。ただし、「自主的な学習」についてはさらなる分析が必要で、そもそも概論の講義で予習復習をすることを学生が考えているか（そもそも毎講時あたり3時間の予復習が必要であると設置基準が決めているという「法律」を知っているかどうか）が問題であり、さらに言うならば、それをはたして教員が要求するのか（すべきか）どうかも割り引いて考える必要がある。従って、この数字のみを以て「自主的な学習（をしようという意識）が本学部の学生には足りない」と判断するのは早計であり、本学部の場合、その予復習に充てる時間は演習実験等にその多くを割くことが必然的なすがたであることを理解しておく必要があると思われる。

II 内容について

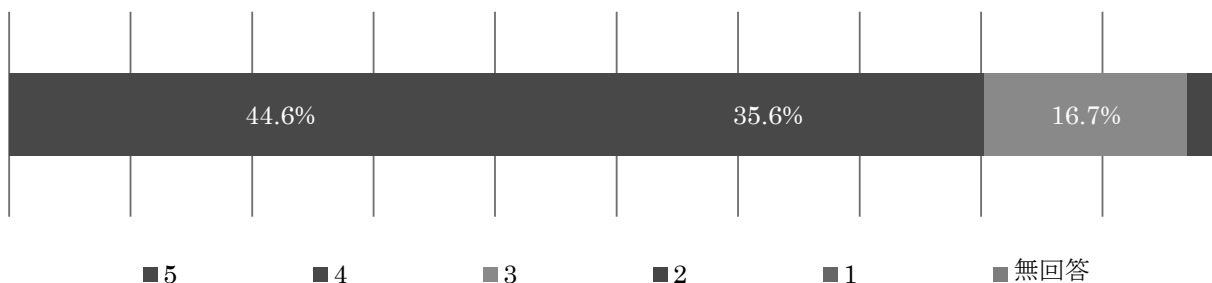
③ この授業はわかりやすかった (5が最高の評価、1が最低の評価)



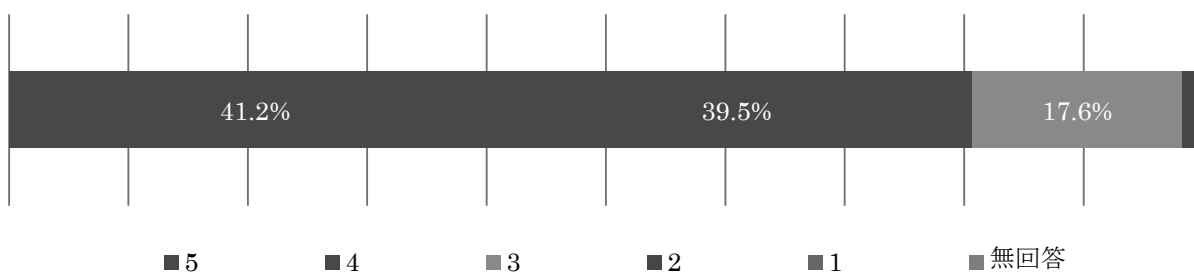
④ 授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた (5が最高の評価、1が最低の評価)



⑤ この授業は面白かった (5が最高の評価、1が最低の評価)



⑥ この授業は有益だった (5が最高の評価、1が最低の評価)

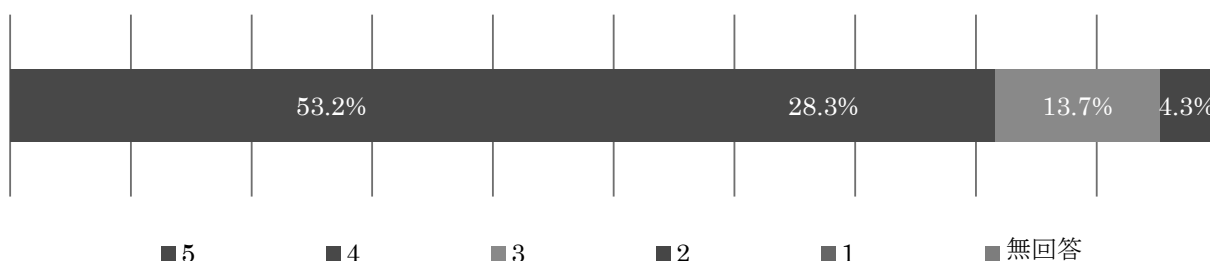


すべての項目について、「4」「5」を合わせれば75パーセントを超えており、目標はほぼ達成されているものと思われる。ただ、「わかりやすい」「体系的である」「面白い」「有益」の四項目について、数字はほ

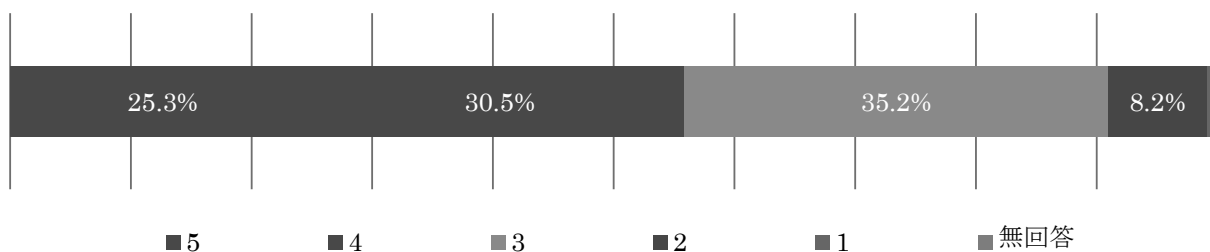
ば同じであって、同一人物はすべての項目に同じ評価をした可能性が高いことが推測される。仮にそうだとすると、「わかりやすさ」がその他の内容の印象に対して大きな影響を与えるのであり、授業内容にはやはり第一にこの項目を重視すべきであるという、素朴な分析も可能であろう。ただ、逆に言えば、この四項目を独立して回答するという作業について、アンケート回答者自身がこの四項目を分析して（できて）いないということもいえるのではないか。それこそ素朴な印象としては、「この授業は有益だった」という項目が、文学部の授業としてどんな意味を持つのかを考えると、それが他の三項目と同様の点数で答えられるということ自体に疑問を持たざるを得ない、という分析も可能である。「面白かった」という項目を立てる意味とともに、今後の課題となろう。

Ⅲ 方法について

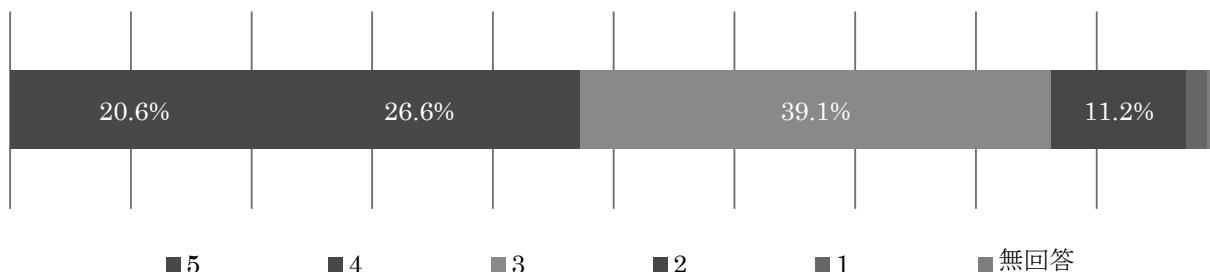
⑦ 声は聞き取りやすかった（5が最高の評価、1が最低の評価）



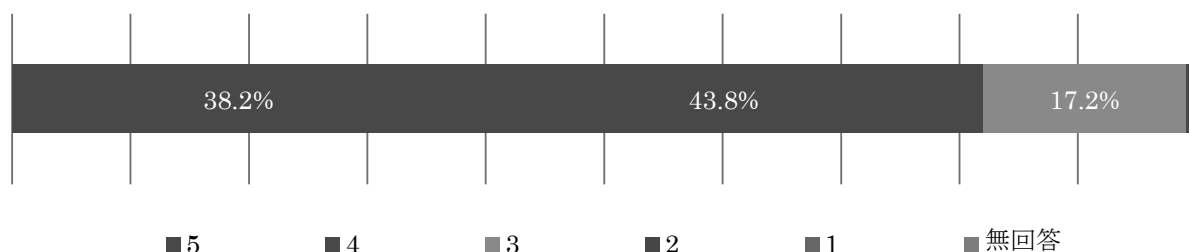
⑧ 学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた（5が最高の評価、1が最低の評価）



⑨ 自主的な学習を促すための工夫や助言があった（5が最高の評価、1が最低の評価）



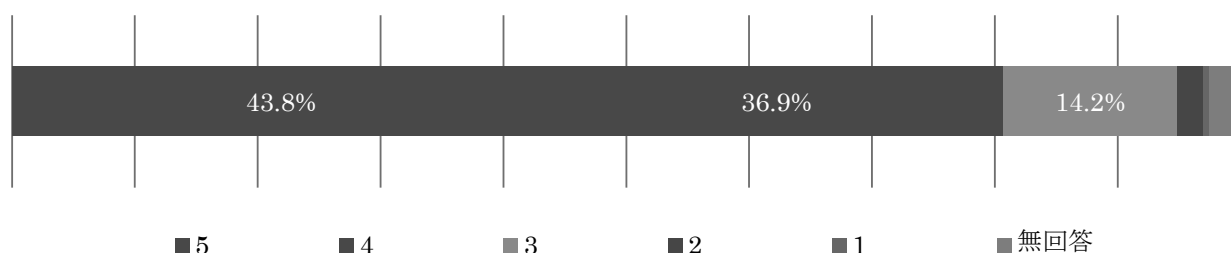
⑩ 授業に対する教員の熱意を感じた (5が最高の評価、1が最低の評価)



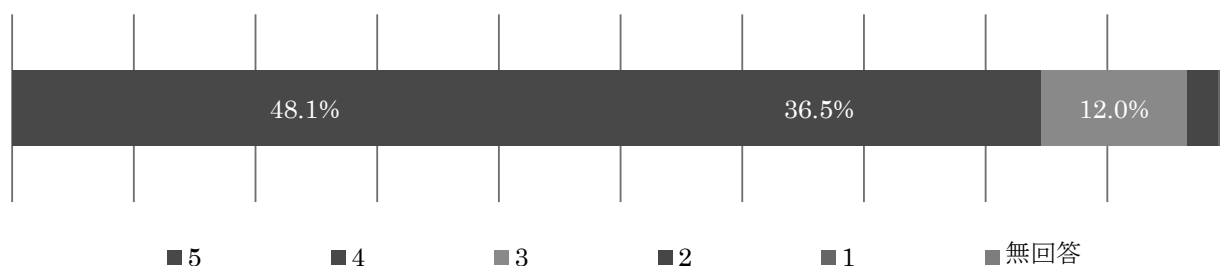
「声が聞き取りやすかった」という、単純に改善可能な項目について、「2もしくは1」の数字がこれだけあがっているということは、教員全員に周知すべきことがらであると思われる。また、⑧について、そこで否定的な回答がなされているということは、「理解度や反応を無視して進めている」という印象だと読めるわけだが、そこでの「3. 2. 1」を合計すると45パーセントほどという数字が出ているのと、上述のおおよそ「わかりやすいと思っているらしい」と推測出来る③の数値の開きには注意が必要であろう。つまり、「自分にはわかりやすかったが、こちらの理解度は無視している」という印象を持った学生が多いかもしれない、という推測である。要するに、「教員は学生の理解度などについては考慮なく授業を行っているが、理解度の高い学生にはちゃんと理解が出来ている」という状況である、ということである。それがよいことなのかどうかは意見が分かれようが、少なくともそのような現実はある分析可能であろうと思われる。⑨については、②と同様な状況から、負の意見が多いことに問題はないと思われる。なお、⑩について、積極的に評価する回答が多かったことは、高く評価出来るものと思われる。

IV 総合的評価

⑪ シラバスの内容と授業内容はよく合致していた (5が最高の評価、1が最低の評価)



⑫ 全体としてこの授業に満足した (5が最高の評価、1が最低の評価)



概して目標は達成していると思われる。なお注目すべきは⑩の無回答「6」という数字であり、これは（他の項目の無回答の数字と比べるなら）そもそも学生がシラバスを気にしていないということを示す数字であろうと思われる。

※ アンケート全体の印象について

「5」の評価が一番多かったのが「声が聞き取りやすい」であるというのは、いささか残念ではあるが、それは学生がアンケート（他の項目）に真摯に回答してくれた証でもあろうかと思われる。その点では学生諸氏に感謝したい。また、アンケート自体に対する否定的見方を書いた学生が複数いたことも特記すべきことであろうと思われる。なお、教室が寒いとか、プロジェクタの調子が悪いとかすぐに対応出来ることには改善に努めることができるので、これも「我慢強い」学生の気質を語る一面かもしれないが、教員側としてはつとめて改善すべきことからであろう。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目)」(平成23年度実施)

アンケート回収数 : 233名

全体集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	62	85	60	19	7	0	233
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	22	50	88	52	19	2	233
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	102	83	44	4	0	0	233
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	99	80	44	8	1	1	233
⑤	この授業は面白かった。	104	83	39	7	0	0	233
⑥	この授業は有益だった。	96	92	41	4	0	0	233
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	124	66	32	10	1	0	233
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	59	71	82	19	2	0	233
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	48	62	91	26	4	2	233
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	89	102	40	2	0	0	233
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	102	86	33	5	1	6	233
⑫	全体としてこの授業に満足した。	112	85	28	6	1	1	233

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「哲学」)」(平成23年度実施)

履修登録者数：111名 アンケート回収数：55名

全学年集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	6	12	26	9	2	0	55
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	2	12	23	16	2	0	55
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	13	23	18	1	0	0	55
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	21	20	12	2	0	0	55
⑤	この授業は面白かった。	13	24	16	2	0	0	55
⑥	この授業は有益だった。	19	20	15	1	0	0	55
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	9	32	12	2	0	0	55
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	3	21	27	4	0	0	55
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	8	16	25	6	0	0	55
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	12	26	17	0	0	0	55
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	18	28	7	1	0	1	55
⑫	全体としてこの授業に満足した。	21	20	13	1	0	0	55
		145	254	211	45	4	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	6	8	2	1	0	18
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	3	8	5	1	0	18
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	4	7	7	0	0	0	18
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	4	7	6	1	0	0	18
⑤	この授業は面白かった。	1	10	7	0	0	0	18
⑥	この授業は有益だった。	4	8	6	0	0	0	18
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	2	11	3	2	0	0	18
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	7	7	3	0	0	18
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	2	5	7	4	0	0	18
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	2	6	10	0	0	0	18
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	6	7	3	1	0	1	18
⑫	全体としてこの授業に満足した。	5	7	5	1	0	0	18
		33	84	77	19	2	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	4	11	4	0	0	19
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	4	8	7	0	0	19
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	6	9	4	0	0	0	19
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	8	9	2	0	0	0	19
⑤	この授業は面白かった。	4	9	5	1	0	0	19
⑥	この授業は有益だった。	7	7	5	0	0	0	19
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	4	11	4	0	0	0	19
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	8	9	1	0	0	19
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	2	8	7	2	0	0	19
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	4	11	4	0	0	0	19
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	5	12	2	0	0	0	19
⑫	全体としてこの授業に満足した。	8	7	4	0	0	0	19
		49	99	65	15	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	1	3	2	0	0	6
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	1	3	2	0	0	6
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	0	3	3	0	0	0	6
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	2	2	2	0	0	0	6
⑤	この授業は面白かった。	2	2	2	0	0	0	6
⑥	この授業は有益だった。	1	4	1	0	0	0	6
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	0	4	2	0	0	0	6
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	2	4	0	0	0	6
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	1	0	5	0	0	0	6
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	1	5	0	0	0	0	6
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	2	3	1	0	0	0	6
⑫	全体としてこの授業に満足した。	3	2	1	0	0	0	6
		12	29	27	4	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学研究科大学院生・聴講生・科目履修生・他学部生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	5	1	5	1	1	0	13
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	5	4	2	1	0	13
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	4	4	4	1	0	0	13
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	8	2	2	1	0	0	13
⑤	この授業は面白かった。	6	4	2	1	0	0	13
⑥	この授業は有益だった。	8	1	3	1	0	0	13
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	3	7	3	0	0	0	13
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	5	7	0	0	0	13
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	3	4	6	0	0	0	13
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	6	4	3	0	0	0	13
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	6	6	1	0	0	0	13
⑫	全体としてこの授業に満足した。	6	4	3	0	0	0	13
		57	47	43	7	2	0	

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「国語学」)」(平成23年度実施)

履修登録者数 : 79名 アンケート回収数 : 26名

全学年集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	12	10	2	2	0	0	26
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	3	9	10	3	1	0	26
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	20	5	1	0	0	0	26
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	17	8	1	0	0	0	26
⑤	この授業は面白かった。	20	5	1	0	0	0	26
⑥	この授業は有益だった。	17	9	0	0	0	0	26
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	25	1	0	0	0	0	26
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	15	9	2	0	0	0	26
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	12	13	1	0	0	0	26
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	16	10	0	0	0	0	26
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	15	10	0	0	0	1	26
⑫	全体としてこの授業に満足した。	22	4	0	0	0	0	26
		194	93	18	5	1	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	9	8	0	0	0	0	17
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	2	8	5	2	0	0	17
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	13	4	0	0	0	0	17
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	12	5	0	0	0	0	17
⑤	この授業は面白かった。	14	3	0	0	0	0	17
⑥	この授業は有益だった。	11	6	0	0	0	0	17
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	16	1	0	0	0	0	17
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	11	5	1	0	0	0	17
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	7	10	0	0	0	0	17
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	9	8	0	0	0	0	17
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	10	6	0	0	0	1	17
⑫	全体としてこの授業に満足した。	16	1	0	0	0	0	17
		130	65	6	2	0	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	0	1	0	0	0	2
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	0	0	1	0	0	2
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	0	1	0	0	0	2
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	1	0	1	0	0	0	2
⑤	この授業は面白かった。	1	0	1	0	0	0	2
⑥	この授業は有益だった。	1	1	0	0	0	0	2
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	2	0	0	0	0	0	2
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	0	1	0	0	0	2
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	2	0	0	0	0	0	2
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	2	0	0	0	0	0	2
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	1	1	0	0	0	0	2
⑫	全体としてこの授業に満足した。	1	1	0	0	0	0	2
		15	3	5	1	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	1	0	0	0	0	2
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	1	1	0	0	0	2
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	2	0	0	0	0	0	2
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	2	0	0	0	0	0	2
⑤	この授業は面白かった。	2	0	0	0	0	0	2
⑥	この授業は有益だった。	2	0	0	0	0	0	2
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	2	0	0	0	0	0	2
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	2	0	0	0	0	2
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	1	1	0	0	0	0	2
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	1	1	0	0	0	0	2
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	1	1	0	0	0	0	2
⑫	全体としてこの授業に満足した。	2	0	0	0	0	0	2
		16	7	1	0	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部回生不明者・他学部生

設 問	評 価						計 (人数)
	5	4	3	2	1	無回答	
I. あなたの授業への参加度について							
① この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	1	1	2	0	0	5
② この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	0	4	0	1	0	5
II. 授業の内容について							
③ この授業はわかりやすかった。	4	1	0	0	0	0	5
④ 授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	2	3	0	0	0	0	5
⑤ この授業は面白かった。	3	2	0	0	0	0	5
⑥ この授業は有益だった。	3	2	0	0	0	0	5
III. 授業の方法について							
⑦ 声は聞き取りやすかった。	5	0	0	0	0	0	5
⑧ 学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	3	2	0	0	0	0	5
⑨ 自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	2	2	1	0	0	0	5
⑩ 授業に対する教員の熱意を感じた。	4	1	0	0	0	0	5
IV. 総合的な評価							
⑪ シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	3	2	0	0	0	0	5
⑫ 全体としてこの授業に満足した。	3	2	0	0	0	0	5
	33	18	6	2	1	0	

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「ドイツ語学ドイツ文学」)」(平成23年度実施)
履修登録者数 : 79名 アンケート回収数 : 22名

全学年集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	11	9	2	0	0	0	22
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	6	5	7	2	1	1	22
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	11	9	1	1	0	0	22
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	13	7	1	0	0	1	22
⑤	この授業は面白かった。	12	8	2	0	0	0	22
⑥	この授業は有益だった。	11	8	3	0	0	0	22
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	12	6	3	1	0	0	22
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	11	7	3	1	0	0	22
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	10	8	2	2	0	0	22
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	15	6	1	0	0	0	22
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	17	5	0	0	0	0	22
⑫	全体としてこの授業に満足した。	15	5	1	0	1	0	22
		144	83	26	7	2	2	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	7	5	1	0	0	0	13
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	5	1	5	1	1	0	13
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	6	5	1	1	0	0	13
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	7	6	0	0	0	0	13
⑤	この授業は面白かった。	6	6	1	0	0	0	13
⑥	この授業は有益だった。	5	6	2	0	0	0	13
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	5	4	3	1	0	0	13
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	3	6	3	1	0	0	13
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	5	6	0	2	0	0	13
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	8	4	1	0	0	0	13
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	9	4	0	0	0	0	13
⑫	全体としてこの授業に満足した。	9	3	1	0	0	0	13
		75	56	18	6	1	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	2	4	0	0	0	0	6
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	3	1	0	0	1	6
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	4	2	0	0	0	0	6
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	5	1	0	0	0	0	6
⑤	この授業は面白かった。	4	1	1	0	0	0	6
⑥	この授業は有益だった。	5	0	1	0	0	0	6
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	5	1	0	0	0	0	6
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	6	0	0	0	0	0	6
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	4	1	1	0	0	0	6
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	6	0	0	0	0	0	6
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	5	1	0	0	0	0	6
⑫	全体としてこの授業に満足した。	5	1	0	0	0	0	6
		52	15	4	0	0	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	0	1	0	0	0	2
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	0	1	1	0	0	2
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	0	2	0	0	0	0	2
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	0	0	1	0	0	1	2
⑤	この授業は面白かった。	1	1	0	0	0	0	2
⑥	この授業は有益だった。	0	2	0	0	0	0	2
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	1	1	0	0	0	0	2
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	1	0	0	0	0	2
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	1	1	0	0	0	2
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	0	2	0	0	0	0	2
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	2	0	0	0	0	0	2
⑫	全体としてこの授業に満足した。	0	1	0	0	1	0	2
		6	11	4	1	1	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学研究科博士後期課程

設 問	評 価						計 (人数)
	5	4	3	2	1	無回答	
I. あなたの授業への参加度について							
① この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	0	0	0	0	0	1
② この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	1	0	0	0	0	1
II. 授業の内容について							
③ この授業はわかりやすかった。	1	0	0	0	0	0	1
④ 授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	1	0	0	0	0	0	1
⑤ この授業は面白かった。	1	0	0	0	0	0	1
⑥ この授業は有益だった。	1	0	0	0	0	0	1
III. 授業の方法について							
⑦ 声は聞き取りやすかった。	1	0	0	0	0	0	1
⑧ 学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	0	0	0	0	0	1
⑨ 自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	1	0	0	0	0	0	1
⑩ 授業に対する教員の熱意を感じた。	1	0	0	0	0	0	1
IV. 総合的な評価							
⑪ シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	1	0	0	0	0	0	1
⑫ 全体としてこの授業に満足した。	1	0	0	0	0	0	1
	11	1	0	0	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「西南アジア史学」)」(平成23年度実施)
履修登録者数：69名 アンケート回収数：35名

全学年集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	7	19	7	2	0	0	35
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	7	16	5	6	0	35
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	10	16	9	0	0	0	35
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	8	8	18	1	0	0	35
⑤	この授業は面白かった。	11	11	10	3	0	0	35
⑥	この授業は有益だった。	6	21	7	1	0	0	35
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	9	10	10	5	1	0	35
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	4	5	20	6	0	0	35
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	3	5	18	7	1	1	35
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	11	17	7	0	0	0	35
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	11	14	9	1	0	0	35
⑫	全体としてこの授業に満足した。	10	18	4	3	0	0	35
		91	151	135	34	8	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	5	18	5	2	0	0	30
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	6	13	5	5	0	30
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	8	13	9	0	0	0	30
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	7	6	16	1	0	0	30
⑤	この授業は面白かった。	9	11	7	3	0	0	30
⑥	この授業は有益だった。	6	18	5	1	0	0	30
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	8	9	9	4	0	0	30
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	4	4	16	6	0	0	30
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	3	4	15	6	1	1	30
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	8	15	7	0	0	0	30
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	10	13	7	0	0	0	30
⑫	全体としてこの授業に満足した。	9	15	3	3	0	0	30
		78	132	112	31	6	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	2	0	1	0	0	0	3
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	0	2	0	1	0	3
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	2	0	0	0	0	3
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	0	1	2	0	0	0	3
⑤	この授業は面白かった。	1	0	2	0	0	0	3
⑥	この授業は有益だった。	0	2	1	0	0	0	3
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	1	0	1	1	0	0	3
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	1	2	0	0	0	3
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	1	1	1	0	0	3
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	2	1	0	0	0	0	3
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	1	0	2	0	0	0	3
⑫	全体としてこの授業に満足した。	0	3	0	0	0	0	3
		8	11	14	2	1	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	0	1	0	0	0	1
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	0	1	0	0	0	1
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	0	0	0	0	0	1
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	1	0	0	0	0	0	1
⑤	この授業は面白かった。	0	0	1	0	0	0	1
⑥	この授業は有益だった。	0	0	1	0	0	0	1
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	0	0	0	0	1	0	1
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	0	1	0	0	0	1
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	0	1	0	0	0	1
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	0	1	0	0	0	0	1
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	0	0	0	1	0	0	1
⑫	全体としてこの授業に満足した。	0	0	1	0	0	0	1
		2	1	7	1	1	0	

※5が最高、1が最低の評価。

教育学部生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	1	0	0	0	0	1
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	1	0	0	0	0	1
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	0	1	0	0	0	0	1
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	0	1	0	0	0	0	1
⑤	この授業は面白かった。	1	0	0	0	0	0	1
⑥	この授業は有益だった。	0	1	0	0	0	0	1
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	0	1	0	0	0	0	1
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	0	1	0	0	0	1
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	0	1	0	0	0	1
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	1	0	0	0	0	0	1
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	0	1	0	0	0	0	1
⑫	全体としてこの授業に満足した。	1	0	0	0	0	0	1
		3	7	2	0	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「社会学」)」(平成23年度実施)

履修登録者数 : 147名 アンケート回収数 : 73名

全学年集計

設 問		評 価					無回答	計 (人数)
		5	4	3	2	1		
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	21	26	15	6	5	0	73
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	7	14	23	20	8	1	73
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	42	24	7	0	0	0	73
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	33	32	6	2	0	0	73
⑤	この授業は面白かった。	40	25	8	0	0	0	73
⑥	この授業は有益だった。	34	26	13	0	0	0	73
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	57	14	1	1	0	0	73
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	15	21	28	8	1	0	73
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	8	16	37	8	3	1	73
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	24	36	11	2	0	0	73
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	33	26	11	2	0	1	73
⑫	全体としてこの授業に満足した。	36	28	9	0	0	0	73
		350	288	169	49	17	3	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価					無回答	計 (人数)
		5	4	3	2	1		
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	16	15	10	6	4	0	51
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	3	12	16	12	7	1	51
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	29	17	5	0	0	0	51
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	25	20	4	2	0	0	51
⑤	この授業は面白かった。	27	19	5	0	0	0	51
⑥	この授業は有益だった。	25	17	9	0	0	0	51
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	41	9	0	1	0	0	51
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	12	14	18	6	1	0	51
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	6	9	26	7	2	1	51
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	17	25	7	2	0	0	51
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	23	17	9	1	0	1	51
⑫	全体としてこの授業に満足した。	27	17	7	0	0	0	51
		251	191	116	37	14	3	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	4	1	0	1	0	7
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	0	1	4	1	0	7
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	4	2	0	0	0	7
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	2	4	1	0	0	0	7
⑤	この授業は面白かった。	2	2	3	0	0	0	7
⑥	この授業は有益だった。	2	3	2	0	0	0	7
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	4	2	1	0	0	0	7
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	1	4	2	0	0	7
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	2	5	0	0	0	7
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	0	5	2	0	0	0	7
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	3	2	1	1	0	0	7
⑫	全体としてこの授業に満足した。	2	3	2	0	0	0	7
		18	32	25	7	2	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	1	3	1	0	0	0	5
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	0	2	2	0	0	5
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	3	2	0	0	0	0	5
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	1	4	0	0	0	0	5
⑤	この授業は面白かった。	2	3	0	0	0	0	5
⑥	この授業は有益だった。	1	3	1	0	0	0	5
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	3	2	0	0	0	0	5
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	0	2	3	0	0	0	5
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	1	4	0	0	0	5
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	2	2	1	0	0	0	5
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	3	2	0	0	0	0	5
⑫	全体としてこの授業に満足した。	2	3	0	0	0	0	5
		19	27	12	2	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部回生不明者・文学研究科生・他学部生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	3	4	3	0	0	0	10
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	2	2	4	2	0	0	10
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	9	1	0	0	0	0	10
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	5	4	1	0	0	0	10
⑤	この授業は面白かった。	9	1	0	0	0	0	10
⑥	この授業は有益だった。	6	3	1	0	0	0	10
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	9	1	0	0	0	0	10
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	3	4	3	0	0	0	10
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	2	4	2	1	1	0	10
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	5	4	1	0	0	0	10
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	4	5	1	0	0	0	10
⑫	全体としてこの授業に満足した。	5	5	0	0	0	0	10
		62	38	16	3	1	0	

※5が最高、1が最低の評価。

京都大学文学部「学生による授業評価(系共通科目「情報・史料学」)」(平成23年度実施)
履修登録者数 : 54名 アンケート回収数 : 22名

全学年集計

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	5	9	8	0	0	0	22
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	3	3	9	6	1	0	22
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	6	6	8	2	0	0	22
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	7	5	6	3	1	0	22
⑤	この授業は面白かった。	8	10	2	2	0	0	22
⑥	この授業は有益だった。	9	8	3	2	0	0	22
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	12	3	6	1	0	0	22
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	11	8	2	0	1	0	22
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	7	4	8	3	0	0	22
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	11	7	4	0	0	0	22
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	8	3	6	1	1	3	22
⑫	全体としてこの授業に満足した。	8	10	1	2	0	1	22
		95	76	63	22	4	4	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部2回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	3	5	7	0	0	0	15
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	1	1	6	6	1	0	15
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	5	7	2	0	0	15
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	3	4	4	3	1	0	15
⑤	この授業は面白かった。	3	8	2	2	0	0	15
⑥	この授業は有益だった。	3	7	3	2	0	0	15
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	7	3	4	1	0	0	15
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	6	6	2	0	1	0	15
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	3	3	7	2	0	0	15
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	7	4	4	0	0	0	15
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	6	2	5	0	1	1	15
⑫	全体としてこの授業に満足した。	4	8	1	2	0	0	15
		47	56	52	20	4	1	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部3回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	2	1	1	0	0	0	4
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	2	1	1	0	0	0	4
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	3	1	0	0	0	0	4
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	3	0	1	0	0	0	4
⑤	この授業は面白かった。	3	1	0	0	0	0	4
⑥	この授業は有益だった。	4	0	0	0	0	0	4
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	3	0	1	0	0	0	4
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	3	1	0	0	0	0	4
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	3	0	0	1	0	0	4
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	3	1	0	0	0	0	4
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	2	0	1	0	0	1	4
⑫	全体としてこの授業に満足した。	3	0	0	0	0	1	4
		34	6	5	1	0	2	

※5が最高、1が最低の評価。

文学部4回生

設 問		評 価						計 (人数)
		5	4	3	2	1	無回答	
I.	あなたの授業への参加度について							
①	この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	2	0	0	0	0	2
②	この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	1	1	0	0	0	2
II.	授業の内容について							
③	この授業はわかりやすかった。	1	0	1	0	0	0	2
④	授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	0	1	1	0	0	0	2
⑤	この授業は面白かった。	1	1	0	0	0	0	2
⑥	この授業は有益だった。	1	1	0	0	0	0	2
III.	授業の方法について							
⑦	声は聞き取りやすかった。	1	0	1	0	0	0	2
⑧	学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	1	0	0	0	0	2
⑨	自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	0	1	1	0	0	0	2
⑩	授業に対する教員の熱意を感じた。	0	2	0	0	0	0	2
IV.	総合的な評価							
⑪	シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	0	1	0	1	0	0	2
⑫	全体としてこの授業に満足した。	0	2	0	0	0	0	2
		5	13	5	1	0	0	

※5が最高、1が最低の評価。

学部・回生不明

設 問	評 価						計 (人数)
	5	4	3	2	1	無回答	
I. あなたの授業への参加度について							
① この授業にはほとんど出席した。(100%←→20%)	0	1	0	0	0	0	1
② この授業には積極的に参加し、自主的に学習した。	0	0	1	0	0	0	1
II. 授業の内容について							
③ この授業はわかりやすかった。	1	0	0	0	0	0	1
④ 授業内容は体系的であり、全体によくまとまっていた。	1	0	0	0	0	0	1
⑤ この授業は面白かった。	1	0	0	0	0	0	1
⑥ この授業は有益だった。	1	0	0	0	0	0	1
III. 授業の方法について							
⑦ 声は聞き取りやすかった。	1	0	0	0	0	0	1
⑧ 学生の理解度や反応に配慮して授業が進められた。	1	0	0	0	0	0	1
⑨ 自主的な学習を促すための工夫や助言があった。	1	0	0	0	0	0	1
⑩ 授業に対する教員の熱意を感じた。	1	0	0	0	0	0	1
IV. 総合的な評価							
⑪ シラバスの内容と授業内容はよく合致していた。	0	0	0	0	0	1	1
⑫ 全体としてこの授業に満足した。	1	0	0	0	0	0	1
	9	1	1	0	0	1	

※5が最高、1が最低の評価。

2. 大学院生による授業評価アンケート

アンケート用紙

京都大学大学院文学研究科「学生による授業評価」(大学院演習)

このアンケートは、文学研究科の授業について、院生の皆さんからの意見を聴き、授業・教育環境の改善に役立てようとするためのものです。なお1から4の回答にあたっては該当する項目に○印を付してください。5については率直な意見をお書きください。

あなたの専修 ()
授業科目名 ()
担当教員名 ()
あなたの学年 (修士 年次) (博士 年次)

1. この授業はどのような形式でしたか。

- a. 学生が選んだ研究テーマについてディスカッションする形式
- b. 特定の文献・テキストについて、学生が発表することを中心にする形式
- c. 教員の講義を中心とする形式
- d. その他 ()

2. あなたはこの授業にどれぐらい出席しましたか。

- a. 80～100%出席した。
- b. 60～79%出席した。
- c. 40～59%出席した。
- d. 20～39%出席した。
- e. 0～19%出席した。

3. この授業が問題発見能力の向上に役立ちましたか？

- a. 大いに役立った。
- b. ある程度役立った。
- c. どちらともいえない。
- d. あまり役立たなかった。
- e. ほとんど役立たなかった。

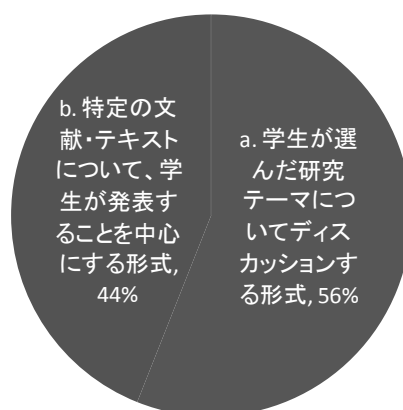
4. この授業が問題解決能力の向上に役立ちましたか？

- a. 大いに役立った。
- b. ある程度役立った。
- c. どちらともいえない。
- d. あまり役立たなかった。
- e. ほとんど役立たなかった。

5. この授業についての感想、授業の内容・方法などについて希望、改善してほしい点、授業環境についての要望などを自由に書いてください。

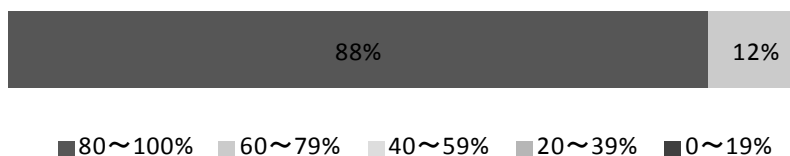
分析と結果 回答者 16 名

1. この授業はどのような形式でしたか。



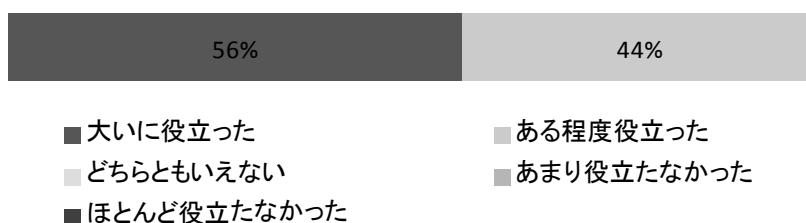
評価の対象となる授業はすべて、発表やディスカッションを中心とした、学生の積極的な参加を求められる形式の授業である。

2. あなたはこの授業にどれぐらい出席しましたか。



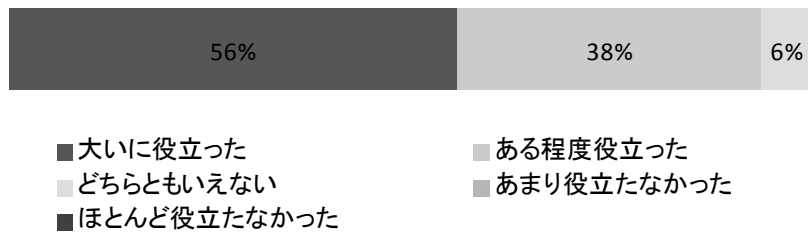
8割以上出席したという回答が88%を占めており、出席状況は良好といえる。

3. この授業が問題発見能力の向上に役立ちましたか？



程度の差はあるが、全員が授業を通して自分で問題を発見する力が向上したと考えており、授業の成果に高い評価が与えられている。

4. この授業が問題解決能力の向上に役立ちましたか？



程度の差はあるが、大多数が授業を通して自分で問題を解決する力が向上したと考えており、授業の成果に高い評価が与えられている。

大学院授業評価アンケート（平成 23 年度実施）

1. この授業はどのような形式でしたか。	回答数	比率
a. 学生が選んだ研究テーマについてディスカッションする形式	9	56%
b. 特定の文献・テキストについて、学生が発表することを中心とする形式	7	44%
c. 教員の講義を中心とする形式	0	0%
d. その他	0	0%
2. あなたはこの授業にどれぐらい出席しましたか。	回答数	比率
a. 80～100%出席した。	14	88%
b. 60～79%出席した。	2	12%
c. 40～59%出席した。	0	0%
d. 20～39%出席した。	0	0%
e. 0～19%出席した。	0	0%
3. この授業が問題発見能力の向上に役立ちましたか？	回答数	比率
a. 大いに役立った。	9	56%
b. ある程度役立った。	7	44%
c. どちらともいえない。	0	0%
d. あまり役立たなかった。	0	0%
e. ほとんど役立たなかった。	0	0%
4. この授業が問題解決能力の向上に役立ちましたか？	回答数	比率
a. 大いに役立った。	9	56%
b. ある程度役立った。	6	38%
c. どちらともいえない。	1	6%
d. あまり役立たなかった。	0	0%
e. ほとんど役立たなかった。	0	0%

3. 文学部卒業生アンケート

京都大学文学部 卒業生アンケート

ご卒業おめでとうございます。京都大学文学部の研究教育環境をより良くしていくためのアンケートにご協力をお願いいたします。該当する項目に丸を付けてください。それが「その他」であった場合には、内容を簡潔に説明してください。

1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？

- a. はい
- b. いいえ

2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？

- a. 入学以前にすでに決めていた。
- b. 入学直後に決めた。
- c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。
- d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。
- e. その他 ()

3. 志望動機のなかで重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）

- a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。
- b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が入った。
- c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。
- d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。
- e. その他 ()

4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？

- a. ほぼ予想したとおりだった。
- b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。
- c. 予想とは異なっており、少々失望した。
- d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。
- e. その他 ()

5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？

- a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。
- b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。
- c. そうした機会はもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。
- d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。
- e. その他 ()

6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？

- a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。
- b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。
- c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。
- d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。
- e. その他 ()

7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？

- a. 十分に満足している。
- b. それなりに満足している。
- c. どちらとも言えない。
- d. 後悔している。
- e. その他 ()

8. 4月以降の進路についてお聞きします。

- a. 大学院進学（他大学も含む）
- b. 一般企業に就職
- c. 官庁、地方自治体等に就職
- d. 教員、司書等の専門職に就職
- e. その他 ()

9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）

- a. 専門的知識
- b. 専門分野の研究能力
- c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力
- d. 一般的な教養
- e. 国際感覚
- f. 外国語の能力
- g. リーダーシップ
- h. 社会的常識
- i. その他 ()

10. お差し支えなければ、あなたが属していた系をお教えてください。

哲学基礎文化学、東洋文化学、西洋文化学、歴史基礎文化学、行動・環境文化学、基礎現代文化学

11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。[京都大学文学部]

2012/3/27 実施

京都大学文学部 卒業生アンケート・集計と総括

今年度の卒業生アンケートについて、総括的な結果の特徴と分析とを報告します。

総括的な報告は過去の調査と比較して今年度どのような特徴が見られるかについての指摘です。分析はそのような特徴の背景的理由等にかんする考察です。

アンケートの実際の結果の一覧は、この考察の後に付してあります。結果一覧は前半が全系を集計した結果であり、後半は各系（哲学基礎文化学系、東洋文化学系、西洋文化学系、歴史基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系）別の集計結果です。

A アンケート結果の概括的特徴

このアンケートを一昨年度（21年度）と昨年度（23年度）と比較したときに顕著に見られる特徴として次のような点が指摘できる。

1) アンケートへの回答者は一昨年が183人、昨年が161人、今年度が同じく161人で、一昨年よりは多少減少しているが、全体として8割近くの卒業生が回答を寄せており、文学部の自己点検・評価の作業への学生の協力的な姿勢に変わりがないことが伺われる。

2) 各設問についての回答の内容も、三年間でほとんど変わらない設問が多い。例えば、**設問1**（オープンキャンパスへの参加）、**2**（志望専修決定の時期）、**4**（専修進学後の感想）、**6**（「自由の学風」についての感想）、**8**（卒業後の進路）での回答の割合は、ほとんど同一の分布を示している。

3) 他方、次の設問については三年間で以下のような評価の推移が見られる。

設問3（志望動機において大きな位置を占める要因）

一昨年に比べ、昨年、今年とも専修の学習内容への興味が大きな意味を占めるようになっている。

設問5（分属決定前の時点での専修に関する知識の必要性）

一昨年に比べ、昨年、今年とも、専修分属前の知識の必要性を求める者の割合が増えている。

設問7（文学部での学習への満足度）

三年間を通じて、「十分に満足＋それなりに満足」の割合はほぼ同じである。しかし、「十分に満足」の割合については、一昨年、昨年よりも今年度の割合が大きく増加している。

4) 最後に、系別でのアンケート結果を比較してみても、系によって回答の割合に大きな差異がないことが認められる。この傾向も三年間を通じてほとんど変わりが無い。特に、文学部教育にかんする「満足度」を問う設問7や、学習の経験が卒業後にどのように役立つと考えるかを問う設問9について、系によるばらつきがほとんどないことは大きな特徴である。

B 分析的考察

1) 三年間のアンケート結果が「総合的にほぼ変化なし」という結果が得られたことは、文学部における教育の質、学生の志向、勉学の姿勢などに関して大きな変化がなく、教育における以前と同様の高い水準が維持されていることを示している。このことは文学部全体について言えるだけでなく、系による差異があまりないという点からも、傍証されることであると思われる。

2) 一方、設問3、5、7への回答結果を見ると、学生の側での興味や関心が、各専修における専門的内容を中心にして捉えられる傾向が、この三年間でも徐々に強くなっていることが伺われる。

3) また、文学部での学習への満足度が増大傾向にあることは、文学部の現在の教育への取り組みが学生の志向する方向と合致していることを示している。

4) この増大傾向が、これまでの教育に対する自己点検や評価への参照、あるいはFD教育などを通じた啓発などに由来するものであるかどうかは、この短期間の傾向だけからは判断できない。しかし、全体として今回の調査によれば、総体的な傾向は一定であるとしても、教育への満足度が増大しているというポジティブな面が浮き彫りになっていることは確かであり、この歓迎すべき

傾向を引き続き維持するためにも、教育の現場にたいする一層の注意深い反省、考察が求められるところであろう。

C アンケートの結果一覧

(全系)

提出者 161名

※無回答を除き算出(設問 10 を除く)

設 問 ・ 記述回答 人 %※

1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？

a. はい	70	43.5%
b. いいえ	91	56.5%
無回答	0	161人中

2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？

a. 入学以前にすでに決めていた。	46	28.6%
b. 入学直後に決めた。	8	5.0%
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	22	13.7%
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	71	44.1%
e. その他	14	8.7%

- ・ 2回生の春頃
- ・ なりゆきで
- ・ 2回生時の授業等を聞きながら
- ・ 1回生の時にいろいろな授業を受ける中で決めた。
- ・ 2回生の授業に参加して決めた。
- ・ 直前
- ・ 転学
- ・ 2回生の時に専門の授業を受けて決めた。

- ・研究室の説明を聞いて
- ・ガイダンスには参加せず。
- ・3回生になったとき
- ・学内活動で知り合った先輩方が、将来の自分の専修だった。
- ・かん

無回答 0 161人中

3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか? (複数回答可)

- a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。

148 91.9%

- b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が入った。

27 16.8%

- c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。

1 0.6%

- d. 卒業のための単位認定が比較的安かかつ確実に得られそうだった。

3 1.9%

- e. その他

2 1.2%

- ・とくになし

- ・かん

無回答 0 181 回答中

4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか?

- a. ほぼ予想したとおりだった。 86 53.8%

- b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。

63 39.4%

- c. 予想とは異なっており、少々失望した。

9 5.6%

- d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。

1 0.6%

- e. その他

1 0.6%

- ・つまらなかった

無回答 1 161人中

5. 分属決定前、2回生ままでに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか?

a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。 36 22.4%

b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。 51 31.7%

c. そうした機会はもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ 56 34.8%

d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。 9 5.6%

e. その他 9 5.6%

・あってもいいと思う

・2回からでも専修授業をどんどんとれるようにしたらいいと思う。

・どっちみち授業がつまらないのなら同じ

・どんな分野でも、とりあえずは自分で腰をすえて勉強しないとわからないから、別になくてもかまわない。

無回答 1 162人中

6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか?

a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。

36 23.5%

b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。

64 41.8%

c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。

36 23.5%

d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。

13 8.5%

e. その他 4 2.6%

・ 自学自習をしやすい環境は整っているが、自学自習は文字通り自らすすんでやるものであり、授業を通して「養われる」ものではないように感じる。わざわざ植え付けるのではなく、やるもやらないも個々の自由。

・ 私には無理でした。

無回答 8 161人中

7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？

a. 十分に満足している。 50 32.7%

b. それなりに満足している。 84 54.9%

c. どちらとも言えない。 15 9.8%

d. 後悔している。 4 2.6%

e. その他 0 0.0%

無回答 8 161人中

8. 4月以降の進路についてお聞きします。

a. 大学院進学（他大学も含む） 46 30.3%

b. 一般企業に就職 75 49.3%

c. 官庁、地方自治体等に就職 11 7.2%

d. 教員、司書等の専門職に就職 6 3.9%

e. その他 14 9.2%

・ 金光教教師になるために、金光教学院で11か月修行

・ 聴講生（4名）

・ フリーター（2名）

・ 自学自習

・ 科目等履修生

・ ドイツ留学

無回答 9 161人中

9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）

a. 専門的知識 78 51.3%

b. 専門分野の研究能力	44	28.9%
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	67	44.1%
d. 一般的な教養	90	59.2%
e. 国際感覚	11	7.2%
f. 外国語の能力	29	19.1%
g. リーダーシップ	3	2.0%
h. 社会的常識	12	7.9%
i. その他	1	0.7%
・特になし		
無回答	9	344 回答中

10. お差し支えなければ、あなたが属していた系をお教えてください。

哲学基礎文化学	20	12.4%
東洋文化学	24	14.9%
西洋文化学	11	6.8%
歴史基礎文化学	29	18.0%
行動・環境文化学	45	28.0%
基礎現代文化学	17	10.6%
無回答	15	9.3% 161 人中

11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。

- ・教務の人は、優しさを思い出してほしい。
- ・特になし
- ・お世話になりました。
- ・教務の刷新、院試時期の変更
- ・教務掛の対応をもっと柔軟に。眼鏡の御方は優しく対応していただきました。
- ・教務のあいている時間を長くしてほしい
- ・ありがとうございました。
- ・教務の対応がもっと親切であればよかったですと思います。

- ・多くの専門的な知識を身に付けることができ、とても有意義な大学生活だったと思います。
- ・他の学部に比して、授業等は自由だとは思いますが、結局話のネタになったのは、自分で興味を持って調べたことが多い。

京都大学文学部 卒業生アンケート

(全系) 提出者 161名

※無回答を除き算出(設問10を除く)

設 問 ・ 記述回答	人	% [※]
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？		
a. はい	70	43.5%
b. いいえ	91	56.5%
無回答	0	
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？		
a. 入学以前にすでに決めていた。	46	28.6%
b. 入学直後に決めた。	8	5.0%
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	22	13.7%
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	71	44.1%
e. その他	14	8.7%
・ 2回生の春頃		
・ なりゆきで		
・ 2回生時の授業等を聞きながら		
・ 1回生の時にいろいろな授業を受ける中で決めた。		
・ 2回生の授業に参加して決めた。		
・ 直前		
・ 転学		
・ 2回生の時に専門の授業を受けて決めた。		
・ 研究室の説明を聞いて		
・ ガイダンスには参加せず。		
・ 3回生になったとき		
・ 学内活動で知り合った先輩方が、将来の自分の専修だった。		
・ かん		
無回答	0	
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？(複数回答可)		
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	148	91.9%
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が気に入った。	27	16.8%
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	1	0.6%
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	3	1.9%
e. その他	2	1.2%
・ とくになし		
・ かん		
無回答	0	
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？		
a. ほぼ予想したとおりだった。	86	53.8%
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	63	39.4%
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	9	5.6%
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	1	0.6%
e. その他	1	0.6%
・ つまらなかった		
無回答	1	

設 問 ・ 記述回答	人	%※
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？		
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	36	22.4%
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	51	31.7%
c. そうした機会はずっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	56	34.8%
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	9	5.6%
e. その他	9	5.6%
・ あってもいいと思う		
・ 2回からでも専修授業をどんどんとれるようにしたらいいと思う。		
・ どちらみち授業がつまらないのなら同じ		
・ どんな分野でも、とりあえずは自分で腰をすえて勉強しないとわからないから、別になくてもかまわない。		
無回答	1	
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？		
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	36	23.5%
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	64	41.8%
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	36	23.5%
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	13	8.5%
e. その他	4	2.6%
・ 自学自習をしやすい環境は整っているが、自学自習は文字通り自らすすんでやるものであり、授業を通して「養われる」ものではないように感じる。わざわざ植え付けるのではなく、やるもやらないも個々の自由。		
・ 私には無理でした。		
無回答	8	
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？		
a. 十分に満足している。	50	32.7%
b. それなりに満足している。	84	54.9%
c. どちらとも言えない。	15	9.8%
d. 後悔している。	4	2.6%
e. その他	0	0.0%
無回答	8	
8. 4月以降の進路についてお聞きします。		
a. 大学院進学（他大学も含む）	46	30.3%
b. 一般企業に就職	75	49.3%
c. 官庁、地方自治体等に就職	11	7.2%
d. 教員、司書等の専門職に就職	6	3.9%
e. その他	14	9.2%
・ 金光教教師になるために、金光教学院で11か月修行		
・ 聴講生（4名）		
・ フリーター（2名）		
・ 自学自習		
・ 科目等履修生		
・ ドイツ留学		
無回答	9	

設 問 ・ 記述回答	人	% [※]
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？(複数回答可)		
a. 専門的知識	78	51.3%
b. 専門分野の研究能力	44	28.9%
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	67	44.1%
d. 一般的な教養	90	59.2%
e. 国際感覚	11	7.2%
f. 外国語の能力	29	19.1%
g. リーダーシップ	3	2.0%
h. 社会的常識	12	7.9%
i. その他	1	0.7%
・特になし		
無回答	9	
10. お差し支えなければ、あなたが属していた系をお教えてください。		
哲学基礎文化学	20	12.4%
東洋文化学	24	14.9%
西洋文化学	11	6.8%
歴史基礎文化学	29	18.0%
行動・環境文化学	45	28.0%
基礎現代文化学	17	10.6%
無回答	15	9.3%
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。		
・教務の人は、優しさを思い出してほしい。		
・特になし		
・お世話になりました。		
・教務の刷新、院試時期の変更		
・教務掛の対応をもっと柔軟に。眼鏡の御方は優しく対応していただきました。		
・教務のあいている時間を長くしてほしい		
・ありがとうございました。		
・教務の対応がもっと親切であればよかったですと思います。		
・多くの専門的な知識を身に付けることができ、とても有意義な大学生活だったと思います。		
・他の学部に比して、授業等は自由だとは思いますが、結局話のネタになったのは、自分で興味を持って調べたことが多い。		

京都大学文学部 卒業生アンケート

(哲学)
提出者 20名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	7
b. いいえ	13
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	6
b. 入学直後に決めた。	1
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	2
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	8
e. その他 ・ 2回生の春頃 ・ なりゆきで ・ 2回生時の授業等を聞きながら	3
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？(複数回答可)	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	18
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が気に入った。	4
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	1
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	0
e. その他 ・ とくになし	1
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりであった。	8
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	10
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	1
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他 ・ つまらなかった	1
無回答	0
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	3
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	7
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	7
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	1
e. その他 ・ あってもいいと思う ・ 2回からでも専修授業をどんどんとれるようにしたらいいと思う。 ・ どっちみち授業がつまらないのなら同じ	3
無回答	0

6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	3
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	7
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	7
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	3
e. その他	0
無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	7
b. それなりに満足している。	11
c. どちらとも言えない。	2
d. 後悔している。	0
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	6
b. 一般企業に就職	10
c. 官庁、地方自治体等に就職	0
d. 教員、司書等の専門職に就職	1
e. その他	3
・金光教師になるために、金光教学院で11か月修行 ・聴講生	
無回答	0
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	11
b. 専門分野の研究能力	7
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	10
d. 一般的な教養	10
e. 国際感覚	0
f. 外国語の能力	2
g. リーダーシップ	0
h. 社会的常識	2
i. その他	0
無回答	0
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。 ・教務の人は、優しさを思い出してほしい。 ・特になし	

京都大学文学部 卒業生アンケート

(東洋)
提出者 24名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	9
b. いいえ	15
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	11
b. 入学直後に決めた。	0
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	4
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	7
e. その他 ・ 1回生の時にいろいろな授業を受ける中で決めた。 ・ 2回生の授業に参加して決めた。	2
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	21
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が入った。	5
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	1
e. その他	0
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	10
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	12
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	2
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他	0
無回答	0
5. 分属決定前、2回生まだに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	8
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	8
c. そうした機会はもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	6
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	1
e. その他	1
無回答	0
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	5
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	11
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	4
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	3

e. その他 ・ 自学自習をしやすい環境は整っているが、自学自習は文字通り自らすすんでやるものであり、授業を通して「養われる」ものではないように感じる。わざわざ植え付けるのではなく、やるもやらないも個々の自由。	1
無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	9
b. それなりに満足している。	11
c. どちらとも言えない。	2
d. 後悔している。	2
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	9
b. 一般企業に就職	7
c. 官庁、地方自治体等に就職	2
d. 教員、司書等の専門職に就職	3
e. その他 ・ 聴講生	2
無回答	1
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	18
b. 専門分野の研究能力	8
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	7
d. 一般的な教養	10
e. 国際感覚	1
f. 外国語の能力	4
g. リーダーシップ	0
h. 社会的常識	1
i. その他 ・ 特になし	1
無回答	0
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	

京都大学文学部 卒業生アンケート

 (西洋)
 提出者 11名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	5
b. いいえ	6
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	3
b. 入学直後に決めた。	2
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	0
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	3
e. その他	3
・直前	
・転学	
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？(複数回答可)	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	10
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が気に入った。	3
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	0
e. その他	0
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	6
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	5
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	0
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他	0
無回答	0
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	3
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	4
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	1
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	0
e. その他	2
無回答	1
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	5
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	4
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	2
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	0

e. その他	0
無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	8
b. それなりに満足している。	3
c. どちらとも言えない。	0
d. 後悔している。	0
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	6
b. 一般企業に就職	2
c. 官庁、地方自治体等に就職	1
d. 教員、司書等の専門職に就職	1
e. その他 ・フリーター	1
無回答	0
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	6
b. 専門分野の研究能力	2
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	4
d. 一般的な教養	4
e. 国際感覚	2
f. 外国語の能力	7
g. リーダーシップ	0
h. 社会的常識	0
i. その他	0
無回答	0
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	

京都大学文学部 卒業生アンケート

(歴史)
提出者 29名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	17
b. いいえ	12
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	12
b. 入学直後に決めた。	2
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	3
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	10
e. その他 ・ 2回生の時に専門の授業を受けて決めた。 ・ 研究室の説明を聞いて	2
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	28
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が気に入った。	4
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	0
e. その他	0
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	16
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	12
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	1
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他	0
無回答	0
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	6
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	8
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	13
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	1
e. その他 ・ 機会は充分だが、もう少し周知を図って欲しい。	1
無回答	0
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	10
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	9
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	8

d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	2
e. その他	0
無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	8
b. それなりに満足している。	18
c. どちらとも言えない。	2
d. 後悔している。	1
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きます。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	11
b. 一般企業に就職	13
c. 官庁、地方自治体等に就職	1
d. 教員、司書等の専門職に就職	0
e. その他	4
・学部の聴講生	
・聴講生	
・自学自習	
・科目等履修生	
無回答	0
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	16
b. 専門分野の研究能力	12
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	15
d. 一般的な教養	18
e. 国際感覚	2
f. 外国語の能力	3
g. リーダーシップ	0
h. 社会的常識	2
i. その他	0
無回答	0
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	
・お世話になりました。	
・教務の刷新、院試時期の変更	
・教務掛の対応をもっと柔軟に。眼鏡の御方は優しく対応していただきました。	
・教務のあいている時間を長くして欲しい	

京都大学文学部 卒業生アンケート

(行動)
提出者 50名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	21
b. いいえ	24
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	9
b. 入学直後に決めた。	3
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	8
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	23
e. その他 ・ガイダンスには参加せず。 ・3回生になったとき	2
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？(複数回答可)	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	43
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が気に入った。	7
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	0
e. その他	0
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	28
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	13
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	3
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他	0
無回答	1
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	12
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	13
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	16
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	3
e. その他	1
無回答	0
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	8
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	27
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	8
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	1

e. その他 ・私には無理でした。	1
無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	11
b. それなりに満足している。	26
c. どちらとも言えない。	7
d. 後悔している。	1
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	10
b. 一般企業に就職	26
c. 官庁、地方自治体等に就職	6
d. 教員、司書等の専門職に就職	1
e. その他	2
無回答	0
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	18
b. 専門分野の研究能力	10
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	17
d. 一般的な教養	32
e. 国際感覚	0
f. 外国語の能力	5
g. リーダーシップ	2
h. 社会的常識	3
i. その他	0
無回答	1
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。 ・ありがとうございました。 ・教務の対応がもっと親切であればよかったですと思います。 ・多くの専門的な知識を身に付けることができ、とても有意義な大学生活だったと思います。	

京都大学文学部 卒業生アンケート

(現代)
提出者 17名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	6
b. いいえ	11
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	1
b. 入学直後に決めた。	0
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	4
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	11
e. その他 ・学内活動で知り合った先輩方が、将来の自分の専修だった。	1
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	14
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が入った。	2
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	2
e. その他	0
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	8
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	7
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	1
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	1
e. その他	0
無回答	0
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	2
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	5
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	9
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	1
e. その他	0
無回答	0
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	3
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	4
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	6
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	4
e. その他	0

無回答	0
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	3
b. それなりに満足している。	13
c. どちらとも言えない。	1
d. 後悔している。	0
e. その他	0
無回答	0
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	2
b. 一般企業に就職	15
c. 官庁、地方自治体等に就職	0
d. 教員、司書等の専門職に就職	0
e. その他	0
無回答	0
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	4
b. 専門分野の研究能力	2
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	10
d. 一般的な教養	12
e. 国際感覚	3
f. 外国語の能力	5
g. リーダーシップ	0
h. 社会的常識	4
i. その他	0
無回答	0
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	

京都大学文学部 卒業生アンケート

(所属無記入)

提出者 15名

設 問・記述回答	人
1. あなたは入学前に京都大学オープンキャンパスに参加しましたか？	
a. はい	5
b. いいえ	10
無回答	0
2. あなたが自分の所属する専修への志望を決定したのはいつ頃でしたか？	
a. 入学以前にすでに決めていた。	4
b. 入学直後に決めた。	0
c. 1回生の分属ガイダンスに参加した際に系の選択と同時に決めた。	1
d. 2回生の分属ガイダンスに参加してから決めた。	9
e. その他 ・かん	1
無回答	0
3. 志望動機の中で重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）	
a. その専修で行われている研究の分野に興味があった。	14
b. 教員や先輩たちの人柄、研究室の雰囲気が入った。	2
c. 同級生の友人と同じ専修にしたかった。	0
d. 卒業のための単位認定が比較的安かつ確実に得られそうだった。	0
e. その他 ・かん	1
無回答	0
4. 実際に専修に進学してみてどうでしたか？	
a. ほぼ予想したとおりだった。	10
b. 予想とはかなり違う面があったが、それでも十分に満足だった。	4
c. 予想とは異なっており、少々失望した。	1
d. 予想とは大きく異なっており、専修変更も考えた。	0
e. その他	0
無回答	0
5. 分属決定前、2回生までに専修の様子を知る機会がもっとある方が良かったと思いますか？	
a. 自分の志望専修が当初からはっきりしていたので、その必要はまったく感じなかった。	2
b. 当初は戸惑いもあったが、分属ガイダンス等が催されており、これで充分だった。	6
c. そうした機会がもっと多くても良いと思う。情報不足からある程度悩んだ。	4
d. 強くそう思う。7月と9月の1回生向けガイダンス等のような機会を増やして欲しい。	2
e. その他 ・どんな分野でも、とりあえずは自分で腰をすえて勉強しないとわからないから、別になくてもかまわない。	1
無回答	0
6. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としています。これに関連して、あなたは文学部での授業について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	2
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	2

c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	1
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	0
e. その他	2
無回答	8
7. あなたは文学部で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	4
b. それなりに満足している。	2
c. どちらとも言えない。	1
d. 後悔している。	0
e. その他	0
無回答	8
8. 4月以降の進路についてお聞きします。	
a. 大学院進学（他大学も含む）	2
b. 一般企業に就職	2
c. 官庁、地方自治体等に就職	1
d. 教員、司書等の専門職に就職	0
e. その他 ・フリーター ・ドイツ留学	2
無回答	8
9. 文学部で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？（複数回答可）	
a. 専門的知識	5
b. 専門分野の研究能力	3
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	4
d. 一般的な教養	4
e. 国際感覚	3
f. 外国語の能力	3
g. リーダーシップ	1
h. 社会的常識	0
i. その他	0
無回答	8
11. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。 ・他の学部に比して、授業等は自由だとは思いますが、結局話のネタになったのは、自分で興味を持って調べたことが多い。	

4. 文学研究科修士課程修了者アンケート

京都大学文学研究科修士課程修了者アンケート・集計と総括

平成24年3月26日実施分

((アンケートの概観と分析))

ここでは、一昨年度の修士修了者アンケートとの比較を通じて見られる今回のアンケート結果の特徴を概観し、その背景的な傾向について分析する。アンケートの具体的な集計結果はこの概観と分析の後に付してある。

A) アンケートの概観

1) 一昨年度実施のアンケートには76人が回答を寄せたが今回は60人であった。

2) アンケートの回答を総括的に概観する限り、この二年間の間に、終了生の研究経験への意識に大きな変化があったことは認められない。各設問ごとにさまざまな増減はあるが、きわめて目立った相違や際立った増加、減少が見られるわけではないので、修士課程修了者の評価はほぼ安定していると言える。

3) しかし、個々の設問においては、多少とも興味深い変化が認められる。
設問1 (出身校) = 一昨年に比して、京都大学文学部からの入学者の割合が増えていると同時に、日本以外の大学からの入学者も増えている。

設問2 (大学院進学決定の時期) = 学部から大学院への進学の決定は、一昨年度では3回生分属の後が大多数を占める。これにたいして、今年度も3回生分属後の数は多いが、同時に、学部進学直後の者もあり、反対に4回生になってからも少なくなく、全体として決定時期がまちまちである傾向が強まっている。

設問3 (大学院進学動機) = 進学の動機にかんしては二年間でほとんど変化がない。どちらの調査でも、「専攻している分野についてさらに深く学ぶこと」を動機にしている者がもっとも多い。

設問4 (「自由の学風」をめぐる理解や評価) = どちらのアンケートでも、「自由の学風」ということで「自学自習の能力の養成」を意味すると理解している者が大半である。ただし、この能力の養成が十分に行われていると考える者の割合は、二年前よりも今年のほうが非常に多くなっている。

設問5（修士課程での勉学・教育についての満足度）＝二年間でほとんど評価に変わりはない。4割近くの者が「十分に満足」、5割の者が「それなりに満足」と答えている。

設問6（終了後の進路）＝二年間でほとんど意見に変わりはない。5割が「博士課程進学」、2割が「一般企業に就職」、1割が「官庁・自治体」と「教育職」にそれぞれ就職している。

設問7（勉学経験は何に役立つか）＝二年前には「専門的知識・能力」と答える者が非常に大きな割合を占めた。この傾向は今年度もあまり変わらないが、それ以上に「自分で問題を発見し、解決する能力」と答えている者が多いことが目立っている。

B) 分析

1) アンケート回答数の減少は必ずしも歓迎すべきことではない。とはいえ、これには修士課程の修了者の数の減少も影響しているので、必ずしもアンケートへの消極的な態度が反映されているとは考えられない。いずれにしても今後ともこの種の調査への積極的な取り組みは継続されうべきであろう。

2) アンケート回答を全体として概観したとき、評価の傾向が二年前とほとんど変わっていない点は、文学研究科の教育・研究のレベルや、大学院生の求めるもの、勉学において志向する方向に変化がないことを示しているであろう。

3) 大学院進学の実定の時期がかつてよりもまちまちになりつつある傾向があることには、いろいろな要因があるように思われる。たとえば、進路実定のたために学生が接する情報がますます増えていることが、実定過程を複雑にしている可能性もある。また、社会全体の経済的状況の変化が大きく関係していると思われる。さらに、人文学研究の意義に対する考え方にも多様化が生じていると見ることもできる。これらの要因については、今後とも文学研究科全体で考察や評価が必要となるところである。

4) 「自由の学風」に対する高い評価と、大学院での教育・研究の意義についての「自主的な判断能力の強化」に対する重視から見ると、大学院生の求める研究の方向において、独創性、自主性への要求の増大ということが認められるよ

うである。この点をどのように支援し発展させられるかという点に、文学研究科の今後の活動の焦点の一つがあると考えられることもできる。

5) 以上のように、今回のアンケートを通じて、幾つかの評価の焦点に光が当てられるようになったことは、少なくない意義をもつものと思われる。いずれにしても、今後ともこのようなアンケート集計を継続し、学生の意識の変化を追跡調査していくことで、組織としての文学研究科の自己点検や評価の基礎資料を蓄積していくことがきわめて重要であろう。

((アンケート集計結果))

1. あなたの出身大学・学部等についてお聞きします。

a. 京都大学以外の日本国内の大学	11 人	17%
b. 京都大学の他学部、研究科等	3	4%
c. 京都大学文学部	38	60%
d. 日本以外の大学	11	17%
e. その他		

2. あなたが大学院へ進むことを決めたのはいつ頃でしたか？

a. 学部入学後	14	22%
b. 系分属後（2回生のとき）	2	3%
c. 専修分属後（3回生のとき）	20	31%
d. 4回生になってから	18	28%
e. 大学卒業後、社会に出てから	8	12%
f. その他（高校3年）	1	1%

3. 進学動機のなかで重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）

a. あなたが選んだ研究分野についてより深く学びたいと思った。	43	68%
b. 大学院での研究・教育が思考力の向上に役立つと思った。	13	20%

c. 将来、研究・教育職に就くことを希望していた。

21 33%

d. 企業等に就職する前に、もう少し学問を続けたいと思った。

15 23%

e. その他（専修免許を取得するため） 1 1%

（海外でのフィールドワークがしたかった）

1 1%

4. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念として
いますこれに関連して、あなたは文学研究科での授業、研究指導について、ど
のように考えますか？

a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。

27 42%

b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている

27 42%

c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも
言えない。

7 11%

d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。

1 1%

e. その他（自由の学風など教員のほったらかしの口実）

1 1%

5. あなたは文学研究科で学んだことに満足していますか？

a. 十分に満足している。 24 40%

b. それなりに満足している。 30 50%

c. どちらとも言えない。 6 10%

d. 後悔している。

e. その他

6. 4月以降の進路についてお聞きします。

a. 博士課程進学（他大学も含む） 27 48%

b. 博士課程進学の準備

c. 一般企業に就職	11	19%
d. 官庁、地方自治体等に就職	6	10%
e. 教員、司書等の専門職に就職	5	9%
f. その他（晴耕雨読）	1	1%
（就職活動）	2	3%
（美術館学芸員）	1	1%
（研究生）	1	1%
（留学）	2	3%

7. 文学研究科で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものを挙げてください。（複数回答可）

a. 専門的知識	32	50%
b. 専門分野の研究能力	36	57%
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	41	65%
d. 一般的な教養	19	30%
e. 国際感覚	11	17%
f. 外国語の能力	21	33%
g. リーダーシップ	2	3%
h. 社会的常識	8	12%
i. その他（日本語力）	1	1%
（バランス感覚）	1	1%

8. お差し支えなければ、あなたが属していた専攻をお教えてください。

東洋文献文化学	10
西洋文献文化学	5
思想文化学	13
歴史文化学	11
行動文化学	18
現代文化学	3

9. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。

・教務の方々には、早く社会人としての対応能力をつけて頂きたいです。後輩た

ちのためにもここでお伝えしておきます。

- お世話になりました。事務の窓口での対応がもう少し丁寧にしていただけると幸いです。
- ありがとうございました。
- 研究する上での語学力の重要性はこれから入ってくる学生に対してもっと強調すべきだと思う。
- 専門家の話ほどあてにならないということを知れたことが、大学院での一番の収穫だった。研究は社会人になってからも続けるつもりでいる。
- 自学自習の反面としてこちらから希望すれば教員の側からのフォローアップを常にいただけたので、非常にありがたい経験をさせていただきました。
- 教務掛の方の接し方が少し厳しいと思った。

1. あなたの出身大学・学部等についてお聞きします。	
a. 京都大学以外の日本国内の大学	11
b. 京都大学の他学部、研究科等	3
c. 京都大学文学部	38
d. 日本以外の大学	11
e. その他	
2. あなたが大学院へ進むことを決めたのはいつ頃でしたか？	
a. 学部入学後	14
b. 系分属後（2回生のとき）	2
c. 専修分属後（3回生のとき）	20
d. 4回生になってから	18
e. 大学卒業後、社会に出てから	8
f. その他	1(高校3年)
3. 進学動機のなかで重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？（複数回答可）	
a. あなたが選んだ研究分野についてより深く学びたいと思った。	43
b. 大学院での研究・教育が思考力の向上に役立つと思った。	13
c. 将来、研究・教育職に就くことを希望していた。	21
d. 企業等に就職する前に、もう少し学問を続けたいと思った。	15
e. その他	1(専修免許を取得するため) 1(海外でのフィールドワークがしたかった)
4. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念としていますこれに関連して、あなたは文学研究科での授業、研究指導について、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	27
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	27
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも言えない。	7
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	1
e. その他	1(自由の学風など教員のほったらかしの口実)

5. あなたは文学研究科で学んだことに満足していますか？	
a. 十分に満足している。	24
b. それなりに満足している。	30
c. どちらとも言えない。	6
d. 後悔している。	
e. その他	
6. 4月以降の進路についてお聞きます。	
a. 博士課程進学（他大学も含む）	27
b. 博士課程進学の準備	
c. 一般企業に就職	11
d. 官庁、地方自治体等に就職	6
e. 教員、司書等の専門職に就職	5
f. その他	1(晴耕雨読)
	2(就職活動)
	1(美術館学芸員)
	1(研究生)
	2(留学)
7. 文学研究科で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものを挙げてください。（複数回答可）	
a. 専門的知識	32
b. 専門分野の研究能力	36
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力	41
d. 一般的な教養	19
e. 国際感覚	11
f. 外国語の能力	21
g. リーダーシップ	2
h. 社会的常識	8
i. その他	1(日本語力)
	1(バランス感覚)

8. お差し支えなければ、あなたが属していた専攻をお教えてください。	
東洋文献文化学	10
西洋文献文化学	5
思想文化学	13
歴史文化学	11
行動文化学	18
現代文化学	3
9. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	
教務の方々へ、早く社会人としての対応能力をつけて頂きたいです。後輩たちのためにもここでお伝えしておきます。	
お世話になりました。事務の窓口での対応がもう少し丁寧にしていただけると幸いです。	
ありがとうございました。	
研究する上での語学力の重要性はこれから入ってくる学生に対してもっと強調すべきだと思う。	
専門家の話ほどあてにならないということを知れたことが、大学院での一番の収穫だった。研究は社会人になってからも続けるつもりでいる。	
自学自習の反面としてこちらから規模いすれば教員の側からのフォローアップを常にいただけたので、非常にありがたい経験をさせていただきました。	
教務掛の方の接し方が少し厳しいと思った。	

5. 文学研究科博士後期課程修了者アンケート

博士(文学)を取得される方へのアンケート

1. あなたが修士課程を終えた大学についてお聞きます。	
a. 京都大学大学院文学研究科	11
b. 京都大学の他研究科	
c. 京都大学以外の日本国内の大学	1
d. 日本以外の大学	1
e. その他()	
2. あなたが博士後期課程で学ぶことを決めたのはいつ頃でしたか？	
a. 学部入学後	2
b. 4回生になってから	3
c. 修士課程進学後	6
d. 修士論文作成中	
e. 修士課程修了後、社会に出るから	1
f. その他()	1(学部入学前)
3. 博士後期課程で学ぶ動機のなかで重要な位置を占めたのはどのような要因でしたか？(複数回答可)	
a. 修士課程で選んだテーマの研究をより深めたいと思った。	4
b. 博士後期課程での研究・教育が思考力の向上に役立つと思った。	3

c. 将来、研究・教育職に就くことを希望していた。	11
d. 企業等に就職する前に、もう少し学問を続けたいと思った。	
e. その他()	
4. 京都大学は「自由の学風」を伝統とし、「自学自習」を基本的な理念として います。これに関連して、あなたは文学研究科での授業、研究指導につい て、どのように考えますか？	
a. 自学自習の能力が十分に養われるような形で行われている。	6
b. 自学自習の能力がある程度養われるような形で行われている。	7
c. 自学自習の能力が養われるような形で行われているかどうか、どちらとも 言えない。	
d. 自学自習の能力が養われるような形で行われていない。	
e. その他()	
5. あなたは文学研究科で学んだことについて満足していますか？	
a. 十分に満足している。	6
b. それなりに満足している。	7
c. どちらとも言えない。	
d. 後悔している。	
e. その他()	

6. 4月以降の進路についてお聞きます。		
a. 大学・研究所等の研究(教育)機関に就職		5
b. 一般企業に就職		
c. 官庁、地方自治体等に就職		
d. 教員、司書等の専門職に就職		1
e. 日本学術振興会特別研究員		1
f. 研修員		
g. その他()		3(大学非常勤講師)、1(大学非常勤講師、聴講生を兼ねる)、1(海外留学)
7. 文学研究科で学んだこと、身につけたことで、今後役立つと考えられるものがありますか？(複数回答可)		
a. 専門的知識		12
b. 専門分野の研究能力		12
c. 自分で問題を発見し、解決を図る能力		9
d. 一般的な教養		2
e. 国際感覚		5
f. 外国語の能力		4
g. リーダーシップ		
h. 社会的常識		

i. その他	
8. お差し支えなければ、あなたが属していた専攻をお教えください。	
東洋文献文化学	3
西洋文献文化学	1
思想文化学	2
歴史文化学	4
行動文化学	2
現代文化学	1
9. その他意見・要望等がありましたら、ご自由にお書きください。	<p>自由でおおらかな気風のなかで自分なりの研究テーマに取り組めたこと、また先生方を通じて国内外の多くの研究者と出会う機会が与えられたことなど、この研究科ならではの経験に育てられたと思います。</p> <p>助手・助教の先生が各専修に必ず一人はいるという体制が整備される事を望んでいます。私自身の経験として、研究を行っていく上で、多くの課題・問題点に行き当たりましたが、技術的に非常に細かい問題の場合、教授・准教授の先生方や先輩の大学院生でも分からなという事がしばしばありました。その点、助手・助教のような間を繋ぐ先生方がいると、1.教授・准教授の先生方と比較して(年が近い分)尋ねやすい2.最新の研究上の実際的知識が豊富である3.教授・准教授の先生方と大学院生の間にある「研究技術上の「溝」を埋める役割をする(研究技術を継承している)」という可能性が高く、大学院生が実際に研究を進める上で非常に大きな役割を担うように思います。</p> <p>文学研究科の管轄を越える問題ですが、研修員制度が充実されることを希望します。すなわち、かつてのように、何年でもでき、研修料もかからない体制に展ることが望ましいと思われます。近年では、博士後期課程を出てもすぐには就職(※専門性を活かした研究職への)がなく、オーバードクターとして引き続き大学に在籍する人々が、私も含めて多くいます。そうした人々の研究生生活を支援する体制の充実を強く求めます。</p> <p>非常勤先生をつつけるのは困難なので、系でのポケットゼミにOD,PDを採ってくださいましたのは、非常に助かりました。</p>

ご協力ありがとうございました。[京都大学大学院文学研究科]

集計表

回生 質問	課程・						不明	合計
	修士		博士後期					
1. この授業はどのような形式でしたか。	1	2	1	2	3			
a. 学生が選んだ研究テーマについてディスカッションする形式	4	1	1	2		1	9	
b. 特定の文献・テキストについて、学生が発表することを中心にする形式	5		1	1			7	
c. 教員の講義を中心とする形式								
d. その他()								
2. あなたはこの授業にどれぐらい出席しましたか。								
a. 80－100%出席した。	7	1	2	3		1	14	
b. 60－79%出席した。	2						2	
c. 40－59%出席した。								
d. 20－39%出席した。								
e. 0－19%出席した。								
3. この授業が問題発見能力の向上に役立ちましたか？								
a. 大いに役立った。	6	1		2			9	
b. ある程度役立った。	3		2	1		1	7	
c. どちらともいえない。								
d. あまり役立たなかった。								
e. ほとんど役立たなかった。								
4. この授業が問題解決能力の向上に役立ちましたか？								
a. 大いに役立った。	6	1		2			9	
b. ある程度役立った。	2		2	1		1	6	
c. どちらともいえない。	1						1	
d. あまり役立たなかった。								
e. ほとんど役立たなかった。								

あとがき

平成 25 年度に京都大学は機関別認証評価を受ける。そのため、文学研究科においても、平成 24 年 10 月末までに自己点検・評価委員会の責任で自己点検評価レポートを指定された様々な観点に対して作成した。そのレポートの評価の適切性判断は外部の専門家によって評価されるべきであろうとの判断から、4 名の外部評価委員を委嘱し、外部評価委員会が構成された。時間的制約から、評価対象は教育の観点に絞り、外部評価委員に評価レポートを参考資料とともに送付し、評価を依頼した。そして、12 月 15 日に外部評価委員の先生方 4 名に、お出ましいただき、外部評価委員会を開いた。まず、学部生 6 名、大学院生 6 名との面談を行っていただいた。この面談の内容はすべて外部評価委員にお任せし、文学研究科から関係者は陪席していない。面談の後、文学研究科から、レポートについての説明を行い、それに続いて、評価委員の方たちの質問・討議があり、しかる後に評価・講評をお聞かせいただいた。本報告書は、その外部評価委員会の書き起こしと関連資料からなる。

評価・講評では評価レポートの適切性の評価を行っていただき、おおむね適切であるとの評価をいただいた。ただ、授業アンケートに関しては、多くの問題が指摘された。まず、非常に少数の授業に限って実施していること、アンケートの結果が学生に周知されないこと、アンケートの結果に基づいてどのような改善がなされたのかが公表されないことなどである。実際にはアンケートとその分析はホームページに公開されている。学生への面談では周知の仕方にさまざまな問題が指摘されておりこれもその一つと言えるだろう。そのほか女性教員の任用が少ないことも指摘された。

このような個別の事例以外にも、外国での例を引いての評価そのもののあり方に関する意見であるとか、大学のあるべき姿に関する考え方も披瀝され、有意義であったと思われる。米国では、教員の *tenure* の資格審査でさえ、外国人を含む外部評価者の意見を参考にきまる。私自身このような評価をなんとか行ったことがある。外部評価をそこまで徹底して行うことが必要であるか議論が分かれることかと思うが、将来はそのような事態にも対応できるよう準備しておかなければならないかもしれない。

外部評価は 2009 年に続いて 2 回目である。時間は前回より大幅に短くなったが、学生との面談をお願いしたのはよかったかと思う。非常に密度の濃い意見交換ができたと思じる。外部評価委員会の方に資料をお送りしたのは、会議の 2 週間前であった。この短い期間に評価の準備を行い、貴重なご意見をくださった 4 名の外部評価委員の方々にお礼を申し上げたい。また、会議、資料の準備をしてくださった事務方の方々にも感謝したい。

2013 年 1 月

京都大学大学院文学研究科 自己点検・評価委員会委員長
田窪 行則

京都大学大学院文学研究科・文学部

外部評価報告書

2013年●月

編集・発行 京都大学大学院文学研究科・文学部
〒606-8501

京都市左京区吉田本町

TEL 075(753)2700

FAX 075(753)2719

印刷・製本 株式会社 田中プリント

